



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書

第4年次

— 令和2年3月 —

学校法人 創価学園



創価高等学校



平成29年度指定 スーパーグローバルハイスクール

研究報告書・第4年次

令和2年3月

学校法人 創価学園



内容

1. 総論 1

- A) はじめに.....1
- B) 研究開発実施計画書および研究開発実施計画変更申請書.....2

2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP) 6

- A) 概要.....6
- B) SDGsを学ぶ(1年生).....8
- C) 貿易ゲーム(1年生)..... 11
- D) いのちの食べ方を問う(1年生)..... 14
- E) 世界がもし100人の村だったら(1年生)..... 17
- F) 模擬教育援助会議(1年生)..... 20
- G) SDGsカードゲーム(1年生)..... 23
- H) レイテ決戦から戦争とは何かを知る(2年生)..... 26
- I) 核兵器廃絶に向けて(2年生)..... 29
- J) 異文化理解(2年生)..... 33
- K) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)..... 36
- L) 人権すごろく(2年生)..... 39
- M) 人権ディベート(2年生)..... 42
- N) 模擬国連① COP21 (3年生)..... 46
- O) 模擬国連② 核軍縮 (3年生)..... 50
- P) ファイナル・プロジェクト (3年生)..... 53
- Q) UNHCR「WILL2LIVE 映画祭」学校パートナーズ上映会(3年生)..... 61

3. グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP) 62

- A) 概要・年間スケジュール..... 62
- B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)..... 65
- C) フィールドワーク 広島..... 67
- D) フィールドワーク 長崎..... 68
- E) ゲスト講義および都内フィールドワーク..... 70
- F) 出前授業..... 75
- G) 評価と分析..... 78

4. 言語技術 81

- A) 年間スケジュール..... 82
- B) 学習・トレーニング内容..... 84
- C) 評価.....103
- D) 成果および今後の課題.....108

5. フィールドワーク 110

- A) カリフォルニア.....110
- B) 岩手.....113
- C) 沖縄.....115

D) JICA 地球ひろば(市ヶ谷).....	117
F) 国立ハンセン病資料館(東村山).....	118
6. グローバルセミナー	122
7. 英字新聞(GCP)	125
8. 時間管理手帳	126
9. 評価と分析	128

1. 総論

A) はじめに

創価高等学校 校長 塩田誠一郎

本校は「日本の未来を担い、世界の文化に貢献する有為の人材を輩出すること」を目的として、池田大作先生により創立されました。「健康な英才主義」「人間性豊かな実力主義」の教育方針のもと、生命尊厳の理念に立脚しながら、生徒一人ひとりに内在している優れた能力を引き出し、限りなく豊かな人間性の開発を行い、生徒たちが自信を持って社会の指導者に成長していけるように教育活動をおこなっております。

2016年度には、グローバル人材像を「創価の精神の根本である『生命尊厳の思想』をもって、世界平和に貢献する『地球規模課題の解決』に寄与できる人材」と定め、SGH研究開発構想を「言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム」と掲げて、SGH校としての認定を受けました。

本校が開発したカリキュラムは、1年から3年まで言語技術を磨きながら、SDGsをもとに地球規模課題の探究学習を行うものです。週1回の言語技術の授業では、日本語と英語でのコミュニケーション能力、文章や情報を正確に読み解き対話する力、論理的な文章を書く力などを身につけさせ、探究学習の土台を作っています。その上で、二つの学習プログラムを開発し実施しています。一つは、全校生徒を対象にした探究学習プログラム「GCP」(Global Citizenship Project)であり、もう一つは、希望者から選抜した数十名を対象とする探究学習プログラムで、全校に展開する学習のパイロットケースにもなっている「GLP」(Global Leaders Program)です。

こうした取り組みにより、3年の3学期には探究学習の成果を小論文にまとめ、日本語と英語によるポスターセッションを行うまでになりました。その内容も昨年を上回るものになっております。また、この学習活動を通して、生徒が積極的になり、社会で起きていることや世界の出来事を自ら知ろうとし、積極的に係わりようとするようになってきております。事実、大きな国際会議に自分から参加するようになったり、海外語学研修のプログラムに応募する生徒が増え、トビタテ留学ジャパンに挑戦する生徒も増えました。

SGHの取り組みの中で、カリキュラム・マネジメントも進んでおります。言語技術では、小学校から高校まで一貫して行う言語技術のカリキュラムが検討され、「探究科」の取り組みでは、これまでの成果を発展させて新年度の1年生から年間を通して新たな探究学習のプログラムを実施することになっております。

これからも、創価高校は創立精神に則り「誰も置き去りにしない」社会を建設する世界市民を育成することを目的として、学校建設、SGH校としてのカリキュラム開発にとしっかりと取り組んでまいります。

最後になりますが、ご指導いただいている運営指導委員の無藤隆先生(白梅学園大学子ども学部名誉教授・元文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会部会長)、遠藤誠治先生(成蹊大学教授・日本国際政治学会監事・日本平和学会理事)、村上清先生(岩手大学学長特別補佐・陸前高田市参与)に心より感謝申し上げます。

また私どもの取り組みにアドバイスしてくださっている佐藤悟様(元中南米局長・外務省参与)、飯田順三先生(創価大学法学部教授)、さらに、提携していただいているカリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学をはじめとする国内外の大学、国際連合大学、ミドルベリー国際大学院モントレイ校、ジェームズ マーティン不拡散研究所などの国際機関、研究機関や各企業、さらに交流いただいている那覇国際高等学校、広島女学院高等学校、長崎・活水高等学校、関西創価高等学校などのSGH校や各学校の皆様に深く感謝申し上げるとともに、引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。

B) 研究開発実施計画書および研究開発実施計画変更申請書

研究開発実施計画書

住所 東京都小平市たかの台2番1号
管理機関名 学校法人 創価学園

代表者名 理事長 原田 光治 印

1 実施種別

- 幹事校
 幹事校以外 創価高等学校

2 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

3 研究開発の概要

- ①. 日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成
- ②. 全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成
- ③. 選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

4 事業の実施期間

契約日～平成31年3月30日

5 平成30年度の研究開発実施計画

(1) 「言語技術」

- 1・2年生において、年間1単位を「言語技術」（学校設定科目）の授業として実施する。授業は、国語科教員と英語科教員のティームティーチングで行い、日本語と英語による「言語技術」の往還トレーニングを実施する。
- コミュニケーション能力、論理的思考力・表現力、及び批判的思考力を育てることを目的に、1年生は「対話」「作文」「情報伝達」のトレーニングを、2年生は「情報分析」「認知」「議論」のトレーニングを行う。
- 毎回の授業の記録用紙を生徒自身でファイリングさせ、ポートフォリオを作成させる。学んだ「言語技術」や、活用できる場面等を記録させ、実生活に活かせるポートフォリオの作成を推進する。
- 後に記述のある、3年生GCP・ファイナル・プロジェクトの実施にあたり、小論文作成やプレゼンテーションの仕方について指導を行う。
- 学校全体で授業やLHRで「言語技術」を活用することを通して浸透させていく取り組みを行う。そのために、学校全体で言葉の運用ルールを作成する。またクラス担任および学年主任は、「言語技術」の授業に参加する。
- 放課後にクリティカル・ライティング・センター（CWC）を開設し、作文・小論文のきめこまやかな個別添削指導を行う。

(2) 協調的探究学習グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）

- 全校生徒を対象に総合学習の一環として行う。国連が提示する地球規模課題(Global Challenges)を中心にテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れ課題探究に取り組む。
- 1年生はSDGs・環境・貧困を、2年生は戦争・冷戦後の紛争・人権を、3年生は国際パートナーシップ（模擬国連）をテーマに設定する。
- 実施にあたっては、生徒で構成するGCPリーダーズが運営を担い、生徒が主体的に運営することで、リーダーシップと行動力を育む。
- 2年間の言語技術とGCPの集大成として、3年生は「ファイナル・プロ

ジェクト」を実施する。ファイナル・プロジェクトでは、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の 17 のゴール (SDGs) から各自がテーマを設定し、課題研究に取り組み、日本語・英語でのポスターセッションと、2,000 字以上の日本語論文と、英語による要旨の作成を行う。

- 3 年間の GCP 企画を通しての、ワークシートやレポート・論文等をまとめて、ポートフォリオを作成させる。
- 国内外の識者を招聘し、グローバルセミナーを開催する。
- GCP で探究した内容を英語で発表する場として、創価大学でイングリッシュ・キャンプを実施する。
- 希望者約 40 人を対象に、本格的な英字新聞の作成に取り組む。

(3) グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)

- 高校 2・3 年生の希望者から 16 名を選抜し行う。
- 「核廃絶」を中心に、より高度な課題研究に取り組み、GCP でも取り扱っている SDGs の内容と絡ませながら、研究成果と手法を学校全体へと還元していく。
- 毎週火曜日と金曜日の 18 時から 19 時 30 分に開講し、土日や長期休暇にも活動する。
- 講座では啓林館「課題研究メソッド」をテキストとし、調査のための手法と手順、およびプレゼンテーションスキルを向上させる。
- 言語技術のトレーニングや、専門家を招いての講義を行う。Skype などを用いたオンラインでの講義も行う。
- 核問題に関わる国内の施設や資料館を訪問し、研修を行う。
- デジタル・ポートフォリオへの取り組みを積極的に行い、資質能力の変容の調査にも活用する。

(4) 国内外でのフィールドワークの実施

- アメリカ・カリフォルニア (11 月実施・参加者 16 名)
SDGs のテーマに関して、3 ヶ月にわたり探究型学習を行い、現地高校生とともにプレゼンテーションやディスカッションを実施する。またテーマに応じて現地での調査を行う。
- 広島・長崎 (7 月実施・参加者各 8 名、合計 16 名)
被爆体験のインタビューや、現地での調査を行い、核問題への理解を深める。
- アメリカ・カリフォルニア (4 月実施・参加者 2 名)
高校生による核廃絶問題に関する会議であるクリティカル・イシューズ・フォーラム (CIF) に発表者として出席。
- 沖縄 (12 月実施・参加者 12 名)
第 2 次世界大戦の国内激戦地・沖縄にて、戦争体験のインタビューや沖縄県平和祈念資料館、ひめゆり平和祈念資料館での研修を行う。
- 岩手 (7 月実施・参加者 12 名)
岩手県葛巻町にて環境への自治体の先進的な取り組みを体験的に学ぶとともに、陸前高田市では被災体験を伺い、震災復興に向けての様子を学ぶ。
- 首都圏 (参加者各 20 名、合計 60 名)
各学年の GCP 企画を通して学んだ内容の理解を深める。1 年生：JICA 地球ひろば (市ヶ谷・7 月実施)、2 年生：国立ハンセン病資料館 (東村山・2 月実施)、3 年生：国連大学 (渋谷・12 月実施)

以上の取り組みに加え、次の取り組みも実施する。

- 中国 (上海)、アメリカ (カリフォルニア)、ブラジル (サンパウロ)、インド (ムンバイ) をはじめとした、海外高校生との平和・文化の意見交換会
- タイムマネジメント指導法開発

(5) 研究開発成果の普及に関する取組

- 中間報告会 (11 月) と年度実践報告会 (2 月) の開催
- 取り組みの様子を学校ホームページに特設サイトを設置し随時発信

研究開発実施計画変更申請書

平成29年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発実施計画を、下記により変更したいので、申請いたします。

1 変更事項

① 変更前

○1年生は環境・貧困・国際会議（模擬国連）を、2年生は戦争・冷戦後の紛争・人権を、3年生は貧困・紛争・性差別・環境・難民等をテーマにする。

② 変更後

○1年生はSDGs・環境・貧困を、2年生は戦争・冷戦後の紛争・人権を、3年生は国際パートナーシップ（模擬国連）をテーマに設定する。

2 変更の理由

学年ごとにテーマを設定して学ぶプログラムを考えていたが、1年のスタート時にSDGsについて網羅的に学び、3年次に模擬国連に取り組む中で多角的な視点で課題を深めていく流れが生徒の思考にとってスムーズであると判断したため。

3 変更が事業計画に及ぼす影響及び効果

1年次で具体的な地球規模課題に触れる機会を増やし、その後、段階を追って探究の手法を身につけることにより、3年次のファイナルプロジェクトの学習効果を高めることができる。構想の中にある3年間を通して世界市民を育むというGCPの目標達成によりふさわしい内容にすることができる。

【担当者】

担当		T E	042-342-2611
氏名	江間 宏治	F A	042-342-2617
職名	副校長	e-mail	ema@soka.ed.jp

2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

A) 概要

■ 概要

グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)は、全校生徒対象のSGH企画です。国連が提示する地球規模課題や「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17のゴール(SDGs)からテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決能力の育成を目指します。

企画は学期に2回ずつ実施しました。1年生は「SDGs」を学ぶ企画や、「格差」をテーマに「貿易ゲーム」や「模擬教育援助会議」などを行い、学びを深めてきました。2年生は、「戦争」や「現代の紛争」をテーマに、日米両国の核兵器をめぐる考え方の比較や、ルワンダ内戦の歴史的背景などについて学びました。3年生は、「国際パートナーシップ」をテーマとして、「COP21」「核軍縮」を舞台に模擬国連を実施し、全員が一国の大使となって交渉を重ねることで、国際協調の重要さと難しさを学びました。また3年生は、GCP企画の総括として課題研究「ファイナルプロジェクト(Final Project)」に取り組みました。これは各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行い、その成果をポスターセッションの形で日本語・英語の2言語で発表するもので、最後には2000字以上の論文にまとめました。また、Final Projectの準備として、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の授業において、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施しました。

本年は、すべてのGCP企画を一般公開し、多くの学校関係者・企業関係者・保護者にご見学いただきました。

■ GCPリーダー

GCP企画の運営は、教員ではなく希望生徒で構成されたGCPリーダーが担っています。本年度は前期に165人、後期159人の希望者が各クラスからリーダーとして選出されました。GCPリーダーは、各企画の前にリーダーズミーティングを行い、テーマについての学習や当日の企画のリハーサルをします。当日は試行錯誤しながらクラスでの企画を運営し、その中で、企画力やリーダーシップなどの育成を図っています。

■ 昨年度との相違点

①SGHの4年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができました。また、3年生の企画においては、最終回となる2月に国連UNHCR協会と連携し、「WILL2LIVE映画祭」の学校パートナーズ上映会を実施しました。現実の課題をリアリティーをもって訴えかけるドキュメンタリー映画の特性を生かし、地球規模課題を机上の空論だけで終わらせないという意志を確認しあう機会となりました。

②本年度は、高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」を「現代社会」の授業においては、授業担当者とは別に、「ファイナル・プロジェクト」担当教員を設け、チームティーチング形式で指導にあたりました。また昨年度に引き続き、「現代社会」だけでなく「現代文」「英語表現」の3科目が連携、指導の充実を図りました。

■ 年間スケジュール

		1年生	2年生	3年生
テーマ		貧困	戦争	模擬国連(1)
1学期	5月18日	グループ学習(ジグソー法) 国連が定めた「2030アジェンダ」について、ジグソー法を用いて理解を深め、地球規模課題への関心を高める。	VTR学習 第二次世界大戦時のフィリピン・レイテ島決戦をめぐる日本兵・アメリカ兵・フィリピン人の戦争証言を通して戦争の実態を学ぶ。	模擬国連レクチャー・準備 模擬国連のやり方を学び、議題について学習したり、国別にスタンスペーパーやスピーチなどの準備を行う。
	6月15日	貿易ゲーム 「先進国」「新興国」「発展途上国」の3つの立場から世界の貿易や格差を疑似体験し、協調して課題解決に取り組む。	グループ学習(ジグソー法) 原爆投下による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る。	模擬国連 6人1組のチームをつくり、「気候変動枠組み条約(COP)」を議題に15か国の担当に分かれて模擬国連をクラスごとに開催する。
テーマ		環境	異文化理解・現代の紛争	模擬国連(2)
2学期	10月16日	いのちの食べ方を問う 食肉の加工過程を振り返りながら、身近な食品ロスの現状からバーチャルウォーター、フードマイレージなどの環境問題を考える。	留学生交流 創価大学に学ぶ留学生約50名に來校していただき、交流を行う中で、異文化に触れ、理解を深める。	模擬国連 仮定の国を設定し、「核軍縮」をテーマに模擬国連をクラスごとに開催する。
	11月30日	ロールプレイ 「世界がもし100人の村だったら」をテーマにロールプレイを行い、国際社会が抱える格差について体験的に学ぶ。	グループ学習(7ツブシ)・ 第二次世界大戦後の世界の紛争についての実態(ルワンダ内戦における“大量虐殺”)を知りなぜ過ちは繰り返されてしまうのかを考える。	
テーマ		格差・国際パートナーシップ	人権	Final Project
3学期	1月18日	模擬教育援助会議 途上国側と援助国側に分かれて、模擬教育援助会議をクラスごとに実施。途上国の教育の現状と教育援助のありかたを考える。	グループ学習(人権すごろく) 「人権すごろく」「世界人権宣言」を通して、長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきた人権への理解を深める。	Final Project ポスターセッション アジェンダ2030・SDGsの中からテーマを選び、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の協同で日本語・英語によるポスターセッションと論文作成に取り組む。
	2月22日	SDGs Card Game 本校が開発したSDGsを体験的に学ぶためのカードゲームを実施。先進国・新興国・途上国の9か国にわかれ、自国の課題や地球規模課題を連携・協力して解決していくゲームを通して、SDGsについて学ぶ。	ディベート ディベートを通して身近な人権について考える。また創立者の人権闘争を学び、生活の中で他者の人権を尊重するための方途を探る。	UNHCR WILL2LIVE映画祭 学校パートナーズ上映会「シリアに生まれて」 国連UNHCR協会が主催する「WILL2LIVE映画祭」の学校パートナーズとして上映会を開催。「シリアに生まれて」を鑑賞する。

◆ GCP リーダーズ生徒感想

「私は一年間 GCP リーダーズとして活動しました。初めは“SDGs”という言葉すら聞いたことが無かったのですが一年間の活動を通して、様々な国際問題は自身の近くにあることを学びました。また運営に携わる中で、最初は苦戦することも多く、スムーズに進められないこともありましたが、回を重ねるうちに、だんだん力がついてきていることを自覚することができました。」

「GCP 企画を通して学んだことは、平和を築く上で必要なことは“知る”ことだということです。レイテ島での決戦やルワンダ内戦のことなど、私は全然知りませんでした。でもこうした悲惨な歴史を知らなければ、いくら平和について考えても、平和を築くことはできません。GCP はアクティブラーニングをベースにし、友人と一緒に課題に取り組みます。また、生徒が進行を行うため、より深く、主体的に学ぶことができます。これからも GCP リーダーとして一人一人の平和に対する意識を向上できるように努めていきます。」



B) SDGsを学ぶ(1年生)

■ 概要

5月18日に行われた第1回目は、1年生の最初の企画となるので「SDGsを学ぶ」をテーマに、3年間のGCP企画を貫く「SDGs」について学びました。世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030年を目指して国連が採択した「2030アジェンダ」の概要と「SDGs」の17のゴールについて、その意義や内容を理解することを目標として行いました。

導入として、「平和とは？」や「世界が抱える課題」など、生徒が中学卒業までに得てきたイメージや知識を確認するためにブレインストーミングを行いました。その後、SDGsについての資料をもとにグループごとに学習し、関心をより高めるために17のアイコンを線で結ぶアクティビティを行いました。更に、国連広報センターが作成した4分程度のSDGsの広報映像を視聴し理解を深めました。

続いて、ジグソー法を用いてSDGsに関する世界の現状を学びました。まず、エキスパート班に分かれ、担当するゴールを選択し、iPadと資料を用いて「A:ゴールに対する世界の現状」「B:どの地域で特に課題となっているか」をポイントに理解を深めました。その際に用いた資料は、国連広報センターが発表している「SDGs進捗状況報告」をもとに作成したものです。エキスパート班で学習を進めた後、エキスパート班から一人ずつが集まったジグソー班に分かれ、各エキスパート班で得た情報を持ち寄り、それぞれのゴールがどのように関係し合っているのかリンクマップを作成しながら探っていきました。環境問題、貧困問題、教育格差など、それぞれ別の問題のように見えていたものが、リンクマップを作成することで、関係し合っていること、また特にサハラ以南アフリカなどで共通して課題になっていることなどがはっきりと浮き彫りになりました。最後に、SDGsの中から自身が最も関心のあるテーマを選ぶとともに、「2030アジェンダ」の前文を読み合わせし、「貧困が最大の課題である」とされていること、また「誰一人取り残さないこと」が理念であることを確認しました。

◆ 生徒感想

「同じ地球でも、文化や場所、環境によって格差があることが分かり、今こうして行けていける一つ一つがとても豊かで感謝しなければならず、アフリカなどに視野をしっかりと広げて、自分たちのできる募金などに協力できたらいいなと感じました。」

「貧困は大きな課題となっていると分かった。貧困の解決には、まず教育を受ける環境を整えることが大切になると思う。SDGsでは『誰も置き去りにしない』というのが大事だと感じた。そのために、SDGsのことを心がけていきたいと思った。その中でも、自分たちができることは少なからずあると思うので、できることから少しずつでも貢献していきたいと思った。」



● ワークシート(例)

ワークシートC Global Competence Project (2015.5.18)

Work④ 世界の現状を知ろう

◇ エキスパート班のメンバー


担当するゴールは 1 番の **貧困をなくそう**

◇ エキスパート班Workの手順

- ①資料を読んで読み、検索キーワードやヒントをもとに、担当するゴールの現状について理解しよう。ゴールの説明ではありませぬ。理解・説明するポイントは、A: ゴールに対する世界の現状、B: どの地域で最も深刻な状況になっているのか、です。
- ②シグゾーンに分かれた年、年齢の範囲は一人1分半です。1分半でまとめられるように、情報を絞りましょう。また、一人で説明できるようにしっかりと理解をメモしましょう。その中で、自分なりのキーワードをプリント下の欄に書き出しおきましょう。
- ③最後に、社員で共通のキーワードをらつ決め、相簿に書きまます。そのキーワードをもとにシグゾーン道で説明します。説明は、相手に伝わるように、実際にポイントを押さえて、目を見て説明しましょう!

◇ メモ

エキスパート班で話したり調べたりした内容をアイコンの周りにメモしよう



◇ キーワード (8個以上記入しよう)

エキスパート班で、よく読み合わせるとともに、スマホ等を用いて分からない用語は調べておこう。黄色のマーカ一部分は検索キーワードです。

目標 1: あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ

【ゴールの説明】

目標 1は、今後 15 年間に、極度の貧困を含め、あらゆる形態の貧困に終止符を打つことを求めています。最貧層、最も脆弱な立場にある人々を含め、世界各地の人々が、基本的な生活水準と社会的保護の恩恵を受けられるようにすべきです。


【ゴールに対する世界の現状】

- 世界人口のうち、極度の貧困ライン未満で暮らす人々の割合は、2002 年から 2012 年にかけて 26%から 13%へと半減しました。つまり、2012 年の時点で、全世界の 8 人に 1 人が極度の貧困の中で暮らしていたこととなります。貧困が蔓延しているサハラ以南アフリカでは、2012 年になっても、1 日 1.90 米ドル未満で暮らす人々が全人口の 40%を超えています。
- 2015 年の時点で、世界の労働者とその家族の 10%は、1 人当たり 1.90 米ドル未満で暮らしていますが、2000 年にはこの割合が 28%に達していました。
- ワーキングプアとなる可能性が最も高いのは、15 歳から 24 歳の若年層です。2015 年の時点において貧困ライン未満で暮らす若年雇用者の割合は、成人の 9%に対し、16%と高くなっています。
- 低所得国で何らかの社会扶助または社会的保護を受けている人々の割合は 5 人に 1 人と、上位中所得国の 3 人に 2 人と比べて低くなっています。

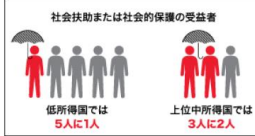
【ヒント】

- なぜサハラ以南アフリカで貧困が蔓延しているのか？
- 貧困ラインの生活とはどのようなものか？
- 低所得国ではどのような社会扶助が受けられないのか？


2012年には8人に1人が極度の貧困状態に



社会扶助または社会的保護の受益者



低所得国では 5人に1人
上位中所得国では 3人に2人



● 貧困をなくそう

● 飢餓をゼロに

● すべての人に健康と福祉を

● 質の高い教育をみんなに

● ジェンダー平等を実現しよう

● 安全な水とトイレを世界中に

● 1人1村をみんなにそしてクリーンに

● 働きがいも経済成長も

● 産業と技術革新の基盤をつくろう

● 人や国の不平等をなくそう

● 住み続けられるまちづくりを

● つくる責任 つかう責任


● 気候変動に具体的な対策を

● 海の豊かさを守ろう

● 陸の豊かさを守ろう

● 平和と公正をすべての人に

● パートナーシップで目標を達成しよう



GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年5月18日(土) ①8:55~9:45 ②10:00~10:50		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	SDGs	本時の題目	SDGs とは何かを知る	
本時の目標	第一回目の GCP 企画となる本時では、現在世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030年を目指して国連が定めた「2030 アジェンダ」と、その中で示された SDGs について学ぶ。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
展 開	①今日の目標を確認。 ※配布物あり	ファイル等を配布する。 GCPファイル・表紙・「ワークシートA」	3	開始前に、8グループに分かれ、机を移動。
	②個人 Work	「Work①平和とは?」に取り組む。	1.5	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる
	③グループ Work	「Work①」に記入したことを共有し、3人以上が同じものには○をつける。	3	
	④個人 Work	「Work②世界が抱える課題」に取り組む。	1.5	
	⑤グループ Work	「Work②」に記入したことを共有し、3人以上が同じものには○をつける。	3	
	⑥SDGs について説明	PPT を使い、SDGs とは何かを説明する。	10	
	⑦グループ Work	「Work③SDGs とは?」①~③グループで取り組む。		
	※配布物あり	「ワークシートB」を配布	3	
	⑧答え合わせ	PPT でもアイコンを表示する。	4	
	⑨VTR 視聴	国連広報センターの SDGs の VTR を観るそれぞれのゴールについて理解を深める。		
	⑩マップ作成までの流れ説明 ※配布物あり	エキスパート班とジグソー班の説明。 グループの代表者を呼び、担当するゴールを選ぶ。 封筒(ワークシートC、付箋)	4	
⑪エキスパート班 Work	資料と各自のスマホを活用し、キーワードの抽出を進める	25		
10分休憩(10:10~後半スタート)				
	⑫ジグソー班 Work ※配布物あり	⑫ジグソー班に分かれる A2 の用紙、のり、各アイコン、中心アイコン 各ゴール 1分半で説明する。説明後、マップを作成。	40	30分~40分 各クラス様子を見て進行してください
ま と め	⑬学んだことを Work に記入	各自、「関心のあるテーマ」、感想を Work⑤に記入 ※ワークシートB の裏面	5	10:40 までには必ずスタートする
	⑭「2030 アジェンダ」前文を読みあわせ	「貧困が最大の課題であること」、また「誰一人取り残さないこと」が世界の目的であることを確認する。	5	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りの SHR 等を活用してください
	⑮ワークシートの回収と GCP の年間予告と次回予告	GCP リーダーズがワークシートB を回収し、51期生の一年間の企画について簡単に説明をする。また次回(6月16日)の GCP 企画の予告を行なう	3	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCP リーダーは事前のミーティングで企画内容を理解しておく。 ・ グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・ 担任には、初めての GCP 企画のため GCP リーダーズの進行のサポートをしていただく。 			

C) 貿易ゲーム(1年生)

■ 概要

「格差」や「貧困」について体験的に学ぶために「貿易ゲーム」を行いました。この貿易ゲームは、5～6人の班で1つの国になり、紙やハサミなどの与えられた材料を用いて、力を合わせて、“マーケット”で売ることができる製品を作り、できるだけたくさんのお金を稼ぐことを競うゲームです。「暴力以外は何でもしてよい」というルールの下、生徒の自発的な発想を大事にしました。このゲームの最大のポイントは、各国に与えられる道具と材料には大きな格差があり、それが、先進工業国・開発途上国・発展途上国の格差を表しているということです。生徒は、他の国がどれだけの道具と材料を与えられているか、お互い知らない状態で始め、徐々に理解していきます。作った製品をいつどのタイミングで金と交換するのも全て各国に任せられており、突然に製品の値段が変わるという「市場価格の変化」を起こすことで、世界で起きている理不尽な貿易の現状も体験的に理解することができました。最後に、このゲームの終了も突然、司会から言われます。そして、最終集計を行い、どこの国が一番お金を儲けたのか発表します。同じルールの下でも、あらかじめ不平等な条件を設定しておくことで、豊かな国はより豊かに、貧しい国はより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することができました。



◆ 生徒感想

「この簡単な貿易ゲームを通して、この世界の現在の現状など様々なことを深く考え、体感できた。」

「現代社会では、様々な格差のある国があり、国内でも多くの格差があることがわかり、現代社会の問題点をしっかり理解することができた。どうしたら世界の格差がなくなり、平等になるのかとても気になった。」

「国の格差、貿易における難しさや交渉の大切さ、現実にはこのゲームを置き換えた場合の社会の苦しさ、世界における国々の現状や持っているものの違いを学び、国と国との協力がなかなか行われない理由や国の悪い部分などを実感するきっかけになった。」

「交渉がすごい大事で、立場の違う人どうして話す難しさを感じた。対話が大事と言うけれど、実際にそういう力が必要だと思った。」

Work 振り返り

1年	組 ()	氏名		
国民				

① 渡された袋の中には、何が入っていましたか？

② ゲーム終了時、いさらの駆けかありましたか？ () 対し

③ 次のものは、それぞれ何を表していたと思いますか？

鉛筆、定規、リケシ、コシバなど→

紙→

④ このゲームの勝因・敗因はなんでしたか？

⑤ ゲームで起こった出来事を選んで○をつけましょう。

出来事	起こった	現実の国際社会
A：袋の中が国によって違った		
B：ゲームのルールは全ての国で同じだった		
C：製品の規格（形）は全ての国で同じだった		
D：途中で製品の価格が変わった		
E：他の国と協力して製品を作った		
F：他の国に働きに行くと、賃金をもらった		
G：正当な賃金ではなく、強い国によって働かされた		
H：紙の切れ端がたくさん出た		
I：他の国や国連から資金や道具を支援してもらった		

ワークシート（例）

⑤ ④で○をつけた項目は、現実の国際社会の何を表わしているのか、次の中から選び、④の表の「現実の国際社会」の欄に書き込みましょう。説明をよく読んで考えよう。

グローバルスタンダード	電化製品は国際的に規格を統一され、人々の服装や食生活なども地域的な特色がなくなってきました。
環境問題	過剰な生産と消費の繰り返し、資源の無駄遣いや環境破壊につながっています。
援助（国際協力）	国際協力には、国が行う政府開発援助（ODA）や国連が行うもの、多国籍で行われる支援以外にも、さまざまな組織、団体、機関、そして市民が関わっています。
国際分業	貿易を通じて国際間で行われる分業。台湾、韓国、タイなどの国々から供給された部品を組み合わせてつくるパソコンなどはこれにあたります。
植民地化	分業とは異なり、力のある国が弱い国を支配する関係は、植民地化を意味します。かつての日本のアジア植民地化も、資源や労働力の確保という側面を持っていました。
移住労働者（外国人労働者）	他の国へ出稼ぎに行く「移住労働者」、現実では、現地人の労働条件の悪いや、生活習慣の違いからストライクなど、さまざまな問題をかかっています。
市場価格の変化	先進国は新たな技術の特許などで守り、商品の価値を維持します。その中で、途上国の工業生産は、先進国の新製品によって経済発展が困難です。
自由貿易	自由に製品をつくり、売ることができると自由貿易は、開発途上国を不利な立場に追いやり、南北格差を助長する構造的問題を抱えています。
南北格差 南南問題	1960年代に入って顕著になった先進資本国と発展途上国の経済格差。豊かな国が世界地図上の北側に、貧しい国が南側に属することに由来します。近年では、発展途上国の中でも、エチオピアなどの資源保有国と非資源国との間には大きな経済格差が生じており、これを南南問題という。

⑥ ゲームを終えて、感じたこと、考えたことを書きましょう。



GCP 企画(1年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年6月15日(土) 10:00~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	格差・貧困	本時の題目	貿易ゲームの実施	
本時の目標	「貿易」を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解するとともに、自由貿易や経済のグローバル化が引き起こす諸問題に気づく。また、南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力や一人一人の行動について考える。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
開 始 前	①グループ分け ②GCPファイルの配布	座席を班の形にし、グループのキャプテンにくじを引いてもらい、グループごとに着席全員にGCPファイルを配布する		前日までにグループ分けをし、グループを発表しておく
導 入	①本日のGCP企画の説明	前回の振り返り(SDGsの復習)と本時の内容について説明する	5	パワーポイント使用
	②ルール説明	貿易ゲームの進め方などをリーダーズが説明し、道具を配布する	5	道具の入った袋(紙、はさみなど)
展 開	③作戦会議	袋の中身を確認し、「ルール」を読んで作戦会議を行う	5	司会は巡回し、各Gの相談に乗ってもよい。
	③ゲーム開始 ※4人1グループ	与えられた道具などで製品を作成する	20	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	④貿易の状況変化1	長方形の値段が暴落。	5	国連から5分と時間を限定して貸し出す。
	⑤支援	途上国(E~H)班に追加の道具を配布する	5	
	⑥新資源の発見	途上国G・H班に追加の紙を渡す	5	
	⑦貿易の状況変化2	正三角形の値段が暴落。新たな製品(正六角形)の規格を加える	15	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	⑧ゲーム終了 集計・結果発表	ゲームの終了を伝える 金額を数え、順位を決める ゲームの感想を優勝班、最下位班のリーダーが発表する	7	スタート時の中身、金額が何倍に増えたか共有
		10分休み	各クラスで10分間の休憩をとる	
ま と め	⑨振り返り1	班ごとに振り返りを行う Workの①~⑥に班ごとに取り組む	15	ワークシート配布
	⑩振り返り2	パワーポイントを用いて「南北格差・南南問題」について、解説を加える	5	
	⑪ワークシートの回収	次回の予告	2	ワークシート回収
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先に貿易ゲームを体験し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				

D) いのちの食べ方を問う(1年生)

■ 概要

10月16日に行われた第3回目の企画では、「いのちの食べ方を問う」をテーマに、SDGsのゴールの中の1つである「つくる責任・つかう責任」について学びました。

プログラムは、①お肉はどこからやってくる？②ここにも牛がいる？③食肉センターで働くということ④牛肉が地球を食べると設定し、「いのちを食べることに関わる、地球規模課題について考える」ことを目標としました。

グループで話し合いながら、牛肉の生産過程について学び、その過程の中で、食品以外にも身近に牛を利用した製品が、数多くあることを学び、いのちを大切にに使わせていただいている現実を学びました。また、動画鑑賞を通して食肉センターで働く人たちの思いに迫り、いのちをいただくことの有り難さを学びました。そのうえで、牛肉1kgを得るためには、11kgの穀物や15トンの水が必要であるという現実を学び、“牛肉を食べる”という行為が地球規模課題を引き起こしている事実について考えを深めました。最後に、“フードマイレージ”や“バイオ燃料・穀物不足”、“バーチャルウォーター”などについて、代表生徒が事前に調べてきたことについて発表を行い、地球規模課題についての理解を深めました。



◆ 生徒感想

「今回の企画では、牛(牛肉)に絞って問題について考えたが、牛肉だけでもこんなに環境に害を及ぼし、破壊しているのに他の肉や乳牛、穀物の問題を考えると、もっと深刻なことになっているだろうと思いました。この問題を解決するには、先進国が貧困国を救うところから始め、先進国がどれだけ潤うかではなく、世界の国全てが不自由な暮らしができることを目指すべきだと思いました。そして、そのために食について見直し無駄な動きを省いて地球の環境を守ることも大事だと思いました。自分も出来ることを1つずつしっかりとやっていきたいです。」(1年男子)

「私は普段『食』というものにあまり関心が無くて『食べられれば何でも良い』みたいなスタンスで日々を生きてしまっているなあとということに改めて気付くことが出来たと思います。ただ食べるというだけではなく、そこに隠されている地球規模課題に意識的になって自らの食生活を見直すというのもとても大切だと感じ、食べ残しをしない、なるべく捨てないということ以外にも自分に何か出来ることはないだろうかと思案する1時間でした。もっと学びたいです。」

ワークシート(例)

GCP 企画 第3回 いのちの食べ方を問う


年 組 番 名前 _____

GCP 企画 個人ワークシート


①お肉はどこからやってくる？

- あなたの好きな牛肉の料理は何ですか？
- お肉ができるまで(牛肉の生産過程)について、以下のアからエを正しい順番に並べ替えましょう。

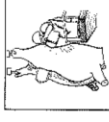
ア



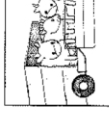
イ



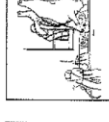
ウ



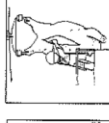
エ



オ

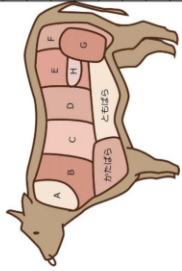


カ



○ → ○ → ○ → ○ → ○ → ○ → ○

3. 私たちが食べている、牛肉(精肉)の部位を確認しましょう。



部位	名称	使われる料理
A		シチュー、挽き肉
B		カレー、シチュー
C		すき焼き、ローストビーフ
D		ステーキ、しゃぶしゃぶ
E		ステーキ、ローストビーフ
F		ビーフストロガノフ
G		ステーキ、たたき
H		ステーキ

<選択肢>
ヒレ、ランプ、そともも、うちもも、サーロイン、リブロース、肩、ネック

②ここにも牛がいる！

- 身の回りがある、牛の各部分を用いて製造されている製品を挙げてみよう。
- 食肉センターで働く人たちの思い ※ () の中に適する語を入れてみよう。
仕事をするときには、
「() 以外は無駄にしない」
と云いながら、牛の命への感謝の思いを確認している。

③食肉センターで働くということ

※以下に、動画を見て学んだことや、考えたことを記入しよう。

④牛肉が地球を食べる ※以下の地球規模課題について、学んだことを記入しよう。

○フードマイレージ (環境)

○穀物飼料 (貧困)

○バイオ燃料・穀物不足 (経済・貧困)

○バーチャルウォーター (貿易・環境)

☆☆ まとめ ☆☆☆

①今日の GCP 企画で学んだこと、考えたことを記入しよう。

②関心があると思った地球規模課題を1つ選び、理由とともに記入しよう。

関心を持った地球規模課題 : _____

関心を持った理由 : _____

GCP 企画(1年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年10月16日(水) 14:45~15:50 (65分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	持続可能な生産・消費	本時の題目	いのちの食べ方を問う	
本時の目標	私たちの生活が多くのいのちの上に成り立っている事実と向き合い、そこに関わる人々の思いやいのちを失う動物たちの実態を学ぶ。牛肉を育てる飼料は途上国の人々が食べる穀物を圧迫し、穀物を育てる水は各地で水不足を引き起こしている。牛肉をめぐる起こっている地球規模課題について学ぶ。			
項 目	項 目	授業の進行内容（発問も）	時間 (分)	留意点・準備・その他
導 入	目標の確認(2分)	本時の目標「いのちを食べるに関わる、地球規模課題を考える」を確認	2	開始前に、グループに分かれ、机を向かい合わせにする。
展 開	①お肉はどこからやってくる? (16分)	好きな牛肉料理を記入する 牛肉の生産過程を考える 650kgの牛から、精肉が何kg取れるかを考える お肉の部位を確認する 精肉以外の部位について確認する	1 6 2 5 2	パワーポイント使用
	②ここにも牛がいる! ? (10分)	共通するものは何か? (牛を原料とした製品の確認) 牛の各部分を用いて製造されている製品を挙げてみよう 食肉センターで働く人たちの思いを学ぶ 牛を無駄にしない気持ちを学ぶ	2 5 2 1	
	③食肉センターで働くということ (3分)	食肉センターで働いている人たちのインタビュー動画を鑑賞 動画から学ぶべき思いを確認 (いただきます。ごちそうさまへの思い)	2 1	
	④牛肉が地球を食べる (26分)	牛肉の生産地を確認(国内生産・輸入率) 牛肉クイズ(全5問) 牛肉を食べることによって起こっている地球規模課題について説明する (フードマイレージ、穀物飼料、バイオ燃料・穀物不足、バーチャルウォーター)	1 15 10	
ま と め	⑥学んだことを振り返る (3分)	学んだこと、考えたことをワークシートに記入	3	ワークシート回収
	⑦地球規模課題についての関心を深める (2分)	関心があると思った地球規模課題を1つ選び、理由とともに記入	2	
	⑨ワークシートの回収			
事 前 準 備	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCPリーダーは説明会において、企画内容を理解し、役割分担を決める。 ・ 地球規模課題(4項目)の担当者は、課題について調査してスライド作成し、発表練習をしておく。 ・ 前日までにクラスを8グループに分け、教室に掲示する。 ・ 授業開始前に、グループ毎に机を向かい合わせにし、ワークシートを配布する。 ・ 担任は GCPリーダーズの進行のサポートをする。 			

E) 世界がもし 100 人の村だったら(1 年生)

■ 概要

11/30(土)に合計 70 分をつかって実施した「世界がもし100人の村だったら」は、人口 73 億人の世界を「100 人の村」に見立てて、世界の現状を分かりやすく描いた「世界がもし 100 人の村だったら」を題材に、世界の現実をシミュレーション(疑似体験)という参加型の方法で体験する企画です。目的は、世界の現状を理解し、自分との関係に気づくことである為、問題の原因追及や、解決は深く掘り下げず、生徒自身の興味・関心を高めることを目標としました。

「人口」「性別」「年齢」「大陸」「言語」「識字」「格差」の 7 つのテーマについて、ワークシートを用いて学び合いを行いました。

まず始めに、役割カードを全員に配布し、一人一人の役割を決めます。この時に、他人に自分の役割カードを見せないことを徹底させ、これから行うシミュレーションに対して、新鮮な驚きが得られるように配慮しました。

「人口」では、世界の人口をクイズ形式で学び、なぜ人口増加が起きているのかを班で話し合いながら考えました。「性別」では、男性と女性、どちらが多いのか、役割カードに従って窓側と廊下側に分かれ、男女が同じ割合であることを確認しました。同様に、「年齢」では、世界は今、高齢化なのか若年化なのか、「大陸」では、大陸別の人口分布、「言語」では少数言語について、「識字」では文字が読めないということ、「格差」では所得が多いのは誰か、をそれぞれ役割カードに従って体験的に学びました。実際に体を動かしながらの学びであったこと、クラスを世界に見立てたため、身近に感じる事ができたことなど、生徒の理解を深めることができました。



◆ 生徒感想

「私たち日本人は毎日当たり前裕福な暮らしをして学習もでき、文字も読めているが、このような暮らしができるのは世界中で数%だと知り、改めて途上国との格差を痛感した。特に、今回は実際に文字が読めない立場を演じ、『文字が読める』ということ自体、本当に恵まれていて、幸せなことだと気付くことができた。貧困の国の人のために、今私たちは教育を受けているということから実感できた。」

「インドで 4000 万人、中国では 5000 万人、女性の人口が男性よりも少ない理由にとっても驚きました。いとも簡単に女兒が殺されたり、病気になっても病院に連れて行ってもらえなかったりする事実を知り、本当に悲しく思いました。そして、このような世界を変えなくてはならないと心から思いました。そのためにも、今できる勉強を全力で頑張ろうと思います。」

ワークシート(例)

2019.11.30
SOKA Senior High School GCP

Work「世界がもし100人の村だったら」

【Work 1】世界の人口	解説&ME
① 日本では、人口増加が起きているか？ (Yes No)	
② 世界の人口増加の原因は何だろうか？ 自分たちの考え	解説&ME
③ 世界の人口増加の結果、どんなことが起こるだろうか？ 自分たちの考え	解説&ME
【Work 2】女性と男性、どちらが多い？	
世界の国で、インドでは4000万人、中国では5000万人、女性の人口が男性よりも少ないと言われていますが、なぜだと思いますか？ 自分たちの考え	解説&ME
【Work 3】世界は今、高齢化？若年化？	
なぜ、アジアでは子どもの割合が高く、日本では大人の割合が高いのか考えてみよう。 自分たちの考え	解説&ME
【Work 4】所得が多いのは誰？	
なぜ、世界にはこのような不公平があるのか？ 自分たちの考え	解説&ME
【Work 5】大陸の人口	
() で人口密度が高いとどのような問題があるのか考えてみよう。 自分たちの考え	解説&ME

2019.11.30
SOKA Senior High School GCP

【Work 6】世界の言葉で「こんにちは」

① 1位 () 語、2位 () 語、3位 () 語、4位 () 語	
② なぜ1位～4位の言語は、言語人口が多いのだろうか？ 自分たちの考え	解説&ME
【Work 7】文字が読めないということ	
① 文字が読めない、どんな不便さがあるだろうか？ 自分たちの考え	解説&ME
② どのような国で識字率が低いのか？ 自分たちの考え	解説&ME
③ ②について、それはなぜなのか？ 自分たちの考え	解説&ME

【振り返り】今日のGCP企画で最も印象に残ったものは何でした？学んだこと、考えたことを記入しよう。

.....

.....

.....

.....

.....

高校1年 組 番 氏名

GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年11月30日(土) 10:00~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	世界がもし100人の村だったら	
本時の目標	世界の多様性と格差の現状について、体験型ワークショップを通して体感的に理解する			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
21日(木) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	60	
導入	① 企画の説明	本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
展開①	②世界の人口	役割カードを配布 3人1グループになる クイズ。「Work1」に取組む。	5	他の人に見せないように伝える。偶数にする。 スライドに映す
	③女性と男性、どっちが多い?	役割カードの情報に従って、男性と女性に分かれる。それぞれの人数を数え、同じであることを確認する。「Work2」に取組む。	5	
	④世界は今、高齢化? 若年化?	役割カードの指示に従って動いてもらう。 日本の場合もやってみる。 世界と日本の違いについて考えてみる。 「Work3」に取組む。	10	
展開②	⑤大陸ごとの人口	大陸ごとにグループに分かれ、ひもを使って床に大陸の形を作り、グループごとに、ひもで作った大陸の中に入る。「Work4」に取組む。	10	ひもはあらかじめ、表(本)を参考に、大陸ごとの長さで輪しておく。
	⑥世界の言葉で「こんにちは」	役割カードに書いてある挨拶の言葉を、声を出して言いながら、同じ挨拶をしている人を探す。「Work5」に取組む。	10	挨拶の言葉が同じでも言語が異なることを説明する。
	⑦文字が読めないということ	ネパール語で書いた紙を全員に見せる。文字が読めなかった人に、司会から指示を出し、透明のペットボトルから「薬」を一つ選んで持ってくるというシミュレーションを行う。 「Work6」に取組む。	15	病人役の人には、飲んだ後に態度で示してもらう。(臨場感が出る)
まとめ	⑧所得が多いのは誰?	役割カードの記号△、□、○、☆、▽に従って、グループに分かれる。各グループにお札を配布し感想を聞く。「Work7」に取組む。	15	お札は事前に割合ごとに枚数を数えて準備しておく。
	⑨振り返り	「世界がもし100人の村だったら」を読む 今回行ったシミュレーションの中から最も印象に残ったものは何か。感想などを記入。	10	
	⑩(時間があれば)共有		5	
	⑪ワークシートの回収と次回予告		2	

F) 模擬教育援助会議(1年生)

■ 概要

今回行った模擬教育援助会議は、①導入②会議③質疑応答④被援助国の主張⑤班での振り返り⑥全体のまとめ、以上の6段階で構成されています。最初の導入部分では、マララ・ユスフザイさんの映像を視聴し、さらに世界を取り巻く教育の現状について図から読み取る作業等を通して学習をし、先進国と発展途上国には圧倒的な教育各差があることを生徒全員で確認しました。

会議開始前に進行役のGCPリーダーズの指示のもと、事前に指定された、会議参加者の役(6名)、被援助国の市民役(8名)、オブザーバー(そのほかの会議を見守る生徒)にそれぞれ分かれて着席しました。会議は教育援助をするA国・B国の政府役と市民役、援助される側のC国政府役とその小学校長役、NGO職員役の計6名で行われます。事前に用意された台本に沿ってロールプレイ形式で会議を行い、質疑応答を行った後、援助をするA国・B国側の「したい援助」と援助をされる側C国の「してほしい援助」は必ずしも一致していないことを全員で学びました。

次に、被援助国であるC国市民役の8名の生徒が、役割カードに沿ってそれぞれの主張を展開し、教育各差に悩む声を発信しました。生徒は、C国の現地のニーズが援助会議に直接反映されることは難しいことを学びました。

続いて各班に分かれ、ワークシートに沿って振り返りをおこないました。最後にまとめとして、国連広報センターが作成した「持続可能な開発は教育から」を視聴しました。



◆ 生徒感想

「教育なしにSDGsは達成できないことがよくわかりました。軍事費の1割を教育に当てれば、教育費の不足を埋めることができるのに、なぜ国は軍事費をそんなにかけているのか不思議です。

戦争反対と言っているのに、なぜ武器を作り続けているのか、その背景には何があるのか調べてみたいです。」

「子どもの教育のために私たちが何ができ、何をしなければならないのか、今はわからないけど、まずは現状をもっとよく知っていきたいと思いました。」

「今の時期にこうやって世界の解決すべき問題について学ぶことがすごく大事だと思いました。学んだ中で、世界のお金の使い方が軍事に偏っていたり、途上国の求める支援とは別の形でお金が使われていたりすることを知り、もっと平和や子どもたちのためにお金を回せないのかと思いました。」

ロールプレイ資料（抜粋）

役割カード B-① ②

<p>役割カード① 援助する側・A国の政府の担当者</p> <p>【自己紹介】 ●あなたが最初に発言してください。 ●文中の指示にしたがって、援助カード①を提示してください。 ●太字の部分はあなたの主張したい部分なので、強く発言してください。</p> <p>ごほん、みなさん、はじめまして。A国の政府を代表して来ました○○（あなたの名前）です。 我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です。発展した私たちA国はODAというお金を使って開発途上国に多大な支援をしてきました。今年からはC国へも教育分野の援助を行うことになりました。内容としては、高等教育*を特に重視した援助を行いたいと計画しております、そのための予算を用意しているのです。（→ 援助カード①「高等教育」を机の上に提示してください） 具体的な援助内容に関しては、後で質問があればお答えします。私たちの援助でより多くの若者が我が国の大学で学べるようになるでしょう！</p> <p>●後に質問する時間があるので、以下の質問例を参考に質問してください。</p> <p>【質問例】ほかの質問をしてもかまいません 例 B 国政府へ：これまでC国へは、どのような教育援助をしてきたのですか？</p> <p>【A国の情報】 質問に回答する時などに参照してください。答えられない時は「調べておきます」と回答してください。 文中の指示にしたがって、援助カード②を提示してください。 ✓ A国の市民のODAに対する意識や関心は低い。 ✓ これまで、低所得国ではなく、主に中所得国に高等教育分野で援助をしてきた。 ✓ 昨年はアフリカの基礎教育に25億円、東アジア・太平洋の高等教育に400億円の教育援助を行った。 ✓ C国への具体的な援助内容：C国から留学生を毎年100人大学に受け入れる。奨学金と渡航費、生活費などの学生が留学に必要な費用を賄う。 （→ 援助カード②「留学生100人受け入れ」を机の上に提示してください） *高等教育とは、大学・大学院、海外からの留学生への奨学金などのことをいいます。</p>	<p>役割カード⑦ C国の市民 父親</p> <p>子どもには教育を受けさせる必要はないと思っていますよ、だって女の子だしね。どうせ何年かしたら嫁に出すので、息子が生まれたら学校に通わせるつもりなんですけどね。</p>	<p>役割カード⑧ C国の市民 母親</p> <p>私自身は学校に行っていない。3人の子どもたちは、読み書きができるように学校に通わせたいと思っていますが、家畜の世話や家事、きょうだいの子守りを手伝ってもらわなくてはいけないので、子どもたち全員を学校に通わせる余裕はありません。</p>
<p>役割カード② C国の市民 教師</p> <p>私は○○校長先生（前出）の学校で働いています。実は、私は、教員訓練を受けたことがありません。それどころか高校卒業資格もありません。いつも、どうやって生徒に教えていいのか分からず悩んでいます。 C国の政府にはもっと教育分野へ予算を割いてもらい、教員養成や給料に充ててもらいたいです。（→ 援助カード②を机の上に提示してください）</p>	<p>役割カード⑨ C国の市民 15歳男子</p> <p>僕ももっと小さかった頃、村に小学校ができました。もちろん毎日通いました。友だちもできたし、何より楽しかった。でも、勉強は得意じゃなくて、さっぱり先生の言っていたことが分からなくて、結局、簡単な文章を理解することすらできなかった。 「先生の教え方がもっとよくなれば…」って外国の人たちが言っていた。もう15歳だけど、中学校へは通ってません。（→ 援助カード⑨を机の上に提示してください）</p>	<p>役割カード⑩ C国の市民 11歳男子</p> <p>学校は楽しい。字が読めるようになったし、計算だってできる。将来の夢はお医者さんになること。だけど今は、紛争で軍が牧舎をつつかって、学校へ行けなくなってしまったんだ。友だちから軍に入らないかって誘われてるんだけど、どうしよう…。（→ 援助カード⑩を机の上に提示してください）</p>
<p>援助カード（したい援助）</p> <p>援助カード① 高等教育</p> <p>援助カード② 留学生100人受け入れ</p>	<p>役割カード⑪ C国の市民 13歳女子</p> <p>家は貧乏で、おばあちゃんも病気で私が働いて家計を助けないといけない。通っていた学校を中途退学して、今は工場毎日洋服をミシンで縫ってます。働いてるときは私は17歳って嘘をついてます。だって、「児童労働」になっちゃうから。私の作った洋服はどこの誰が着るんだろう？（→ 援助カード⑪を机の上に提示してください）</p>	<p>役割カード⑬ C国の市民 9歳女子</p> <p>私の村は学校から遠くて、毎日歩いて2時間かかるんです。学校には女子用トイレがなくて、生徒の数が多くて教室はいつもぎゅうぎゅう。座るところも足りないし、黒板も小さくて、よく見えない。せつかく学校に着いても、先生が来ない日もあるから悲しい。先生が増えたらもっと質問できるし、勉強できるのにな…。（→ 援助カード⑬を机の上に提示してください）</p>

ワークシート（例）

Work③ 振り返り・まとめ

【振り返り①-1】

皆さんは、教育援助会議をみてどのような気持ちになりましたか？ また、気がついたことを書き出してみましょう。

気持ち	気がついたこと
-----	---------

【振り返り①-2】

会議の中で話し合われた援助内容とその援助を受ける側のニーズは合っていましたか？ どちらかに○をつけ、合っていない場合は具体例を記入してください。

合っている	合っていない	合っていない場合の具体例を記入しよう
-------	--------	--------------------

【振り返り①-3】

援助国Aはこの国の政府を象徴していると思いませんか？

※ ヒント「我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です…」

【振り返り①-4】

どうしても本当に必要とされる教育援助が実現できると思いませんか？ 会議を通して考えたことを記入してください。

1年 組 番 氏名

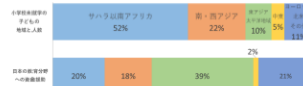
2020.1.18
SOKA Senior High School GCP

2020.1.18
SOKA Senior High School GCP

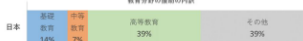
【振り返り②-1】

日本の教育援助の特徴

<図1>



<図2>



【振り返り②-2】

C国（低所得国）の現状

【振り返り②-3】

「全ての子どもが教育を受けるために」の中で大切なことを MEMO しましょう。

【まとめ】今日の GCP 企画で学んだこと、私たちに何ができるか考えたことを記入しましょう。

GCP 企画(1年)

教科科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2020年1月18日(土) 9:00~10:50 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	模擬教育援助会議	
本時の目標	教育に関して、援助する側と援助される側のニーズの違いやギャップに気づき、本当に必要とされる援助は何か考える。日本政府の教育援助の内容や傾向を知る。NGOの日本政府への提言を知る。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
9日(木) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	90	8日にリーダーズのリーダーを集め打合せ
はじめに	① SDGsについて ② 企画の説明	1学期の振り返りを行う 本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
導 入	映像視聴	マララ・ユスフザイさんの映像を視聴する	3	班で話し合いながら行う メモを取りながら聞くように促す
	Work①を班で話し合いながら行う	世界で、小学校に通えない子どもの数やその要因について考える 国からの読み取り…サハラ以南のアフリカの現状を知る	7	
	Work1の答え合わせ	メモをしながら答え合わせ	3	
展 開 ①	模擬教育援助会議についての説明	C国の現状を説明	30	オーディエンスの生徒たちはWork②にメモを取りながら会議を見守る
	会議開始	事前に選ばれた6人と8人の市民に演じてもらう。セリフは全て決められている通り読む(アドリブあり; 配役が大切) シナリオ通りに会議を進めていく		
	質疑応答	質疑応答を司会の進行で進めていく(質疑応答の内容もシナリオ通り)		
	C国校長の話	質疑応答が集まった所で、司会の合図でC国の校長が発言をして会議は終了		
休 憩		トイレ休憩	10	
ま と め	机とイスを元に戻す	リーダーズの指示で、机とイスを班ごとに並べ直す	3	メモを取るように促す
	Work③を班で話し合いながら行う	振り返り①-1 ~ ①-4を行う	5	
	リーダーズが振り返り②~を行う	パワーポイントで振り返りを行いながら、随時メモを取っていく	7	
	まとめ	各自でまとめを記入	3	

G) SDGs カードゲーム(1年生)

■ 概要

2月22日に行われた第6回の最終企画では、創価高校で企画立案し開発したカードゲーム型の教材を使用し、企画を実施しました。2015年に国連で採択された「2030 アジェンダ・持続可能な開発目標=SDGs」を体験的に学ぶことを目的に行われ、3~4人グループで9カ国にわかれ、各国が抱える課題がSDGsのターゲットとしてカードにしたものを配布。各国はそれらの課題を「アイテム」を使って解決していきます。解決することで「ポイント」を得ることができ、最終的に一番ポイントを獲得した国の勝利となります。

教室前方の画面には、SDGsの世界全体の達成状況がわかるバロメーターが表示されており、自国の課題解決とともに、自国がすべてクリアしても、他国がクリアできなかった場合はポイントが減点されてしまうため、世界でSDGsの達成を目指し、道具の貸し借りや、融資など、互いに協力しあって交渉を進めていきます。

「アイテム」には「お金」と「アイデア」があり、「お金」は貿易ゲームの容量で、道具と紙をつかって製品をつくり、マーケットで換金することで得られます。「アイデア」は自国の教育水準や知的活動の指数をあらわしており、さまざまな課題を解決していく中で得ることができます。

各国の課題やそれを解決するための経済力や教育力の必要性、国際社会における援助のあり方、協力関係の構築など様々なことをカードゲームを通して体験的に学びました。

◆ 生徒感想

「SDGsに対して、各国それぞれで解決に向けて取り組めば良いと考えていたが、今日のGCP企画を通して、世界の国々が協力して取り組む必要があると思いました。また、SDGsのスローガンである『誰も置き去りにしない』ということや、利益を追いつめるのではなく行動できるのか。このことに目を向けていくべきだと思いました。私自身、正直勝つことにこだわっていたので、最後にハッとさせられました。」

「今回の企画で世界の問題に対する事情をリアルに知ることが出来ました。各国間での協力も大切だし、話し合って解決することの大変さや重要さを学びました。他国の世界問題に対する意識の違いも聞くことができ、まだまだ関心が低いところが多いんだなと思いました。今後も自分からSDGsについて学んでいきたいです。」





SDGs Card Game

Designed by SOKA Gakuen

1 ゲームの流れ

参加者(学習者)は、9カ国のグループにわかれ、はさみや鉛筆などの道具と紙を使って「製品」を作り、「マーケット」で売って「お金」を得たり、自国の教育力を証明することで「アイデア」を得たりする。それら「お金」「アイデア」のアイテムを使って、自国の課題が示された「ターゲットカード」を実行(国連に提出)し、2030アジェンダ・SDGsの達成を目指す。
「ターゲットカード」を実行することで得たポイントの合計数をグループごとに競うゲーム。

アメリカ	日本	イギリス	中国
インド	ブラジル	インドネシア	カンボジア



2 ルールの詳細

SDGsの17項目、169ターゲットを各項目1~3ターゲットにし、35種類のターゲットカードが用意されている

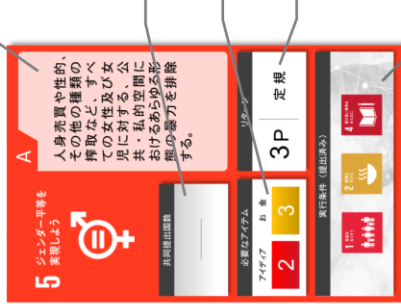
「共同提出国数」には、同じ種類のカードをもっている国の数が示されている。それらの国でターゲットカードと「必要なアイテム」を分担して提出しなくてはならない。どの国がどの種類のターゲットカードを持っているかは「国連」が情報をもっている。

ターゲットカードを実行するにはアイテムが必要になる。共同提出国数が増える場合、それらの国でまとめて用意する必要があり、(カードに書かれている枚数は共同提出国で合算した数)

ターゲットカードを実行するとリターンとして指定された「ポイント」とカードによって製品を作るための道具を受け取ることができる。「共同提出」で提出した場合、得られるポイントカードは提出国で山分けする。

「実行条件」に書かれているターゲットカードが既に提出済みでない、ターゲットカードは実行できない。提出状況は「国連」で確認することができる。

ターゲットカード



アイテムカード



ゲーム進行のルール

- ・グループの中から「国連大使役」と「労働者役」を1名ずつ決める。
- ・交渉や作業はゲームで提供されているもののみを使用する。
- ・「ターゲットカード」と「教育水準評価書」の交換を除けば、交渉内容は原則自由。道具やアイテム、ポイントを交換したり、譲渡したりすることは各国ごとの条件次第で自由に行うことができる。

取り引きのルール

国連・国際機関

ターゲットカードの処理

- ①必要なアイテムをそろえ提出する。共同提出が必要な場合は、代表のグループがアイテムをそろえてターゲットカードを提出する。提出の際は、**カードの文章(ターゲット)を読み上げる**。
- ②指定されたポイント、道具などを受け取る。
- ③ターゲットカードは自国に持ち帰る。ただし、再利用はできない。



「アイデア」カードの交換

- 「教育水準評価書」の問題に正解してあれば提出するレベルごとに指定された枚数の「アイデア」カードを受け取ることができ、



開発支援

- 国際機関はさまざまな道具をもっている。各国は国際機関に相談することで、必要な支援を受けられる場合がある。ただ、道具そのものを借りることはできない。

国連開発援助会議

- 国連が「国連開発援助会議」を開催する場合、各グループの国連大使は参加しなければならない。

ゴール

- ・ターゲットカードを全てクリアすることを旨とし、獲得したポイントの数を各グループごとに競う。
- ・全ターゲットを達成した順番でポイントを獲得できる。1位：?P、2位：?P、3位：?P、4位以下：?P
- ・自国のターゲットカードが提出できていない場合、未提出の枚数×マイナス?P。
- ・全て提出できた国でも、他国でクリアできていない国が1つでもあった場合はマイナス?P。

※これらのポイント数はゲーム終了後に発表する



マーケット・開発銀行

「製品」と「お金」の交換

- 「労働者」が生産した「製品」を「お金」に換金できる。**道具は労働者しか使えない。**

13cm×8cmの長方形	3枚1組 = 1G
直径9cmの半円(分度線の形)	3枚1組 = 3G

開発援助のための融資

- 開発銀行より1口3Gから融資を受けられる。ただし、「ポイントカード」を所持していないと融資が受けられない。また、**定規をもっていない国限定。**

融資：1口3G ~	金利：1口+1G
-----------	----------

資源採掘のための投資

- 資源採掘のための投資をすることができ、

赤コース：1回1G	青コース：1回3G
赤いサイコロを振る	青いサイコロを振る

サイコロを振り、出た目の枚数の紙をもらう。

ポイントと「お金」の交換

- 1ポイントにつき1Gを交換することができる。**ただし、その逆はできない。**



GCP 企画(1年) SDGs Card Game

教 科	GCP		担当教員	各担任	
実施年月日	2020年2月22日(土) 10:00~11:55 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単 元 名	国際理解	本時の題目	「持続可能な開発目標 (SDGs)」		
本時の目標	「持続可能な開発目標 (SDGs)」をテーマに、「SDGs Card Game」に取り組み、SDGsの意義や働き、世界が抱える諸問題の連動性や世界が協働することの重要性を学ぶ。				
時 刻	項 目	授業の進行内容 (発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
事前準備 (前日まで)	グループを決める グループ担当国を決める	クラスの生徒を9国に振り分ける。 「ファシリテーター」「国連」「マーケット」 の担当生徒を決める			
(当日) 休み時間	配席準備・座席移動	机を「配席図」の通りに並べ 着席してもらう			
授業開始	①ゲームのルール・意図の 説明	「ファシリテーター」よりゲームの主旨と手 順を説明する。	5	ルールブック配布	
	②作戦会議	「国連」より道具やカードを渡す。 グループは席について道具を確認し、ルー ルをよく確認して作戦会議をする。	15	道具の配布	
	③SDGs Card Game	前半戦 (前半戦終了時刻を板書する)		25	※ターゲットカードを実 行させるときは、必 ず項目を音読して もらう。
		休憩 ※状況に応じていれなくても良い		5	
		前半戦の振り返り 「ファシリテーター」より前半戦のゲームの 様子を振り返り、後半戦に向けての状況整 理やアドバイスをを行う。		3	
後半戦 (後半戦終了時刻を板書する)		25			
全ゴールにおいてバロメーターが MAX に なるか時間切れになったら次第ゲーム終了					
④振り返り・感想記入	ワークシートを配布し、グループごとに振り 返し、感想を記入する		10	ワークシート配布	
⑥片付け	説明に従ってグッズを片付ける		10		
課 題					
講 評					

H) レイテ決戦から戦争とは何かを知る(2年生)

■ 概要

高校2年生の1学期は、「戦争」をテーマとし、特に第二次世界大戦を中心にその実像を見つめていきました。5月18日に行われた第1回目は、フィリピン・レイテ島の決戦の戦争証言の映像を通して、戦争とは何かについて学び合いました。映像では、レイテ決戦を戦った兵士たちの証言映像を特別に編集し、その際に、日本兵、アメリカ兵、そして、現地のフィリピン人など、戦争に関与した全ての当事者の証言を順番に視聴することで、偏った見方をせず、戦争について客観的に考えることを目的としました。

レイテ島は第二次世界大戦中、日本軍とアメリカ軍が最も激しい地上戦を繰り広げた舞台の一つです。その地上戦の経験者の証言は、授業で学んだ机上のものとは異なり、生々しいものでした。そして、戦争の勝敗に関係なく、戦争に関わった全ての人々が悲惨な思いをし、深く傷ついていることを知ることができました。生徒は大きな衝撃を受けると共に、二度と戦争を起こさない、起こさせないという不戦の誓いを新たにしました。

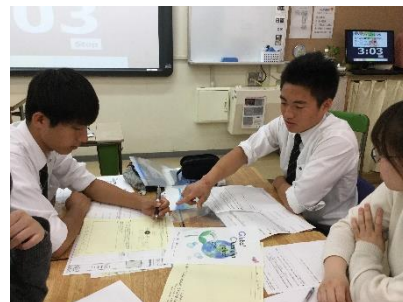
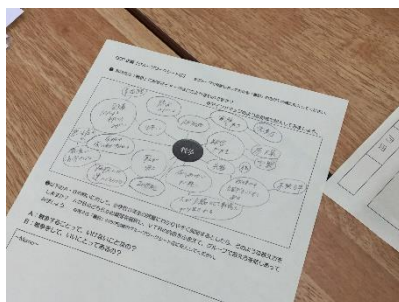
最後に、小学校3年生の児童から「戦争することって、いけないことなの?」「戦争をして、いいことってあるの?」と質問をされたと仮定し、わかりやすく説明するにはどうしたら良いか、グループで案を考えました。「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もいない」ということを一人一人が理解することができました。

◆ 生徒感想

「戦争をする以外にも道はたくさんあるはずなのに、戦争しか方法がないと思ってしまうのが人間だとVTRで言っていた。戦争を経て、二度とこんな悲惨なことを起こしてはいけないと思うが、教訓にするにはあまりにも多くの命を犠牲にしてしまったと思った。」

「戦争というものは絶対悪だ、という認識はもともとあったが、今日実際に当事者の証言を見て、改めて戦争の悲惨さ、残酷さを感じた。当時の戦死者は『名誉ある死』として讃えられていたけれど、実際にはもがいて、苦しんで、痛くて、自ら殺してくれ、とまで頼んでしまうほどまで追い詰められてなくなっている。その人たちの声を今聞くことは出来ないけど、思い出したくない当時の話をわかっている人たちが生きているうちに、戦争という行為がどんなものだったのかを肌で感じ、後世に伝えなければならないと思った。」

「戦争を経験した人たちが戦争を二度と起こしてはいけないと言われているからには、自分たちは平和な世界をつくらなければいけないと思ったり、そのためには身近な人のことをしっかりと知って理解していくことが大切だと思った。」



ワークシート(例)

レイテ島の戦いとは…

- ・フィリピンのレイテ島とは、日本軍が「太平洋の天王山」と呼び、米軍のマッカーサー元帥が「アイ・シャル・リターン（私は戻ってくる）」の約束を果たす地と決めた太平洋戦争の決戦場。
- ・太平洋戦争中の1942年、日本軍はフィリピンを占領。当時、米軍大將だったマッカーサーは「戻ってくる」と言い残してフィリピンを脱出。1944年10月20日、マッカーサー率いる米軍約20万人がフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸。
- ・約2カ月に渡る日本軍とアメリカ軍の地上戦で、日本側はほぼ全滅した。
- ・同島の太平洋戦争中の死者（推計）は日本軍約8万人、米軍約3500人。
- ・日米両軍の間で翻弄され、レイテ島の島民約5万4千人も犠牲になった。
- ・また、米軍に協力したフィリピン人のゲリラ部隊と日本軍との戦闘も激化した。



〈レイテ島に上陸するアメリカ軍〉



〈米軍の猛烈な艦砲射撃で炎上する日本軍陣地〉



〈フィリピンと日本の戦後〉

太平洋戦争末期、日本軍が抗日ゲリラとの関係を疑って無実の人を虐殺する事件が相次ぎ、遺族らの反日感情はいまも強い。元従軍慰安婦が日本政府に補償を求めている問題や、米軍や住民の追及を恐れて日本人であることを証明する書類を捨てたために日本国籍が認められない残留日本人の問題も残る。

〈日米両軍による激しい戦闘で壁に無数の砲弾の穴が今も残る建物〉



(出展：朝日新聞 2010年9月18日朝刊)

GCP 企画【個人用ワークシート①】

- ① あなたの「戦争」に対するイメージはどのようなものですか？

- ② 第二次世界大戦時の日本人兵士の戦死者は約何人だと思いますか？ をつけましょう。
 : 2万人 : 23万人 : 230万人
- ③ 第二次世界大戦時のアメリカ人兵士の戦死者は約何人だと思いますか？ をつけましょう。
 : 3万人 : 32万人 : 320万人

- ④ VTRを見ながら記録しておきたいことを「個人用ワークシート②」に記入しましょう。

- ⑤ VTR にでてきた当事者の方々は、「戦争」に対してどのような考えを持っていたのでしょうか。自分の考えをまとめてみましょう。

- ⑥ 本日の企画を通して、感じたことや決意したことを書いてみましょう。

2年 組 番 氏名： _____ 練習

GCP 企画【グループワークシート①】

※グループで発表しあったものを「書記」の方が下の欄に記入してください。

- ① あなたの「戦争」に対するイメージはどのようなものですか？

※マインドマップのような形式で記入してみましょう。

- ② 以下のA・Bの問いに対して、小学校3年生の児童にわかりやすく説明するとしたら、どのような答え方をしますか？ AかBのどちらかの質問を選択し、VTRの内容をふまえて、グループで答え方を話しあってみましょう。 ※答えは「書記」の方が別紙のグループワークシート②に記入してください。

A：戦争することって、いけないことなの？

B：戦争をして、いいことってあるの？

～Memo～

班	メンバー	進行	書記				
---	------	----	----	--	--	--	--

GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年5月18日(土) 10:00~11:55		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	戦 争	本時の題目	戦争証言を通して「戦争」とは何かを知る	
本時の目標	戦争証言を通して、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もない」ということを一人一人が理解し、二度と戦争を起こさない・起こさせないという不戦の誓いを新たにする			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導 入	①今回の企画についての説明 ※配布物あり	今回の企画について簡単に説明をする GCPファイル・「個人WS①」「前回のWS」	2	
展 開	②個人作業 ※配布物あり	「個人WS①」①・②・③に取り組む。 ⇒全体で②③の答え合わせをする	4	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる。 リーダーズがレイテ島決戦について説明 VTR鑑賞後にどのようなディスカッションをするのかを事前に確認 「個人WS②」に適宜メモをとるように指示する。
	④グループディスカッションA ※配布物あり	「グループWS①」 グループで机を合わせ、 「個人WS①」①に記入したことを共有し、 「グループWS①」マインドマップに取り組む	10	
	⑥レイテ島の戦いの説明 ※配布物あり	「個人WS②」 これから上映する映像について説明する。	4	
	⑦VTR 上映 A [0:00~] (1.銃撃戦と消耗戦) →グループディスカッションB	NHK 戦争証言アーカイブよりフィリピン・レイテ島での決戦を語った戦争証言をまとめたVTRを鑑賞する。 ⇒印象に残った人(発言内容)をグループで共有する	11 3	
	⑧VTR 上映 B [10:38~] (2.斬り込み隊) →グループディスカッションC	映像の続きを鑑賞する ⇒印象に残った人(発言内容)をグループで共有する	8 3	
	10分休憩 ここで時間調整をしてください			
	⑨VTR 上映 C [18:49~] (3.フィリピン現地民との戦い 4.戦争とは?) ※配布物あり	映像の続きを鑑賞する VTR終了後、「個人WS①」⑤を記入 「グループWS②」 感想をグループで共有し、「個人WS①」⑤、「グループWS①」②の内容をディスカッション。「グループWS②」に清書する	14 3 15~20	
ま と め	⑪クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表	10	11:35 までには必ずスタートする。 ※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りのSHR等を活用する。
	⑫個人作業	今回のGCP企画を通して感じたことや学んだことを「個人WS①」⑥に記入する	8	
	⑬ワークシートの回収	GCPリーダーズがワークシートを回収し、担任の先生に提出する	5	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 			

1) 核兵器廃絶に向けて(2年生)

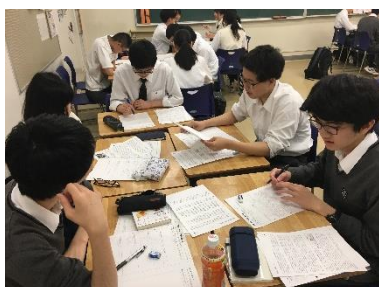
■ 概要

6月15日に行われた第2回目の企画は、「核兵器」をテーマに行いました。まず進行役の生徒が、核兵器を巡る世界の情勢について調べた内容をプレゼンしました。この話題を軸に、ジグソー法を用い、核兵器を取り巻く現状について学びを深めました。(エキスパート班ワークシート①原爆の誕生“マンハッタン計画の概要” ②核兵器の非人道性について ③核抑止論について④核兵器不拡散条約(NPT)について ⑤核兵器禁止条約(TPNW)について)。ジグソー法で核兵器を取り巻く現状について理解を深めたあとに、グループで”核兵器はなぜなくなるのだろうか“との問いについてディスカッションを行いグループでの答えを導き出させました。授業後半では”核兵器禁止条約における常任理事5ヶ国声明文“と”NPT再検討会議第三回準備委員会におけるICAN発言“を読み、核兵器を持つ国と持たざる国の意見の違いを学びました。これまでは日本人からの視点で捉えてきた核兵器に対して、核保有国の核抑止論という視点を取り入れることで、核兵器の問題を客観的に捉えられるように工夫を凝らしました。

◆ 生徒感想

「本日の企画を通して、核兵器が他国より上に立つ常套手段になりつつあるなど感じました。特にカウントダウンゼロ(映像)の初めにパキスタンが核実験を成功させたときの『我々は先進諸国の仲間入りをした』という言葉がとても印象に残りました。また、核兵器がなかなか無くせないのは、国家間の信頼関係が確立されていないからという話を聞いて、NWSとNNWSとの間で、お互いの意見を尊重した、慎重な話し合いが必要なのではないかなと思いました。そして、この複雑に絡み合った核兵器問題について、より深く知り、考え、少しでも解決に向けた動きをしたいと思いました。」

「今日の企画を通して核兵器の恐ろしさや、核兵器の現状を知ることができて良かったです。平和に向けて核兵器廃絶の運動が活発になっている今でも核兵器を保有している国があり、まわりの国の意見を取り入れない国があることを知ってまだまだ核兵器をなくすことは実現できないと思えました。今回初めて知ったことも多かったので、核兵器問題について自ら学んで行くことが大切だと思いました。」



核兵器禁止条約(TPNW)について

5

核兵器禁止条約(Treaty on the Prohibition of Nuclear Weapons:TPNW)は、2017年7月に採択された国際条約です。この条約は、50カ国が批准して90日後に発効することになっています。2019年4月11日現在、70カ国が調印(署名)し、23カ国が批准。各国が批准に向けた準備を進めていますが、発効までにはあと2〜3年かかるのではないかと見方があります。

この条約は「核兵器の使用によって引き起こされる破局的な人道上の結末を深く懸念し、そのような兵器全廃の重大な必要性を認識、全廃こそがいかなる状況においても核兵器が二度と使われないことを保証する唯一の方法である(前文)」として、核兵器の開発、実験、製造、生産、あるいは獲得、保有、貯蔵を禁止するものです。また、「核兵器の使用による被害者(ヒバクシャ)ならびに核兵器の実験によって影響を受けた人々に引き起こされる受け入れ難い苦痛と危害に留意」することが前文で言及されています。

第1条では、(a)核兵器あるいはその他の核爆発装置の開発、実験、製造、生産、あるいは獲得、保有、貯蔵。(b)直接、間接問わず核兵器およびその他の核爆発装置の移譲、あるいはそうした兵器の移譲受け入れ。(c)核兵器直接、間接問わず、核兵器あるいはその他の核爆発装置、もしくはそれらの管理の移譲受け入れ。(d)核兵器もしくはその他の核爆発装置の使用、あるいは使用することの威嚇。(e)本条約で締約国に禁止している活動に因与するため、誰かを支援、奨励、勧誘すること。(f)本条約で締約国に禁止している活動に因与するため、誰かに支援を要請し、受け入れること。(g)領内あるいは管轄・支配が及ぶ場所において、核兵器やその他の核爆発装置の配備、導入、展開の容認。以上の7項目を「禁止」しています。

第4条では、定められた期限までに国際機関の検証を受けて核兵器を廃棄する義務を果たすことを前提に、「核兵器国(核保有国)」も条約に加盟できると規定していますが、全ての「核兵器国」および、アメリカの核の傘の下にあると言われるカナダやドイツなど NATO 加盟国や日本、オーストラリア、韓国などは条約に対する不参加を表明しています。

この条約の成立に向け尽力してきた ICAN (核兵器廃絶国際キャンペーン) は、2017年秋にノーベル平和賞を受賞しました。ICAN は核兵器を禁止し、廃絶するために活動する世界の NGO (非政府組織) の連合体で 101カ国から 468 団体が参加しています(2017年現在)。日本からはピースボートの他、核戦争に反対する医師の会、創価学会インタナショナル、ヒューマンライツ・ナウが参加しています。ICAN は、条約に不参加を表明した日本政府に対して「直ちに核兵器禁止条約に署名・批准すべきだ」と求めています。

原爆の誕生について (マンハッタン計画の概要)

1

【ドイツとアメリカによる核開発】

1939年秋に第二次世界大戦が始まると、ドイツで原爆研究が開始されているという情報もたらされた。ナチスの手を逃れてアメリカに亡命したユダヤ系科学者たちは、ドイツが先に原爆を手中に取れば全世界がファシズムに支配されてしまうという危機感を強く抱いた。彼らは、そうした破局的な事態を避けるためには、アメリカが先に原爆を完成させなければならないと真剣に考えた。そこで彼らは、ドイツを追いアメリカに移住していたアイゼンシュタインを訪れ、彼の署名を得た後、核分裂研究への国の支援を促す手紙を書き、ルーズベルト大統領に送付し、また、他の多数の科学者たちも、科学が自国の防衛に大きな力を果たすと考え、大統領に直接働きかけた。その結果、アメリカ政府は、原爆研究への政府の支援と関与を強化していくことになった。

【マンハッタン計画の始動】

こうした危機感を背景にアメリカでも原爆開発が急速に進んでいった。アメリカ各地に、巨大なウラン濃縮工場やプルトニウム生産用の原子炉などが建設されるようになり、そこで働く人々は、原爆の原料となる高濃縮ウランやプルトニウムの生産の研究に従事した。アメリカ国内の多数の科学者たちが研究を重ね、原子爆弾の製造が現実のものとなった結果、原爆開発はアメリカの本格的な国家プロジェクトとして急速な進展を始めた。実際に原爆を作成するための理論研究は、カリフォルニア大学バークレイ校のロバート・オッペンハイマーらによって1942年始めころから開始された。この一連の計画推進の事務所がニューヨークのマンハッタンに設けられたことから、計画そのものが「マンハッタン計画」と呼ばれることとなった。

マンハッタン計画が本格化するとして、原料生産の拠点とは別に、原爆の研究開発と製造を集中的に行う研究所の設置が必要となった。こうして、1943年3月、オッペンハイマーを所長とするロスアラモス研究所が設立され、第一線級の科学者が多数集められた。ロスアラモス研究所は、1945年夏には1300人の科学者及び技術者を含む約6700人の研究組織に膨れ上がることになる。彼らは、戦争勝利のための重大任務を遂行するという意識と、オッペンハイマーの優れた指導により、研究に力を注いでいった。

マンハッタン計画に関しては、最高機密の軍事プロジェクトとして厳しい情報管理が行われ、計画の存在はルーズベルト大統領や陸軍長官ら限られた関係者のみにしか知らされておらず、議会への報告などは一切行われなかった。

【人類初の核実験と広島・長崎への核爆弾投下】

1945年7月16日にプルトニウムを原料とする最初の原爆が完成し、ロスアラモスから南に約300km離れた砂漠の地アラモゴードで、トリニティ実験とよばれた人類初の核実験が行われた。こうして1945年8月6日に高濃縮ウランを用いた原爆リトルボーイが広島に、またその3日後の8月9日にはプルトニウムを用いた原爆ファットマンが長崎に投下された。





ICAN再検討会議第3回準備委員会におけるICAN発言(仮訳)

ICAN Statement on the NPT Third Preparatory Committee for the Tenth NPT Review Conference
2019年5月1日

親愛なる各国代表の皆様、

本日、皆様は歴史的な選択に立ち会っています。この選択は人類の未来とおそらく世界の運命を決めるものとなるでしょう。

世界は新たな核競争の際に陥っています。NPTが署名されてから半世紀以上が経ちましたが、1万4000発以上の核弾頭が9つの国家に残っています。この内のひとつでも大都市の上で起爆しようものならば、100万以上の人生が一瞬で終わることになります。ご存じの通り、NPTは190の全ての締約国に核軍縮のための誠実なる交渉を求めています。多くの国が国連の核兵器禁止条約を提示し、遵守することによりこの義務を履行しています。この条約は、それまでの大量破壊兵器を国際社会が非合法化してきたのと同じように、NPTを補足し強化するものです。この条約こそNPT第6条の精神を尊重し、軍縮の合意を進め、履行する唯一の条約であります。

これとは対照的に、近年核保有国は誤った方向に進んでいます。ロシアとアメリカ合衆国は冷戦終了後には大規模な核弾頭削減を行いました。両国は核能力の近代化と拡大に莫大な予算をかけています。NPTが核競争の停止を義務としているにも関わらず、他の核保有国もこれに同調すると思われず。多くの核兵器はNPTよりも長く存続することになってしまっています。

さらに、偶発的または意図的な使用が、対立する国家間で冷戦期並に高まっています。数ヶ月前、インドとパキスタンは核兵器の使用も考慮しながら紛争しました。アメリカ合衆国とロシアはINF条約の破棄を決定し、各紛争の可能性と、INF条約により沈められていた核競争の亡霊がヨーロッパで再び生まれる可能性を高めています。

いわゆる(アメリカが主張する)「非核化の国際環境を整備する」アプローチは、現在進行しているこの大規模な核近代化プログラムから人々の気をそらすべきではありません。實



核兵器禁止条約における常任理事国5か国声明文(仮訳)

P5 Joint Statement on the Treaty on the Non-Proliferation of Nuclear Weapons
2017年3月27日

我々核保有国は核不拡散条約(NPT)に対する全面的なコミットメントを、50年前の締結以来あることを再確認する。

象徴的なこの条約は、地球規模の核拡散を防ぎ、核戦争の危機を留めるための国際的努力において、不可欠なものをもたらした。同条約はまた、電力や医療、農業や工業における、人類益と共有のための核の平和的利用の枠組みも提供してきた。そして国際的な緊張を和らげ、国家間の安定と安全と信頼の土台をつくりだすことによって、きわめて重要で継続的な核軍縮をもたらした。

我々はNPTの履行において、核技術の平和利用における最大限の協力と平和利用のみの核開発の実証において、きわめて重要な役割を果たしてきたIAEAの活動を、引き続き全力で指示することを宣言する。我々は補足プロトコルの普遍化も含めたIAEAの保全体制のさらなる強化を必要とすることを強調しておく。

我々は核軍縮のための効果的な方法に関して、また厳格かつ効果的な国際的管理に基づく全般的かつ完全な核軍縮に基づいて、NPTに基づく誠意ある交渉を探索する義務を負う。我々は、すべての国家の安全保障の低下を伴わない、核なき世界という究極の目標の設定を支持する。我々は核軍縮におけるさらなる前進を促す国際環境を作り出す責任を負うものである。

GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年6月15日(土) 10:00~11:55		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	核 兵 器	本時の題目		
本時の目標	核の非人道性を学び、核廃絶に向けた世界の情勢を知る			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間 (分)	留意点・準備・その他
事前準備	—	PPTを立ち上げる エキスパート班の座席に座るように促す		
導 入	①前回の振り返り ※配布物あり	前回の内容の振り返りをする 「前回の個人WS」配布→ファイルに入れる	3	
	②今回の企画の説明	今回の企画について簡単に説明をする	2	
展 開	③VTR視聴 ※配布物あり	映像(カウントダウンゼロ)を流す 「個人WS」配布→メモをする	10	映像を見ながらメモをするように声をかける
	④核兵器に関するクイズ	リーダーズで用意したパワポを元に進行する	5	リーダーズが核兵器に関するクイズを行う
	⑤グループワーク (エキスパート班) ※配布物あり	エキスパート班で机を合わせる 「エキスパート班カード」を各班に配布 「グループWS」左側の自分の班の担当の欄にメモをする	20	カードの中で分からなかった語句や疑問点などをメモするように声をかける
10分休憩 ここで時間調整をしてください (休憩時間のうちにジグソー班の座席をホワイトボードに書いておく)				
	⑥グループワーク (ジグソー班)	「グループWS」左側に共有内容を書き出す 「グループWS」右側の3つの設問に答える	25	グループの様子をみながら弾力的に時間配分する。
	⑦グループワーク (声明文読み比べ) ※配布物あり	「声明文プリント」を読んで疑問に思った点を 「個人WS」に書き出す	10	
ま と め	⑧個人作業	今回のGCP企画を通して感じたことや学んだことを「個人WS」に記入する	10	
	⑨ワークシートの回収	GCPリーダーズがWSを回収し、担任の先生に提出する。GCPファイルも回収する。	5	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先にジグソー班を経験しておき、企画内容の理解に務める。 ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・リーダーズ担当のパートを含めて、クラス内でよく打ち合わせしておく 			

J) 異文化理解(2年生)

■ 概要

10月16日に行われた第3回目は、「国際交流～世界の中のわたし～」をテーマに、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を学ぶことを目標に、創価大学に通う別科生(留学生)40名を創価高校にお迎えし、別科生との交流を行いました。高大接続の取り組みの一環として、GCP企画で別科生との交流を実施するのは、今回が2回目です。前年度の企画をベースに、生徒が主体的に留学生と関わることのできる機会をより多く設けました。

当日の交流でお互いの異文化理解がより深まるよう、生徒たちは事前学習として、留学生に紹介したい日本文化を一人一つ決め、1分間程度の **show and tell** を準備しました。また、「自分が調べた日本文化が海外ではどのように捉えられているか」、「似ている文化はあるか」など、事前学習のトピックにまつわる質問を用意し、対話の中で留学生の自国の文化を知れるように準備を重ねました。交流会では、まず別科生に自己紹介をしていただき、その後グループごとに別科生と懇談をしました。生徒は自らの **show and tell** の発表や質問を通して、日本との文化や習慣の違いを感じながら、有意義に交流会を進めていきました。

また、上記の企画本編の前には、各クラスのGCPリーダーズと留学生で昼食を共にし、その後、留学生に学校を紹介する校内見学ツアーも行いました。お互いの対話に花が咲き、さまざまな言語も飛び交う、朗らかな交流となりました。

◆ 生徒感想

「**show and tell** を通して、日本人だから分かること、外国の方だから気づく文化の違いや共通点を、コミュニケーションを通して直接共有できたのがよかった。海外の文化を更にもっと知りたいと思った。また、皆の発表を聞いていると、日本の魅力にも改めて気づくことができた。日本特有の文化だと思って調べてみたら、以外と外来のものが多くて驚いた。」

「互いの文化について語り合ったことを通して、言語や文化に差異があっても、そこに芽生えるコミュニケーションや笑顔には壁がないということを感じた。今回は日本語で会話をしたが、海外の方々と話す勇気や自信が湧いてきた。」

「海外から一生懸命に日本語を学び、日本の創価大学を志して勉強に励んでいる留学生の姿を通して、私も向学の心を忘れずに勉強していこうと改めて決意することができた。また、今回の交流で、ある文化では当たり前のことが、異文化では当たり前ではないということを確認できた。英語以外にももっとたくさんの言語を学びたいと思った。」



ワークシート(例)

項目	司会原稿	時間(分)	備考
①企画の説明	みなさん、こんにちは。今回のGCP企画では、創価大学に留学をし、別科生として日本語を勉強している留学生の方たちとの交流です。別科生は日本語の研修中ですが、来年の4月からは、日本人の学部生にまでって4年間、日本語で授業を受けるメンバーになります。普段は中々知る事の出来ない、日本以外の文化を学ぶ事の出来るチャンスです。言語技術を活用して、考えた質問を更に掘り下げ、有意義な時間にしていきましょう。では、別科生の皆さんが到着したら、拍手で迎えましょう。	3	リーダーズが別科生を呼びに行く 司会あり
②別科生紹介	本日私たちと交流する創価大学の別科生のみなさんです。よろしくお願ひします。	1	名前と国の紹介
③自己紹介	それでは、ひとりひとりに自己紹介をして頂きます。留学生のみなさんは、留学生のみなさんの自己紹介を聞きながら、個人ワークシートの①にメモをとってください。 題して頂く内容は、①名前、②国、③日本在住期間、④留学生に知って欲しい自国の文化、⑤ここが変だよね！日本人、⑥日本との共通する文化についてです。⑦と⑧は選択で答えてもらいます。それではよろしくお願ひします。	15	事前に自己紹介の内容を伝えてあり、準備した内容の自己紹介(一人3分)
④各グループに別科生1人が入り、質疑応答	ありがとうございます。それでは別科生のみなさんとの交流に移っていきます。各グループにつき一人の別科生に入ってもらい、準備した「日本文化について」の発表をし、そのことについて別科生から質問を受けて、今度はみなさんから別科生へ質問をしていきます。交流の内容は各自ワークシートにメモをしていきましょう。時間は107分、時間がきたら別科生に次のグループに移動してもらいます。前の電子黒板に時間が表示されますので、リーダーズの皆さんは時間のチェックをお願いします。それでは、始めてください。	30	
⑤謝礼	ありがとうございます。代表して、()くんさんに挨拶してもらいます。()くんさん、よろしくお願ひします。	5	リーダーズが代表で挨拶をして、
⑥別科生退場	ありがとうございます。最後に、感謝の気持ちを込めて、全員で負けじ魂ここにありを歌いましょう。起立してください。(♪負けじ魂ここにあり♪) 以上で留学生との交流を終わります。ありがとうございます。 留学生のみなさんが控え室に戻ります。拍手で送りましょう。		全員で歌う ⇒留学生に歌詞カードを渡す リーダーズが控え室まで案内する
⑦個人作業	最後にワークシートの③に、本日の感想や気づいたこと学んだこと、決意したことを書きましょう。時間は10分です。それでは始めてください。	10	
⑧ワークシートの回収	時間になりました。これからリーダーズがワークシートを回収します。これで本日の企画は終了です。帰りのHRの準備をしましょう。		個人・グループWS回収⇒担任へ GCPファイル回収 ⇒GCPロッカーへ

別科生のみなさんへ

□自己紹介 (introduce yourself) (1人3分) (3minutes per 1person)
⑦と⑧はどちらか一つ選ぶ(choose either ⑦or⑧)
各グループに入って、生徒の質問に答える → 7分で次のグループへ移動
 (Answer questions from students in a group → Change a group in 7minutes)

①名前 (Name)

②国 (Country)

③日本在住期間 (Duration in Japan)

④ 留学生に知って欲しい自国の文化 (Your own culture that you want Gakuensei to know)

⑤ここが変だよ！日本人/ここがすごいよ！日本人 (Strange or Great points that Japanese have)

⑥日本と共通する文化 (Common culture between your country and Japan)

本日は大変にありがとうございました。



GCP企画 【個人ワークシート】

● 別科生の方のレクチャーをメモしよう

国 NAME :

国 NAME :

国 NAME :

国 NAME :

国 NAME :

2019.10.16
SOKA Senior High School GCP

●留学生に紹介したい日本文化について自分の考えをまとめてみましょう。
 (英表で行ったブレインストーミングを参考にしてみましょう)

紹介したい日本文化 :

➢ なぜその日本文化を発表しようと思ったのか

➢ その日本文化の起源・特徴

➢ その日本文化はいつ・どこで・だれに親しまれているのか

●自分が紹介する日本文化やそれに関わるトピックについて、留学生に質問してみたい項目をあげてみましょう。
 ・
 ・
 ・

●当日の自分の発表について確認しましょう。
 発表回： _____ 回目 発表順： _____ 番目 持ち物： _____

●本日の企画を通して、感じたことや気づいたこと、決意したことを書いてみましょう。

2年 組 番 氏名： _____ 様

GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任・副担任
実施年月日	2019年10月16日(水)6限目 14:45~15:55(70分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	留学生交流～世界の中のわたし～	
本時の目標	創価大学より、別科生約38名をお迎えし、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を考える機会とする。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	備考
導 入	①企画の説明	(GCP ファイルの配布、WS の返却) 本日の内容について説明する。	3	リーダーズが別科生を呼びに行く 司会生徒あり
	②別科生紹介 ③自己紹介	各クラスに5名前後 一人ずつ自己紹介をしてもらう(3分/1名) ①名前 ②国 ③日本在住期間 ④学園生に知っておいて欲しい自国の文化 ⑤ここが変だよ! /ここがすごいよ! 日本人 ⑥日本との共通する文化	1 15	名前と国の紹介 事前に自己紹介の内容を伝えてあり、準備した内容の自己紹介(簡潔に紹介してもらう) (④⑥は選択)
展 開	④各グループに別科生1人が入り、質疑応答	①別科生に対して、日本文化についての発表をする(1回につき3人程度) ②発表について留学生から質問をもらう ③発表したトピックに関して、事前に考えた質問を留学生にする ④時間が余ったら質問を広げて会話をする ※1グループ7分。時間が来たら別科生に次ぎのグループに移動してもらう	30	
	⑤御礼 ⑥別科生退場	各クラスで御礼 愛唱歌「負けじ魂ここにあり」 ※歌詞カードあり	5	リーダーズが代表で挨拶をして、全員で歌う リーダーズが控え室まで案内する
ま と め	⑦個人作業	【WS】振り返りを行う 今回のGCP企画の自己評価と感想を【個人WS】に記入する	10	
	⑧ワークシートの回収	GCPリーダーズがワークシートを回収。		個人・グループWS回収→担任へ GCPファイル回収→GCPロッカーへ
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・GCPリーダーは説明会の時に先に企画を体験し、企画内容や流れを事前に理解しておく。 ・GCPリーダーはG分けを前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 			

※別科生は、12:20に学園に到着し、昼食後、事前に質問事項(自己紹介)を記入、ネームプレートの作成なども行う

K) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)

■ 概要

11月30日に行われた第4回目は「現代の紛争」をテーマに、1994年にアフリカのルワンダで起きたジェノサイドー大量虐殺について学びました。

11月27日のホームルームで、GCPリーダーより、現代の紛争からルワンダの大量虐殺(ジェノサイド)から学ぶ～という事前学習冊子を配布。資料の内容は、「なぜ世界で紛争が無くならないのか」増田弘著、「隣人が殺人者になる時 ルワンダ・ジェノサイド生存者達の証言」「隣人が殺人者になると時 加害者編」ジャン・ハッツフェルド著、「NHK未来への提言 戦渦無き時代を築く」ロメオ・ダレール著 より特に学んで欲しい部分を抜粋し作成したものです。

当日は、海外ドキュメント『ルワンダ(1)』の視聴を行い、その後4名で構成する分れて、ツチ族・フツ族・国連軍兵士・TV記者に分かれたロールプレイを行ないました。これは、ルワンダ内戦の様子を体験的に学ぶためです。休憩後、海外ドキュメント『ルワンダ(2)』を視聴した後、ルワンダ内戦がおきた原因について学びました。学んだ内容は、①国内政治②植民地支配③現地民(フツ族・ツチ族)④国際社会の4点からみた内戦の原因を「フィッシュボーン」と呼ばれるチャートにまとめていきました。次に、国連平和維持活動司令官・ダレール氏の発言の一部を抜粋し、どのような意図かをグループごとに検討させ、最後に「フツ族」に復讐をしたいという「ツチ族」の友人に対して、自分たちならどのように声をかけるかを話し合い、発表し合いました。

◆ 生徒感想

「1人の命が失われるだけでもたくさんの方が悲しむのに、それが100万人もの人が無差別に殺されたと思うと想像を絶しました。人に言われるがままに行動してしまった現地の人たちを見て、自分の考えを他者に振り回されないようにしっかりもつことの大切さを感じました。」



GCP企画 個人ワークシート

グループWSにまとめたものを記録しておこう!

グループ内作業①
VTRと『事前学習資料』を通して、ルワンダ・ジェノサイドがおきた原因を
①国内政治 ②植民地政策 ③現地民(フツ・ツチ族) ④国際社会
の4つのトピックごとに整理しながら、各自のグループワークシートにまとめてください。

	国内政治	植民地政策
ルワンダ内戦・大量虐殺	ハビシマフ・カイバング政 権の独断的独裁政治 →国民の幸せと願って いない政治	勝手は何も知らないハビシ マ政府からの圧政 ↳ツチ族への暴行 →土への明示・宗教 の強制
現地民(フツ族・ツチ族)	・天竺の組織から言われ たことと、自分 で考えることとが、 人間としていかに、動 物として野蛮に生きている	・植民地政策と行なった こと ・内戦前について重要視 せず、迅速な対応をし なかった
	国際社会	

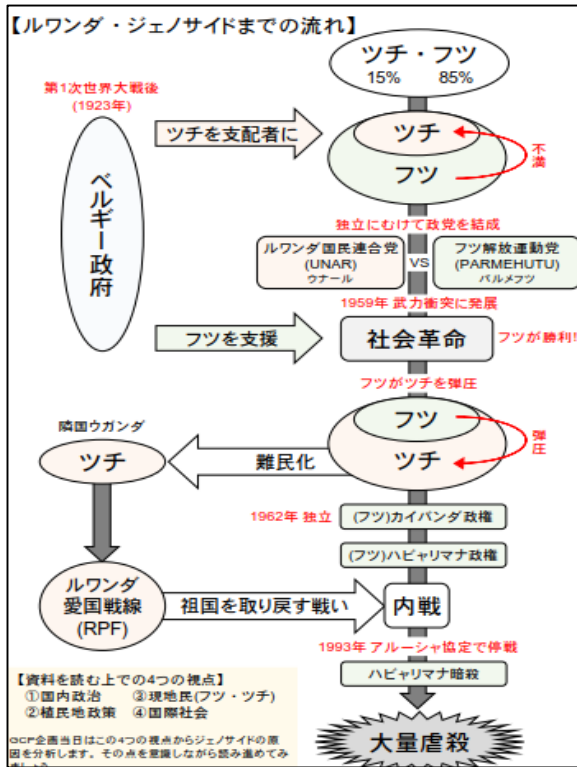
グループ内作業②・③
②『事前学習資料』(p.17)で国連平和維持活動司令官・ダレール氏が次のように語っていますが、どのような意味なのでしょう。グループの意見を書いてください。
わたしたち人類は、人間性の限界点にまで達してしまいました。
そして、その克服に失敗したのです。

「人間性の限界点」
人間らしく生きることは人間性と持つこと
↳他を思いやり、自己共に幸福にしようとすること
⇒ジェノサイドは、この人間性の崩壊が露呈してしまつた、限界点に達してしまつた

「その克服に失敗」
↳国連は、アフリカが1番危ない状況にありながら、それに迅速に対応してはいなかった

内戦の起こるしくみ（まとめの図）

当日課題（ワークシート）



③あるたちは大学に法学し法律の授業を受けています。すると前に「ツチ族」の学生が降りました。会話をしているうちに彼は次のように話しました。あなたたちはどのように彼に声をかけますか？

彼は、彼や親戚を助したフツ族に被害したい。でも、単にやり返すだけではダメだ。彼が通らなければならない。彼らを「合法的」に権限を認めつつある方法を学び、弁論士になるために、大学に来て学んでいるんだ。君も何かアイデアがあったら教えてほしい。

どのように声をかけた理由

本日の企画を通しての感想を書きましよう。

2年 組 番 氏名: _____ 様印

ロールプレイング用 立場を記述したカード（例）

Global Citizenship Project

ロールプレイング 役割カード

役割カード④ **SOKA TVの報道記者**

【自己紹介】
 人種：日本人
 性別：男性
 年齢：25歳
 宗教：仏教

私は日本から取材に来ました。現在ルワンダでは内戦が起っており、街中では銃撃音が頻りに響いています。最近の様子をインタビューしてきたいと思っています。

インタビュー① 国内の状況
 それでは皆さんにインタビューをしていきます。
 ■ ツチ族との関係について → ① ツチ族の少女へ
 ■ フツ族との関係について → ② ツチ族の少女へ
 ■ ツチ族、フツ族の関係について → ③ 国際連盟の兵士へ
 素晴らしい順番で、インタビューをしてください。

インタビュー② 大規模虐殺その後
 それでは皆さんにインタビューをしていきます。
 ■ 大規模虐殺についてどう思われますか → ① ツチ族の少女へ
 ■ 大規模虐殺後の様子 → ② ツチ族の少女へ

※質疑後に国際連盟の兵士にインタビューしてください。
 ■ 大規模虐殺後の国内の状況 → ③ 国際連盟の兵士へ

※続けて、③ 国際連盟の兵士に次のインタビューをしてください。
 ■ 民族間の争いを止められないのですか？ → ③ 国際連盟の兵士へ

(ロールプレイングの終了)

Global Citizenship Project

ロールプレイング 役割カード

役割カード② **ツチ族の少女**

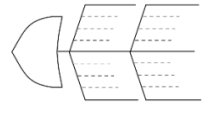
【自己紹介】
 人種：ツチ族
 性別：女性
 年齢：14歳
 宗教：カトリック
 好きなこと：マラソン

私は今学校に通っています。マラソンが好きで、走り方を先生に褒められたことが嬉しかったです。

インタビュー① 国内の状況
 ■ ツチ族との関係について
 学校の周りではランニングの練習をしていると、フツ族の男の子から「ゴキブリだ」といわれられを投げられました。
 お父さんはフツ族は怖くないから近づくといいよ、とよくいいます。
 クリオオは「おまえたちフツ族のようなゴキブリはルワンダ人ではない。駆除されるべきだ。」と言っています。
 私はなぜフツ族だからといっていじめられるのか、よくわかりません。
 でも皆んなフツ族の子たちには近づかないようにしています。

インタビュー② 大規模虐殺その後
 ■ 大規模虐殺後の様子
 今は家族と一緒に学校に通っています。
 学校は良いのですが、同様の軍隊の人が守っていて、命の危険を感じています。学校の周囲には銃弾(おた)をもらった何十人もの人たちがたむろしています。お父さんはあの人たちをインテラハムエ (Interahamwe) と呼んでいます。学校の外からは「ゴキブリを駆除しろ！」と物議が巻き起こります。このままではどうなってしまうのか、少し心配ですが、ミサ(カトリックの儀式)に参加して、心が少し落ち着きました。

GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年11月30日(土) 10:00~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	現代の紛争	本時の題目	現代紛争の実態と原因を探る	
本時の目標	ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目しながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考える			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
27日(水) L H R	事前VTR学習 『事前学習資料』配布	TV放送でルワンダの大虐殺(ジェノサイド)がおこるまでの過程についてVTR学習 GCPリーダーズより『事前学習資料』の配布	30	『事前学習資料』持参 映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(1)」
28日~30日 朝 読 書	『事前学習資料』の読み合わせ	28日(木) ルワンダ内戦・大量虐殺とは 29日(金) 虐殺被害者・加害者の証言 30日(土) 国際社会の対応	各10分	
1 時 限 目 (導入・展開Ⅰ)	①GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	3	『事前学習資料』持参 映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(2)」 ※フィッシュボーン 
	②概略の説明 VTR 学習	ルワンダ内戦についてリーダーズが概略を説明し、その後、VTRを視聴する	15	
	③ロールプレイ	4人1班のグループに分かれ、1人1役のロールプレイを行い、ルワンダ内戦の様子を模擬体験する。	12	
	③グループ内作業① ※4人1グループ	『事前学習資料』を読み解きながら、内戦の「原因」を①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の4つのトピックにグループで整理しながら、グループワークシート(フィッシュボーン)にまとめていく	20	
休憩 10分				
2 時 限 目 (展開Ⅱ)	④グループ内作業②・③ ※4人1グループ	グループで②・③を話し合いワークシートにまとめる。	20	発言や感想をワークシートにまとめていく。
	⑤クラス内発表	各グループでまとめたことを発表する。 ②・③の2項目について各グループ1分程度で発表する。	15	
	⑦まとめ	ルワンダ内戦以外のジェノサイドについて紹介	5	
	⑥個人作業	個人ワークシートに本時の感想を記入する。	10	
	⑧ワークシートの回収と次回予告		5	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・担任は GCP リーダーズの進行のサポートをする。 			

L) 人権すごろく(2年生)

■ 概要

1月18日に行われた第5回目は、「人権」をテーマに、人権というものが、人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解すると共に、身近な生活の中から人権尊重の必要性、重要性を感じることを目標として行いました。

導入として、オリジナル教材である“人権すごろく”を使って、楽しみながら身近な自由が、「人権」として保障されているものであることを知りました。最初に、自身の出身国や性別といった人物像が設定され、設定によって異なる結果がでるようにし、理不尽な人権侵害を体感できるようにしました。各マスには、「突然逮捕される。2マス戻る」や「テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み」など、人権に関わる内容が書いてあり、それを読み上げながら進めることで、理解を深めていけるようにしました。

続いて、人権団体：ユース・フォー・ヒューマンライツが作成した映像『人権の歴史』を視聴しました。短時間で分かりやすく人権の歴史がまとめてあり、生徒の理解が進みました。次にグループごとに、世界で実際に起きている人権問題に関するニュースを配布し、それが世界人権宣言のどの項目に抵触するかを検討しながら学びを深めました。各グループには全て異なるニュースが配られ、最後に自分たちが担当したニュースの簡単な発表を行い、他グループの学習成果についても共有できるようにしました。

この企画を通して、平和な日常で暮らしていると意識できていなかった「人権」というものを少し身近に感じることができました。

◆ 生徒感想

「人権すごろくを通して、世界の不平等な現状について学びました。世界人権宣言を学び、何年も前から議論されている内容だからこそ、国や文化の違いによって、多様な解釈があるということを実感しました。人権を確かなものにするためには、私たちが人権について深く理解した上で、広く共有していくことが大切であると思いました。」

「今も世界のどこかで、日本にいる自分には想像も出来ないほど残酷なことが起こっていると思うと、少しでも早く、世界の1人たりとも人権を脅かされない世界にしないといけないと思いました。人権の難しさとして、人権を脅かしている側にも人権があるということがわかりました。他者を尊敬できる人が増えてほしいと思いました。」

「世界人権宣言は、国によっては殆ど守られていないことを知り、とても悲しくなりました。他国では、1つの考えに縛られすぎて、拷問や死刑など極端な行動が多くあることを知り、とても驚きました。各国の文化や哲学、宗教について深く理解したいと思いました。」



ワークシート(例)

GCP企画【人権すごろくゲーム】

START	紛争が勃発し、住居を失う。以後2回は出た目のマイナス1	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	好きな人と結婚する。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む
右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	紛争が勃発し、難民となる。以後2回は出た目のマイナス1	好きな人と結婚する。1マス進む	Challenge③	脱税の容疑で財産をすべて凍結される。1マス戻る	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む
長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	好きな人と結婚する。1マス進む	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	Challenge⑤	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。
次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	Challenge⑥	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	Challenge①
仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	開発したシステムで特許を取得する。1マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	GOAL	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み
政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	強制的に結婚させられる。1マス戻る	外国に移住する。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	失業をしたが、失業手当をうける。1マス進む	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る
外国に移住する。1マス進む	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	大きな病気になったが保険が適用され安く治療を受ける。1マス進む	Challenge④	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む
労働不審を理由に1ヶ月拘束される。1回休み	Challenge②	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	強制的に結婚させられる。1マス戻る	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る

(1)

エジプト

デモ隊と治安部隊の衝突 撮影しようとして死刑の危機に

2013年夏、エジプト全土でモルシ前大統領の支持者と治安部隊の間で大規模な衝突があり、約1,000人が命を落としました。最多の犠牲者が出たのはカイロ近郊ナセルシティのラバア広場でした。盛り込みでモルシ復権を訴える銀毛派を排除しようとする治安部隊が実弾や催涙ガスを使用し、数百人が亡くなったのです。



マフムード・アブセイードさん

この事件では、デモ参加者が大勢逮捕されました。事件の様子をカメラに収めようとしていたフリーの報道カメラマン、マフムード・アブセイードさんも、逮捕されてしまいます。現場にいたフランスと米国のカメラマンも同様の目に遭いました。2人の外国人カメラマンはその日のうちに釈放されました。しかし、マフムードさんは拘束され続け、今に至ります。C型肝炎にかかっているのですが、治療を受けさせてもらえません。

2年半後によく始まった裁判

マフムードさんは他のデモ参加者など738人とともに起訴され、2016年3月、逮捕されてから2年半以上経って、ようやく裁判が始まりました。マフムードさんが関わったのは「禁止団体（ムスリム同胞団）に所属」「殺人」「殺人未遂」「武力と暴力で体制転覆」など9つの罪でした。マフムードさんはすべてを否認。彼はただ、写真を撮るためにそこにいただけなのです。しかし、裁判で有罪になれば、死刑を科される恐れがあります。

エジプトでは2011年、30年以上続いた独裁政権が民主化運動によって倒れ、翌年、選挙でモルシ氏が大統領に選ばれました。ところが景気低迷と治安悪化で退陣を求めた声が高まり、1年もたたないうちに、軍によって解任されます。治安部隊との衝突事件では、多くのモルシ派が死刑判決を受けています。

(2)

イラン

クルド人女性のために活動して終身刑拷問で失明の危機に

ゼイナブ・ジャラリアンさんは、イランでクルド人の権利、特にクルド人女性の地位向上に取り組んできました。ゼイナブさん自身もクルド人です。2008年3月、彼女は諜報機関によって突然、逮捕されてしまいます。弁護士や家族にも連絡をとらせてもらえず、8カ月も独房に閉じ込められ、その間、壁に頭を何度も打ちつけられるなどの拷問を受けたと言います。そのせいで頭蓋骨にひびが入り、脳内出血を起しました。拷問の後遺症で今も目に問題を抱え、家族の費用負担で刑務所外で手術を受けましたが、失明の危険性は消えていません。しかし治療は拒否されています。



ゼイナブ・ジャラリアンさん

武力闘争に関わったと疑われ

逮捕はクルディスタン自由生活党 (PJAK) の武装派メンバーだと疑われたためでした。PJAKはイラン政府と戦闘を繰り返しており、イランや米国などでテロ組織に指定されています。ゼイナブさんはPJAKの政治部門と連携することはありましたが、武装派との関わりは否定し続けています。

わずか数分で終わった裁判は、神への敬意を持った罪で有罪になり、死刑を言い渡されました。その根拠は拷問で強要された自白で、PJAKの武力行動との関係を証明する証拠は示されませんでした。その後2011年12月に、最高指導者の指示により終身刑に減刑されています。

2016年4月、国連の恣意的拘禁に関する作業部会は、ゼイナブさんがクルド人の権利のために活動し、PJAKの非戦闘部門に関わったために拘束されたとする見解を採択しました。そして彼女を直ちに釈放し補償を受ける権利を法的に認めよう、イラン当局に求めています。

(3)

イタリア

世界の人権問題を知らう
ロマの家族が強制立ち退き 危険な場所からまた危険な場所へ

2016年6月21日、75家族・約300人のロマの人たちが、イタリア・ナポリ近郊にある居住キャンプから強制的に立ち退かされました。



自治体で用意した一時的な居住地

このキャンプはジュリアーノ・イン・カンパニア市が2013年に設置したもので、それまで何度も強制退去を受けてきたロマの人たちは、このキャンプに移されて3年の間暮らしていました。キャンプは有毒廃棄物の埋め立ての近くで、閉鎖は健康・安全上の理由による裁判所の命令でした。そもそも居住地にするには、危険な場所だったのです。

建物のない代替地

ジュリアーノ市は新たな居住地を作ることになりましたが、完成まで住む場所として市が急ぎよ用意した所は、ひどいものでした。テニスコート4面分ほどの狭さの花火工場跡地、周りは雑草だらけ。トイレは二つしかなく、一つはぼろぼろ。一つは壊れていました。排遺物を化学処理するトイレと貯水槽が設置される予定ですが、あまりに劣悪な環境です。

家もなく、住民たちはトレーラーを持ち込むことを許可されましたが、トレーラーを持っていない家族は外で寝泊まりするしかありません。がれきりやさびた釘、「自然発火物」「粉」と書かれた怪しげな容器などが転がったままで、健康面でも安全面でも適切な場所とは言えません。

少数民族ロマの人たちの強制立ち退きは、イタリア各地で行われています。EUが社会統合に向けて資金援助をしているにもかかわらず、ロマに対する差別と偏見がまん延し、へんびな場所に居住区を作るなど、イタリア政府は隔離政策を改める様子はありません。

GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2020年1月18日(土) 8:55~10:45 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	人 権	本時の題目	「世界人権宣言」を学ぶ	
本時の目標	「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。			
項 目	項 目	授業の進行内容（発問も）	時間(分)	留意点・準備・その他
1 時 限 目	SDGs の振り返り	SDGs についての振り返りを行う	3	時間になった時点で全グループ終了 Youth for human rights 作成
	①本時の GCP 企画の説明	本時の内容について説明する	2	
	②人権すごろくゲーム →ゲーム振り返り	ルール説明 4人1組になり、A~Dを割り当てる ルールに従い、すごろくゲームを行う 個人ワークシート配布。①に取り組む	5 15 3	
	③VTR 学習	「人権の歴史(10分)」を視聴する	12	
	④世界人権宣言を学ぶ	世界人権宣言配布。グループで簡易文を読み合わせ、ゲーム中に自分が制限された人権とは何かを考え、ワークシート④に取り組む。	10	
2 時 限 目	⑤世界の人権問題を学ぶ	ワークシート「世界の人権問題を知ろう」配布。グループごとに異なる人権に関するニュースを読み、世界人権宣言に照らしてどの人権が制限されているかを考える	20	
	⑥他のグループと共有	「世界の人権問題を知ろう(一覧)」を配布。グループを組み替え、新たな4人1グループで作業の内容を共有する。	15	
	⑧振り返り・まとめ	本時の振り返りとまとめを個人ワークシートに行う	10	
	⑨ワークシートの回収と次回予告		2	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> ・ GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。 ・ グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。 ・ 担任は GCPリーダーズの進行のサポートをする。 			
講 評				

M) 人権ディベート(2年生)

■ 概要

第6回の GCP 企画(世界人権宣言に学ぶ)に引き続き、「人権」への理解を深めることを目的として、2月12日、22日の2日間にわたり人権ディベートを実施しました。これは、ディベートの手法を用いて少年犯罪の実名報道について知り、そこから、「個人の基本的人権」と「公共の福祉」がぶつかる例について考え、さらに他者の人権を尊重するための方途を探るものです。

人権ディベートを行う「基礎体力」は、言語技術の授業でトレーニングしました。週1回行われるこの授業では、「創価高校は定期考査を廃止すべきである」「創価高校は文化祭を廃止して運動回を実施すべきである」など、身近で、背景知識の必要でない論題でディベートを実施。創立者がかつて「互いの討論を通し、問題の核心に迫り、より優れた解決法を見つけていく『創造的議論』がディベートなのである」と語られたことを、実感を持って学ぶ事ができました。

12日の準備の日には、ディベートについての講義を受け、言語技術の授業で学んだ知識を再確認するところから始めました。そして、この企画では時間がないため、朝読書の時間を活用して事前に肯定側と否定側に分かれ、立論、質疑、アタック、ブロックを考えました。また、個人ワークシートに従って進めていくと、そのまま試合ができるようにしました。22日の本番までに1週間ほどあったため、それぞれ準備を進め、当日の1限目に最終準備の時間を取り、2時間目以降の本番に臨むことができました。第1試合は経験者を含む4グループが試合を行い、残りの8グループはジャッジをしました。第2試合で、ジャッジをしていた8グループが試合を行い、4グループがジャッジを行いました。少年犯罪をめぐる本番の論題は、生徒たちには少し難しく、その場で相手のアタックに切り返し、効果的にまとめを行うことができない部分もありましたが、言語技術の授業で学んだ技術を活かして、論題について、複眼的に考えることができました。

◆ 生徒感想

「人権の侵害とか、公共の福祉とかを考えると、実名報道の是非は非常に難しい問題だと思うが、普段考えることのないことを考えられたので良い経験になった。」

「この企画があるまでは、世界の歴史の人権問題や、私たちにおける人権というものを考えたことがありませんでした。この企画がきっかけで、人権というものを深く知ることができました。」

「ローザパークスさんの映像を見て、今までしっかりと学んできたはずのバスボイコット運動でしたが、やはり、学び直すことはすごく大切だなと感じました。ローザパークスさんと創立者のことについて学び『一人立つ』と言うことがどれだけ大切か、権力にひるまず『NO!』ということがどれだけ勇気のいることか学ぶことができました。」



GCP 企画「人権」ディベートワークシート【準備②】メリット・デメリットを考える

● 少年犯罪の「実名報道」ってなに？

2015年2月に神奈川県川崎市で少年が殺害され、容疑者として3人の少年が逮捕されました。そんな中、ある週刊誌が、逮捕された少年のうち一人を実名と写真付きで公表したこと、少年法第61条が注目されています。この条文は、犯罪等を犯した少年の氏名・写真など、少年を特定できるような情報の報道（推知報道）を禁止しています。



<少年法 第61条>

家庭裁判所の審判に付された少年又は少年のとき犯した罪により公訴を提起された者については、氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等によりその者が当該事件の本人であることが推知することができるような記事又は写真を新聞紙その他の出版物に掲載してはならない。

その主な目的は、少年の社会復帰のためだとして説明されます。犯罪事実が実名・顔写真等とともに公開されると、たとえば少年が少年院等で反省して出所し、新たな人生を歩もうとしている時に、世間の偏見（ラベリング）等により人生をやり直すことの妨げになるため、人格形成過程にある少年の将来を考慮し、実名報道を禁止する必要がありますのだといわれます。少年法は、20歳未満の者を「少年」と定義し、その少年の立ち回り（社会復帰・更生）のためのさまざまな措置を定めているわけです。

● メリットとして想定されること

少年犯罪の抑止効果

現状では、罪を犯しても実名が公開されないため、あたかもそれが、社会や世間から“守られている”という意識を生み、犯罪行為へ走らせてしまう危険性があります。実名報道が行われるようになれば、罪を犯した際に、成人と同じ社会的制裁を受けることになり、このような、犯人として世間に恐れ渡ってしまおうというプレッシャーが、少年犯罪の抑止効果につながることで期待できます。また、社会的制裁を受けたことで、再犯を起させにくくなることも考えられます。

ネットによる不正確な情報拡散の防止

現状では、実名報道が行われていないために、凶悪な少年犯罪が起こった場合、一部ユーザーによってインターネットの掲示板等で犯人を特定するため書き込みが行われることがあります。その際に誤った情報によって無実の少年がつかまえられるという危険性もあります。匿名報道では内容の正しさを確かめることができず、誤った報道が見逃されたままになってしまいうからず。実名報道が行われるようになれば、無責任なうわさや憶測の独り歩きを正し、透明性を確保することができ、無実の少年が犯罪者扱いされる危険性を防ぐことができます。

● デメリットとして想定されること

加害者の人権侵害・更生の阻害

現状の少年法は、処罰することよりも少年の更生に重きを置いているため、実名報道には消極的立場をとっています。少年には社会復帰のために犯罪事実を匿名で公表されない権利があると捉えるのです。実名報道が行われるようになれば、加害者のプライバシーを著しく侵害したり、心を傷つけてしまったりする危険性があります。報道が過熱し、犯罪と直接関係の無いような情報まで日本中に報道されてしまい、社会復帰そのものや、就職が困難になる可能性も考えられます。その場合、再犯につながる危険性もあります。

模倣犯の増加

現状では、加害少年は「少年A」といったような匿名で報道されています。実名報道が行われるようになれば、犯人が有名人・偶像化され、犯行の口口や犯人の性格・趣味などの詳細が合せて報道されることで、同年代の少年たちの中から加害少年をヒーロー視した模倣犯が出てくるおそれがあります。一部には重大事件が真似ることによって社会的な注目を集めたがつている者がいることも事実です。メディアの報道が「模倣犯」を誘発してしまう危険性があります。

えん罪被害

誤認逮捕やえん罪はあってはならないことではあり、万が一そのようなことが起こった場合であっても、実名報道がなされなければ被害をある程度食い止めることができます。実名報道が行われるようになれば、本来無実であった少年が裁判前からあたかも犯罪者のように実名が報道され、名譽を著しく傷つけられてしまうことがあります。一度広がった情報を修正することは大変困難です。無実の少年が犯罪者扱いされ、社会的制裁を受ける危険性は避けるべきです。

【アタックのポイント】

「少年」は、将来において社会を担っていく大人になるための生育途上にあるものです。そのような生育途上にある少年が過ちを犯したからといって、これを成人と同じように社会的制裁を加えることは、少年をきちんと教育していない親を含めた大人が負うべき責任を少年に押し付けることになりかねません。しかし、現状のままでは、少年の更生や社会復帰にはプラスがももたせませんが、他方でメディアや市民の「報道の自由」「知る権利」を考えればマイナスになります。どちらも憲法で守られている重要な権利であり、一般論としてどちらかが絶対的に優位であるとはいえません。しかし、今の少年法第61条は、こうした権利よりも、少年の更生や社会復帰の利益のほうを優先させる立場をとっているようにも見えます。憲法の観点からみれば、これに十分な理由があるかどうか、表現の自由への過剰な制約ではないか、という問題も提起され得ます。しかし、必ずしもメディアが節度ある報道をするとは限らず、視聴者の興味関心をかき立てるだけの悪質なメディアも存在します。また、インターネットの普及によりメディアで報道されなくても、ネット上で集められてしまうケースもあります。一部週刊誌が罰則規定のないことを理由に実名報道をしても、ネット上で集められてしまいうからず、メディアやメリットがその程度の規模で発生するのだから、よく注意する必要があります。その場合に、メリットやデメリットを挙げてみよう！

★この他に思いついたらメリット・デメリットを挙げてみよう！

GCP 企画「人権」ディベートワークシート 【準備③ 立論を構成する】

メリット(M)・デメリット(D) プランを導入することで発生するM・Dを書きます(最大2つまで)

--	--

現状分析 (肯定側は)現状の問題点を主張します

(否定側は)現状のままでも良いことを主張します

発生過程 実名報道がなされるようになり、

M・Dが発生するまでの過程を順を追って整理します

M・Dの発生

重要性・深刻性 なぜM・Dが発生することが(肯定側なら)重要なのか、(否定側なら)深刻なのか説明します

--	--

GCP 企画(2年)

教 科		GCP		担当教員	各担任	
実 施 年 月 日		2020年2月12日(水) 15:15~15:35(20分) 2020年2月22日(土) 10:00~11:55 (115分)		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単 元 名		人 権	本時の題目	身近な人権・創立者の人権闘争を学ぶ		
本 時 の 目 標		ディベートを通して身近な人権について考え、創立者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。				
項 目		項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
12日 (水)	導 入	①TV中継	・ディベートの方法についてレクチャーする ・今後の流れについて説明する	15 3	担任が各教室で流す	
18日 20日 21日	朝読書 準 備	②グループ作業(メリットデメリット) (立論) (反駁)準備	朝読書 10分間(3日間)を活用して左記の項目についてそれぞれのグループで準備を進める。	合計 30	担任やGCPリーダーズからの声かけをお願いします。	
22日 (土)	展 開 10:00~ 11:55	8:55~ 9:45	③グループ作業	事前準備の詰め、原稿読みあげ練習 ※15分の休憩中に机を皆で移動させる	50	
			④ディベート(第1試合)	第1試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2分)(1分)否定側質疑(2分) 否定側立論(2分)(1分)肯定側質疑(2分) 否定側アタック(2分) 肯定側アタック(2分) 作戦会議(3分) 否定側ブロック(2分) 肯定側ブロック(2分) ジャッジ・講評(5分)	26	
			※休憩	【休憩・移動】机の移動	10	
			⑤ディベート(第2試合)	第2試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2分)(1分)否定側質疑(2分) 否定側立論(2分)(1分)肯定側質疑(2分) 否定側アタック(2分) 肯定側アタック(2分) 作戦会議(3分) 否定側ブロック(2分) 肯定側ブロック(2分) ジャッジ・講評(5分)	26	
			※休憩	【休憩・机をもとに戻す】	15	リーダーズが各教室で流す
			⑥振り返り	ディベートの反省・改善点を挙げ、議論を通して感じたこと、学んだことを振り返る	5	
			⑦VTR鑑賞	VOD『人権の夜明けのために~ローザ・パークスと池田大作~』を視聴する	17	
			⑧振り返り・まとめ	個人ワークシートに本時の感想を記入する	10	
			⑨ワークシート回収		3	
課 題		・1試合目と2試合目の組み合わせは各クラスで決めてください。(1試合目進行はGCPリーダーが担当) ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。				
講 評						

N) 模擬国連① COP21 (3年生)

■概要

模擬国連とは、実際に国連で行われている国際会議をモデルにして、一人一人が世界各国の大使となって会議・交渉を行うものです。今回は、気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラスを15の国に分け模擬国連を実施しました。

2020年以降の新たな枠組みの創設を目指し、論点①「2020年以降の温室効果ガスの新しい削減目標」、論点②「先進国と途上国の扱いをどのように区別するのか」という二つの論点に沿って、それぞれの国の立場で交渉を重ねました。会議の最後には、決議案を全会一致で採択することを目指しました。

◆生徒感想

「今回のGCPでは、相手を説得する力や、自分から相手に改善策を提案する力が求められたものでした。その中で、やはり何か問題を抱えている国の立場を支援したりして解消できる国が中心になっていくことが上手く温暖化を防止できる要因になってくると思いました。しかし、現実では何億人という人の生活や社会を動かしていくのはとても大変だということを知りました。より世界の問題に耳を傾けることができ良かったです。」

「一言で言うとすごく面白かったです。みんなそれぞれ主張を持っていて、絶対に意見を曲げなかったり、時間がもう終わりそうなときに、サインが消されてしまったり、すごく慌ただしかったけどとても楽しく出来ました。と同時に、アメリカってやっぱり強いんだなと思いました。経済力もあり、お金は人を動かすんだなと感じました(笑)。みんなで団結したり、言い争ったりする機会はなかなか無いので、新鮮だったし楽しかったです。」

「コンゴとアメリカとインドとインドネシアの外交力がとにかく優れていて何度も困られました。もっといろいろ強く主張すれば良かったな～、模擬国連なめてたな～って後悔が残りました。もう一回リベンジさせて欲しいです。今回、自分の外交力のなさを痛感させられたので、これからは、もっと貪欲に世界のことに学んだり、自分の力を高めていきたいなと感じました。繰り返します。もう一回模擬国連やりたいです！！」

「難しかった。これは何のための交渉なのか段々分らなくなっていた。その場で意見を変えるのは簡単だけど、長い目で見たとき自国はどうなるのか、きちんと数字を含めて考えていないと、目の前の問題は解決できても新たな問題が生まれてしまうのではないかと思った。」

GCP 企画(3年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年6月1日(土) 08:55~10:50 (90分) 2019年6月15日(土) 08:55~10:50 (90分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催(気候変動枠組み条約)	
本時の目標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
6月1日(土)	GCP 企画の説明(模擬国連とは何か)【各クラス】	PowerPoint で国連の概略と議題の説明、当日までの課題(スピーチの作成)の説明	15	「模擬国連とは」の ppt 資料配布
	事前学習① 「COP21」とは何か	模擬国連のテーマとなる「COP21」とは何か、気候変動枠組み条約の基礎知識を学ぶ	15	「事前学習資料①」配布
	自分の担当する国を知ろう	自国の状況を理解し、Position Sheet を作成する	20	「Position Sheet」を配布
	事前学習②、③ 国別に分かれて事前準備 【国ごとの教室】	会議での論点の確認と、国ごとにスタンスペーパーの読み込み、決議案の作成、スピーチの準備を行う	75	「事前準備資料②」「③」「決議案」「スタンスペーパー」の配布
	事前学習④ 【各クラス】 模擬国連の流れの説明	GCP リーダーズが、模擬国連の当日の流れを説明し、国別に最後の準備を行う	20	「模擬国連の流れ」の ppt 資料配付
6月15日(土) 準備	机、イスを配置し、国名プレートを設置	会議開始のための準備を整え、国別に最後の確認を行う	15	「ネームカード」配布
展 開	①開会宣言・出席国の確認	議長の開会宣言と出席国確認を行う ・「Yes/Yes present」と答える	1	「スタンス Memo」 1分をタイマー表示 30分をタイマー表示。 議長、秘書官は各国の調整に動く。 1分をタイマー表示 40分をタイマー表示 決議案を受け取ったら 秘書官は電子黒板に書き込む 反対する国はプレート を挙げる
	②スピーカースリストの解放	スピーチをしたい国を募る ・希望する国はプレートを挙げる	1	
	③スピーチ(前半8カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	8	
	④アンモデ(自由交渉)	決議案に9カ国以上の署名を集めるために自由に歩き回って交渉を行う	30	
	⑤スピーチ(後半7カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	7	
	⑥アンモデ(自由交渉)	9カ国以上の署名を集めるために交渉を行い、署名が集まったら議長に提出する。採択の際に反対する国が出ないように、非署名国にも交渉を重ねる	40	
	⑦決議案の読み上げ	提出された決議案を議長が読み上げる	5	
	⑧投票	コンセンサス採択を採用し、反対が1カ国でもあれば否決とする	2	
	⑨閉会宣言	議長の閉会宣言と全員の拍手で閉会	1	
	まとめ	⑩振り返りの記入	「Reflection Sheet」に振り返りを記入する	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・6月1日までに自分クラスのグループ分けと国分けを行う。 ・6月5日のに GCP リーダーズで実際にプレ模擬国連を開催する。 ・担任は GCP リーダーズの進行のサポートをする。 			

メンバー



日本模擬国連
FCCC/CP/2015/

Japan Model United Nations
Framework Convention on
Climate Change (Date: London
27 April 2015)

Draft Resolution (決議案)

Conference of the Parties
共同提案国 (自由参加9ヶ国必要):

COP21は、

国家効果ガス削減目標の設定に際しては (選択性: a 削減量 b 経済力 c 能力 d 歴史的責任) が重要な基準であることを強調し、

気候問題の解決に向けて努力する過程で、「共通だが差異ある責任」に留意し、

(1) 従来の先進国(途上国の分類) (2) 先進国(途上国の次期)だけでなく途上国を考慮した分類 (3) 先進国(途上国の分類) を採用することを強く奨励し、

1. 温室効果ガスを削減するためには、()² ことを締約国に推奨することを求める。
2. 削減目標をすべての国が設定し、その達成について「途上国には、能力のある国には、すべての国に」法的約束力のある「あるべき」ものとすることを要請し、
3. 「共通だが差異ある責任及び各国の能力」を考慮し、(1) 先進国がより高い責任を負うべき (2) 先進国ならびに能力ある途上国が協力的に責任を負うべき (3) 従来の先進国(途上国の二分法)から脱却し柔軟な解釈・適用すべきことを要請する。

1 [1]～[3]の中で、該当する考え方に○を付けてください。
2 例として(1) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (2) 再生可能エネルギーの割合を拡大させるとともにエネルギー効率の改善も図る (3) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (4) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (5) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (6) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (7) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (8) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (9) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる (10) 再生可能エネルギーの割合を拡大させる

3年 組 評 名簿



○) 模擬国連② 核軍縮 (3年生)

■概要

模擬国連の第2弾として、2学期は「核兵器」をテーマに「核軍縮会議」の模擬国連を実施しました。政治的にも大変難しいテーマのため、現実世界の国をモチーフにしながらか国12カ国の架空の国を設定し、核兵器の実験をめぐる「核実験禁止条約」、核保有国と非核保有国の定義を定める「核兵器拡散防止条約」の2つの条約案の採択を目指しました。

各クラスのGCPリーダーが、会議の議事進行、交渉の調整、決議案の採択等を行う、議長(Chairman)、秘書官(Secretary)を務めました。その他の生徒は参加国(12カ国)の大使として、国家元首から受け取った「指令書」に基づいて、「絶対に譲れないこと(妥協できないこと)」と「成功のために譲ってもいいこと(妥協できること)」を踏まえて交渉にあたります。

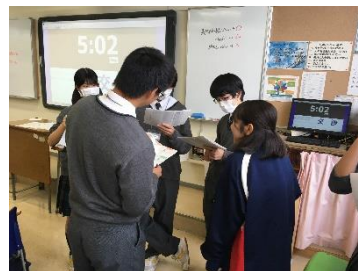
「核実験禁止条約」では、地下核実験を残すことを主張する国との対立が表面化したり、「核兵器拡散防止条約」では、秘密裏に核兵器を開発している国の立ち位置が重要な鍵となったりしました。また、3回にわたって行われた企画の途中には核実験の被爆国による核廃絶へのスピーチや、核兵器を開発している国に対する追加の経済制裁などの出来事も加わり、常に情勢が変化する中で進行しました。

今回の条約案には、指定された国が1カ国でも反対あるいは棄権した場合には条約が採択できないという「発効要件国」の基準を設けたことで、条約の採択がこれまで以上に難しい側面もあり、生徒たちは核兵器のない世界を目指しながらも自国の利益を確保させながら難しい立場で交渉を行いました。

◆生徒感想

「自分たちの意志を伝えたとしても、現実には意志通りにいかないものだと感じ、ほんの少し理不尽なのではないかと思いました。世界の首脳たちが集まる会議は本当に難しいものだと強く感じました。それでも妥協せず、核兵器の完全な廃絶を目指していくことを諦めずに訴え続ければ、人類の切なる願いがきっと叶うのではないかと思います。」

「様々な意見を持つ国々が集まり、条約を成立させることがこんなにも難しいと思わなかった。核兵器が決していいものではないと大多数の国が分かっているにもかかわらず、自国の利益や他国との関係性が原因で、なかなか交渉が進まなかった。最後のVTRにもあったように、私たちの世代は核兵器をゼロにしたいと考えている人が世界中に増えてきているので、現代ならではのSNSなどを使って、国家や政府に任せるのではなく、一人ひとりが主体となって核廃絶に少しでも貢献していけたら良いと思った。」



GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年10月16日(水) 14:45~15:55 (70分) 2019年11月30日(土) 10:00~11:55 (115分) 2019年12月4日(水) 10:55~12:45 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催(核軍縮)	
本時の目標	「核軍縮」をテーマに、各クラスで架空の国 12カ国に分かれて模擬国連を実施し、核兵器をめぐる各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
10月16日 (水)	GCP 企画の説明(核兵器をめぐる昨今の国際事情)	TV放送で本企画の目的と、核兵器禁止条約採択の意義を確認する。	5	TV放送準備 冊子配布
	VTR 学習 核兵器開発競争の歴史 模擬国連のルール説明	映画『カウントダウンゼロ』より核兵器開発競争の様子を学ぶ 本企画の模擬国連の流れ、ルールを確認	10 10	
	①作戦会議	各国のグループにわかれ、「指令書」を読み、「関係図」を参照しながら交渉のための作戦を立て、交渉(情報収集)を行う	10	指令書配布 関係図配布
	②交渉	交渉を通して得た情報を整理し、次回に向けて作戦を立てる	20	
	③作戦会議(振り返り)		15	振り返りシート配布
11月30日 (土)	企画の流れを確認		5	
	④作戦会議	前時の内容を確認し、情報を整理しながら作戦を立てる	10	
	⑤スピーチ	自国の状況や交渉条件等を提示し、交渉を有利に進められるようにする	8	スピーチメモ用紙配布
	⑥作戦会議	各国の状況や交渉条件を聞き、どのように交渉を進めるか作戦を立てる	10	
	⑦交渉	実際に交渉を行う	25	議長は必要に応じて決議案(未記入)を各国に配布
	⑧作戦会議	交渉を得て再度作戦を立てる	5	
	⑨交渉 ※状況に変化あり	再び交渉を行う	25	
⑩作戦会議(振り返り)	2回の交渉を経て得た情報を整理し、次回に向けて作戦をたてる	10		
12月4日 (水)	企画の流れを確認		3	
	⑪議長案の提示・スピーチ ※状況に変化あり ※議長案に対する立場表明	前回の内容を確認し、情報を整理しながら決議の採択に向けた作戦をたてる	16	
	⑫交渉	決議の採択に向けて最終的な交渉を行い、決議案を議長に提出する	25	議長は必要に応じて決議案(未記入)を各国に配布
	⑬決議	提出された決議案をもとに採決を行う	5	
	まとめ ・VTR 学習 ・SGI 提言について ・担任講評 ・総括シート	映画『カウントダウンゼロ』より核兵器廃絶の必要性を学ぶ GCPリーダーズより2017年SGI提言について研究発表 総括シートを使って本企画を振り返る	10 5 10	学習資料・振り返りシート配布
課 題	・10月16日(水)までにグループ分け・国分けを行う。 ・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。			
講 評				

核軍縮会議 Nuclear disarmament conference

ここは、とある惑星のとある世界一。二度の世界大戦を経験した人々は、自国の防衛のために核兵器を開発した。当初、核兵器の開発・製造は技術力・経済力のある国のみで行われていたが、次第に拡散。人々は核の脅威にさらされることとなった。そこで、各国の代表が集まり、今後の核兵器の在り方について議論することとなった。すでに核兵器を保有する国は、これ以上の核保有国の増加を防ごうと、また、大国が核を保有することを懸念する国は新たな核開発を押し進めた。それらの国の利害に挟まれ、多くの国が核兵器の脅威から逃れようと核廃絶を訴えた。

はたして、彼らの意見は一つにまとまるのか。これから、みなさんは各国の特命全権大使となり、自国の利益を確保しつつ、国際社会の調和をはかる難しい議論の場に足を踏み入れる。

A 参加国

リオ合衆国 アリーズ連邦 パイシース国 ジェミニ国 キャンサー王国
ヴァーゴ国 リーブラ国 サジタリアス国 カプリコーン国 スコーピオ人民共和国
アクエリアス国 トーラス共和国

B 決議内容

01 核実験禁止条約

成立条件：核兵器保有国 2ヶ国かつ非核兵器保有国 6ヶ国の参加

内容：大気圏内(地上)の核実験・地下核実験・海中核実験・爆発を伴わない核実験(臨界前核実験・未臨界核実験)のいずれか、もしくはすべての核実験の禁止。

02 核兵器拡散防止条約

成立条件：核兵器保有国 2ヶ国を含む 9ヶ国以上の参加

内容：核保有国・非核保有国の認定。核保有国の非核保有国への管理権を含む核兵器の販売・譲渡・勧誘・開発支援等の禁止、及び、非核保有国の管理権を含む核兵器の開発・製造・所持・受納等の禁止。



C 会議のルール

- 01** 各国の国家元首から受け取った「指令書」に基づいて、「絶対に譲れないこと(妥協できないこと)」と「成功のために譲ってもいいこと(妥協できること)」を踏まえて交渉にあたる。「指令書」は他国に見せてはならない。ただし、交渉の中で必要な情報は提示し、自国の利益に結びつくよう他国との交渉に臨んでよい。
- 02** 2つの条約をそれぞれ決議する。他の条約の提出は不可。しかし、条約のアレンジは可能。
- 03** 核兵器を 1000発以上保有している国は、「核兵器を保有している」ということを必ず公表すること(保有数については、具体的に公表しなくてもよい)ただし、秘密裏に核兵器を開発している国や開発を進めている国については、交渉に応じて公表するかしないかを判断してよい。
- 04** 交渉中、うその情報を流すことは禁止。ただし、「指令書」に書かれている事実をすべて公表する必要はない。情報に含みを持たせつつ交渉を進めることは可能とする。

D 会議の流れ

① 10月16日(水) 70分



② 11月30日(土) 90分



③ 12月上旬(3年登校日) 50分



E ポイント

すべての国が核廃絶を望んでいるわけではありません。各国が連携し、上手に交渉できれば条約が可決されることはないでしょう。関係図をよく整理しながら、どこの国と連携し、どの国を説得しなければいけないのかを考えて交渉しましょう。核兵器不拡散条約で核保有国としてどの国を認めるのが議論の争点になるでしょう。



①核実験禁止条約 決議案 -Draft Resolution-

共同提出国

第一条

1 締約国は、自国の管轄又は管理の下にある

いかなる場所 大気圏内(地上) 地下 海中

において、核兵器の実験的爆発及び他の核爆発を禁止し及び防止することを約束する。

2 核兵器の実験的爆発及び他の核爆発には爆発を伴わないもの(臨界前核実験あるいは未臨界核実験)を

含む 含まない

ものとする。

3 締約国は、更に、核兵器の実験的爆発又は他の核爆発の実施を実現させ、奨励し又はいかなる態様によるかを問わずこれに参加することを差し控えることを約束する。

4 ※必要であれば記入

成立条件：核兵器保有国2 か国かつ非核兵器保有国6 か国の参加

②核兵器拡散防止条約 決議案 -Draft Resolution-

共同提出国

第一条

1 締約国である各核兵器国は、

核兵器と、その管理権をいかなる者に対しても移譲しないこと、及び核兵器の製造・取得について、いかなる非核兵器国に対しても何ら援助、奨励又は勧誘を行わないことを約束する。

2 締約国である各非核兵器国は、

核兵器を開発・製造しないこと、及び核兵器とその管理権をいかなる者からも受領しないこと、及び核兵器の開発・製造についていかなる援助をも求めず又は受けけないことを約束する。

3 締約国である各核兵器国は、核軍備競争の早期の停止及び核軍備の縮小に関する効果的な措置につき、法的な拘束力を有しかつ期限を伴う計画に従い、

核兵器の完全な廃絶を約束する。
 核軍縮の誠実な履行を約束する。
 核軍縮に関する条約の制定を目指し、誠実に交渉を行うことを約束する。

4 ※必要であれば記入

成立条件：核兵器保有国2 か国を含む9 か国以上の参加

P) ファイナル・プロジェクト (3年生)

■ 概要

2016年度に、これまで各教科で個別に展開されてきた探求学習を統合し、教科横断型のプログラムを組めないかというアイデアが生まれ、全校対象企画の GCP = Global Citizenship Project で進めている探求学習の集大成として、「現代社会」と「英語表現」がコラボレーションした「Final Project」という企画が着想されました。

「Final Project」は1・2年生での GCP(Global Citizenship Project)の取り組みを通して興味・関心をもった分野を SDGs の 17 のゴールの中から一つ選び、探究活動を進めるものです。

GCPでは、「2030アジェンダ・SDGs」を活動の中心に据え、環境・教育・人権・紛争解決・核軍縮などをテーマに、1年次より様々な企画に取り組んでいます。リンクマップ作りや貿易ゲーム、模擬国連や独自の教材などを用いて、地球規模課題や SDGs への関心を高めてきました。そして、3年次に「現代社会」の授業内容とも関連させ、これまで学んできた SDGs の 17 のゴールの中から、自分をもっとも興味をもった分野からテーマを設定し、日本語と英語の二言語でポスターセッションを行う「Final Project」を進めています。

そして今年、本校が SGH としての出発を切ると同じタイミングに入学し、言語技術の授業を受けてきた生徒が3年目となり、「現代社会」と「英語表現」に加えて「現代文」の3教科横断型の取り組みに力を入れて実施しました。

● 企画の流れ

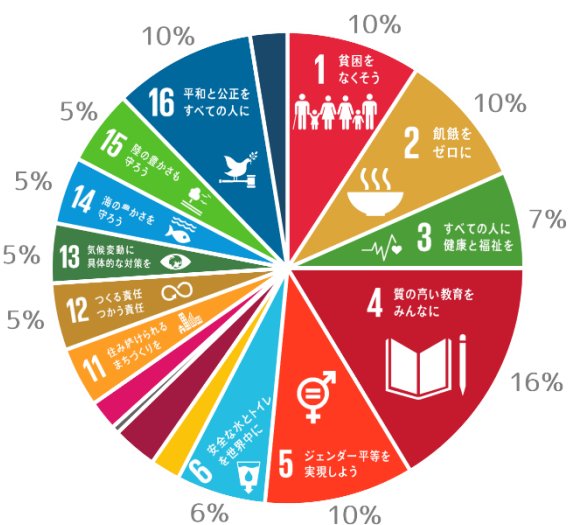
【現代社会】

この企画の準備は、主に週2時間の「現代社会」の授業を中心に行いました。

生徒たちは一学期の5月からテーマの選定に着手しました。SDGs の 17 の目標から大テーマの一つを選び、さらにそれを分析するための「リサーチクエスチョン」を設定していきます。

さらに自分が掘り進めたいと思う小テーマを設定します。テーマ設定においては玉川学園発刊の『学びの技』を使用し、調査対象が広すぎるテーマ、専門的すぎて狭すぎるテーマ、調べたらすぐに結論が得られてしまいそうなテーマなど、さまざまなケースを学び、検証させました。生徒が選んだテーマの内容と内訳を見てみると、「4 質の高い教育をみんなに」をはじめ、「1 貧困をなくそう」「5 ジェンダー平等を実現しよう」などが特に関心の高い分野であることがわかります。

教員からもフィードバックを与え、一学期に確定させた小テーマをもとに、夏休みには素材集めのための徹底的なリサーチを行います。その際には、①インターネットの文献は控え、本や雑誌などの書籍を調べる、②図書館に必ず1回以上行くこと、③必要に応じて資料館などのフィールドワークを行うことを課題として課しました。



③ 目標達成必ず！ 1回は行く <必ず参加！ 訪問先>

本番まで残りわずか！ 目標達成に向けて、1回でも多く訪問先へ足を運ぼう！ 訪問先は、必ずしも1回限りでなく、複数回訪問しても構いません。訪問先は、必ずしも1回限りでなく、複数回訪問しても構いません。訪問先は、必ずしも1回限りでなく、複数回訪問しても構いません。

訪問先リスト

1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6
1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6
1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6

訪問先リストには、様々な企業が掲載されています。興味のある企業は、必ずしも1回限りでなく、複数回訪問しても構いません。

④ できるだけ資料館・博物館などの74・84・94を実績とする

資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。

館名	所在地	ジャンル
1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6
1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6
1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6	1・2・3・4・5・6

資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。資料館・博物館などの74・84・94を実績とする。

3-1 見せるポスター - 読ませるポスター

見せるポスター - 読ませるポスター。見せるポスター - 読ませるポスター。見せるポスター - 読ませるポスター。

ポスターデザインの例

ポスターデザインの例。ポスターデザインの例。ポスターデザインの例。

見せるポスターの例

見せるポスターの例。見せるポスターの例。見せるポスターの例。

読ませるポスターの例

読ませるポスターの例。読ませるポスターの例。読ませるポスターの例。

4-3 注意すべき「察別」

注意すべき「察別」。注意すべき「察別」。注意すべき「察別」。

4-4 スピーチ

スピーチ。スピーチ。スピーチ。

大きさ

大きさ。大きさ。大きさ。

高さ

高さ。高さ。高さ。

スピード

スピード。スピード。スピード。

ナンバリング

ナンバリング。ナンバリング。ナンバリング。

例え話

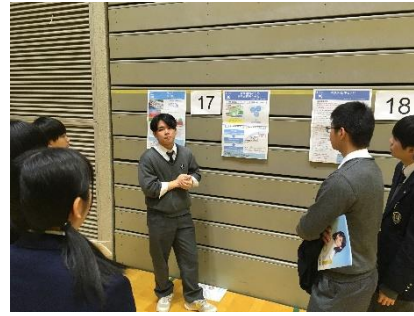
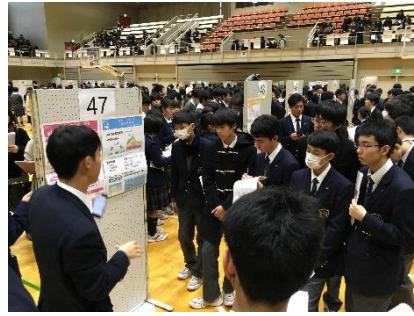
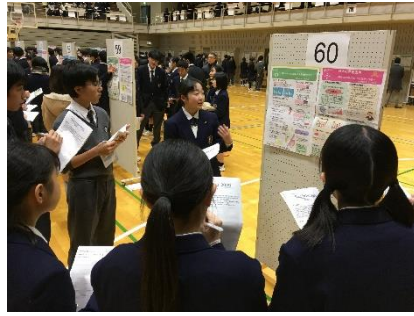
例え話。例え話。例え話。

前置き

前置き。前置き。前置き。

そして、2学期になり、現代文で執筆したレポートをもとに11月にポスター制作に入りました。ポスターを作成する際には、「見せるポスター」「読ませるポスター」を意識させ、レイアウトや文字の大きさやフォント、色使いなどの最低限のデザインについて学習を進めました。また、発表の際の声や姿勢、アイコンタクト、ボディランゲージ、ナンバリングなどの基本的な方法についてもレクチャーを行いました。これらのことを一度11月中にポスターセッション行った際に、生徒同士で相互チェックさせることでブラッシュアップを行いました。冬休みには、ポスターの修正を行いクラス内でも発表に向けて最終調整を行いました。発表自体は6分前後で組み立てていたため、本番では質疑応答も含めて10分という時間をどうデザインするのかを生徒たちに考えさせました。

いよいよ迎えた本番では、体育館全面を貸し切り、盛大にポスターセッションが行われました。1・2年生もオーディエンスとして参加し、前後半2回にわけた発表のうち、1回は決められた場所に、もう1回は自分の聞いてみたい先輩のところに行くという形をとりました。また、本年度はこのポスターセッションを保護者や一般の方にも公開しました。さらに、過去2年間の反省を生かし、発表のブースの間隔を広げるために体育館中央にもパネルを設置し、発表スペースを増やしました。全体として過去と比較して、活気溢れる発表の場となりました。



【英語表現】

今年度の3年生の授業は週3回あり、日本人1人と外国人1人の体制でファイナルプロジェクトへの取り組みを行いました。

目標として、「地球規模課題について、英語で知識を深めるとともに、自信をもって英語で発信する力を養うこと。また、そのために不可欠な力として、英文法・会話・クリティカルシンキング・ライティング等の力を培う」ことを掲げ、最終成果として、現代社会で行ったポスターセッションを、紙面やスピーチも含めてオールイングリッシュで行いました。

1学期は、5W1Hを意識させるようなアクティビティーや「事実と意見」を区別するクリティカルシンキングを主に会話ベースで行いました。また、最終的な発表の原稿を英語化していく上で必要となる、英文法についても復習と同時に毎週80～100wordsのライティングを1本行い、その都度、外国人講師に添削をしてもらいました。

夏休みには、現代社会の課題と併行し、各自で実施したフィールドワークで集めた素材をもとに、5W1Hを意識して200～300wordsの原稿を作成しました。そして、2学期の始めには、夏のフィールドワークと素材集めの成果と学びを原稿にし、ネイティブのチェックを入れて発表しあいました。その際、事前にWORD LISTを作成させて、聞き手には難しいと思われる英単語の発音と意味を最初に確認してから発表しました。その後、発展的な力をつけることを目指して、「グラフの種類や説明の仕方、出典・引用を明示する英語表現」を学びました。



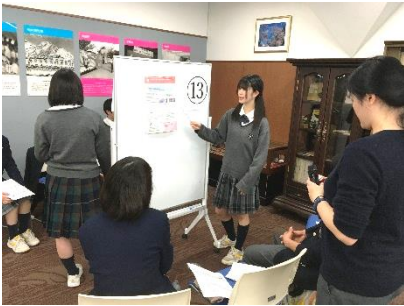
3学期は、ファイナル・プロジェクトの完成をめざして、現代社会で既に完成させた原稿とポスターを英語化していったほか、研究成果をまとめるAbstract(要旨)の作成も行いました。授業内のネイティブチェックの他、放課後のCWC(Critical Writing Center)では、平日放課後に、3人の英語科の教員が、一人20分かけて、添削や構成チェック等のアドバイスの場を設けたところ、85人(35%)の生徒が予約を取り、授業時間外に添削を受けました。また、プレゼンテーション原稿が完成してからは、外国人講師によるPresentation WorkshopやWeblio英会話では、フィリピンの講師の先生にプレゼンテーションの原稿を聞いてもらい、質疑応答を行いながら、当日の発表に向けた準備も進めてきました。



そして、2クラスずつで行ったポスターセッション本番ではグループごとに、英語によるPresentation、質疑応答(Q&A)、ルーブリックをもとに友達同士で評価をしあい(Peer Evaluation)、audienceは英語でCommentsを述べました。さらに後日、日本語のポスターセッションの時と同様に、体育館を貸し切って学年内でポスターセッションを行いました。学年ポスターセッションには、保護者やSGHの関係者も見学に来られました。

ポスターセッションでは、日本語・英語の両方において、大学受験の生徒や当日の体調不

良などの欠席を除けば、200名以上の生徒全員が課題に取り組み、ポスターセッションをすることができました。多くの生徒が、最初は受け身だったものの最終的には意欲的に取り組むことができたことと述べていると同時に、その過程で大学や社会で必要とされる様々な力が身についたと振り返ってくれました。今後は、ポスターは情報科、その他細かな指導は担任などと協力しながら、全校をあげての指導体制の構築を模索して参ります。また、2年間の言語技術で身についた基礎力を生かし、さらに充実の、そして生徒の成長につながるファイナル・プロジェクトを目指します。



生徒が作成したポスター（日本語/英語）

4 質の高い教育をみんなに

児童にとってのコミュニティ図書館に必要なこと

3年1組24番 大森 忍

①コミュニティ図書館建設までの流れ

カンボジアのコンポントム州のニーベック村→識字率**40%**
 モニタリング調査→**78%**の村人「読み書きできないことで不安や不便を感じた」と回答
 ↓
 図書室と識字教室を一緒にした施設と活動が必要
 ↓
コミュニティ図書館を建設

②コミュニティ図書館の内容・特徴

【内容】
 ①図書館づくり
 ②識字教室の開催
 ③農業研修・保険衛生の講習など
 ④スポーツ・文化活動などライフスキル講座の開催

★【運営目的】
 →住民の生活の向上と村の発展

④コミュニティ図書館に必要なこと・提案

①**児童の学力の基礎を育成する本や絵本を提供すること**
 利点→「読書は、子どもたちの想像力や心の豊かさを育むとともに、論理的思考力を発達させる面で大きな役割を果たす」【文部科学省「これからの図書館サービスの在り方」より】

②「**児童にとっての心の居場所**」として図書館を運営
 提案→学校や家などで自分の居場所を感じられない児童が、コミュニティ図書館に来ることで**安心**できる。図書館の誰かにSOSを伝えられるきっかけになるかもしれない。「常に壊されない心の居場所」を提供したい。
コミュニティ図書館＝児童の心の支え

③コミュニティ図書館運営の成功理由

①モニタリング調査で村人の識字率を把握
 ②村の自治体→本気で課題を解決したい
 ③自治体と事業を支援するボランティア団体→話し合い、村に何が**必要か明確**
 ④**図書館員の育成**
 ⑤移動図書館による広報活動→住民の図書館への理解を広げる
 ⑥年間活動計画の策定と予算づくり、資金調達
 のサポート→ボランティア団体が行う
 ⑦農業研修・保険衛生の講習
 →実践的で**日常生活で直接役立つ学習**を提供

<参考文献一覧>
 書籍・冊子
 1) 鈴木真子+山本英希+三宅隆史(公益社団法人シャント国際ボランティア会)(2017)「わたしは10歳、本を知らずに育ったの。」合同出版株式会社、p.60-61,68-69,118-119.
 2) (2013年3月)「国際理解教育実践資料集～世界を知らう！考えよう～」独立行政法人 国際協力機構(JICA)地球ひろば、p.18-21
 インターネット
 3) ケア・インターナショナル ジャパン CAREの支援地域一覧 カンボジア 内戦による影響、p.1

4 質の高い教育をみんなに

What a community library needs

3年1組24番 Shinobu Omori

①A series of construction the Community Library

Neypeck village in Kampong Thom Province in Cambodia→literacy rate **40%**
 monitoring survey→**78%** of villager answered「felt anxious or inconvenient due to cannot read or write」
 ↓
 The village needs the Library and Literacy class
 ↓
Build the Community Library

②The library organizes various events
 【The library organizes various events such as ...】
 ①Running the library
 ②Literacy class
 ③Agricultural training, health & hygiene workshop
 ④Sports and cultural activities
 ★【The purpose of running the library】
 →development of village and improve the life of residents

③The success reason of running the library

①Grasp the villager's literacy rate by monitoring survey
 ②Village municipalities really can think to solve the problem
 ③Village municipalities and volunteer group can discuss and know clearly what the village needs
 ④To develop the librarians
 ⑤Public relations of activity by mobile library
 →expand resident's understanding of the library
 ⑥The volunteer group formulate the annual activity plan, draw up a budget, & support funding
 ⑦Agricultural training, health and hygiene workshop→Providing learning directly useful for everyday life

④What a community library need(my proposal)

①**Community library needs to provide rental service of book which develop basic academic skills of children**
 Reason→「Reading books play a major role in terms of develop children's imagination and spiritual happiness, along with that, develop logical thinking.」
quoted from MDXIF concept of future library service

②「**Community library should operate as a place where children can relax.**
 Reason→I want to save children who feel themselves out of place in their school and home by running the library.
Community library＝support for the children's mind

<References>
 Books+booklet
 1) Shant Volunteer Association,(2017)「I'm 10 years old, I grew up without knowing the book.」,Godo-Shuppan Co. Ltd., p.60-61,68-69,118-119.
 2) (March,2013)「Education for International Practice collection of materials-Let's know the world! Let's think!-Japan International Cooperation Agency(JICA)Global Plaza,p.18-21
 Internet
 3) CARE-International Japan, CARE's list of support areas Cambodia Impact of civil war, p.1

【現代文】

高校3年生の現代文では、週3時間あるうちの1時間を1・2年生で受けてきた言語技術の授業を発展させた、文章表現の授業にあて、現代社会で選択したターゲットに関する小論文を執筆するためのトレーニングを行いました。

現代社会での夏休みのリサーチを経て、2学期に入ってからそれぞれが決めたテーマに対する自分の主張が決まるため、1学期から2学期前半までは、論理的文章を執筆するための基本技術や、パラグラフライティングの“型”を学習しました。そして、2学期後半から3学期にかけてエッセイ(小論文)を執筆する、という計画で進んできました。ここでは、エッセイ執筆に直結するパラグラフの“型”以降の学習について取り上げます。

まず授業では、FPのエッセイを執筆する際に応用できる“型”として、描写型・例示型・経過型・意見型・物語型パラグラフ構成を紹介し、次の段階では、例示型・経過型・意見型の3種類のパラグラフを使用して実際に400字程度でTS(トピックセンテンス)・SS(サポーティングセンテンス)・CS(コンクルーディングセンテンス)の揃ったパラグラフを執筆し、相互添削しました。

<p>(2)-② 様々なパラグラフの“型”</p> <ul style="list-style-type: none">a) 描写型パラグラフ ➡ 写真・図等の分析b) 例示型パラグラフ ➡ 事例の分類c) 経過型パラグラフ ➡ 問題発生過程の提示d) 意見型パラグラフ ➡ 解決策の主張e) 物語型パラグラフ ➡ 具体例の紹介	<p>(2)-③ パラグラフの練習</p> <p>下記のテーマで400字程度のパラグラフを執筆し、相互添削</p> <ul style="list-style-type: none">b) 例示型パラグラフ 「創価高校のクラブ活動の特徴」c) 経過型パラグラフ 「〇〇の課程」(ウォーミングアップ・レシピなど)d) 意見型パラグラフ 「日本の高校の図書館に漫画雑誌を置くべきか」
--	---

相互添削の際には、各課題毎にルーブリックを示し、これに基づいてお互いに添削しました。この相互添削によって、書いた文章の推敲ができるばかりではなく、友達の文章を添削することで、次に自分自身が文章を書く際に、ルーブリックで示されたポイントを意識して文章を書くようになり、徐々に文章レベルの底上げができました。1年次から何回も400字程度の文章を執筆してきたため、生徒たちは文章を書くことそのものに対する抵抗感が薄れていました。その結果、初めの頃は、「最低何文字書かなきゃだめですか?」という質問が多かったのが、今では「400字超えちゃだめですか?」という質問をするようになってきました。

続いて、現代社会で、リサーチが終わり、各自の課題に対する主張ができてきたところで、その主張を1パラグラフで書くことに取り組みました。ここでは、主張型パラグラフの型に則り、自分の主張を根拠を示しながら論理的に主張できるようにしました。このパラグラフが、現代社会のポスターセッションや、英語での作文へと展開していきます。

そして、現代社会でのポスターセッションをとおして、自らの主張をさらにブラッシュアップした物を元に、2学期末頃から最終のエッセイ(小論文)執筆に取り組みました。ここでは、これまでトレーニングしてきたパラグラフをエッセイに拡大する方法を学びました。トピックセンテンスがエッセイ全体の序論となり、サポーティングセンテンスが3つあるとするとそれぞれが本論の1段落に、コンクルーディングセンテンスがエッセイ全体の結論となります。

例えば、序論では、誰もがよく知る有名な言葉を引用して読者の関心を引き、その背後にある問題点を指摘、中継を経て筆者の主張を簡潔に述べました。続いて本論は、まず現状を紹介し、続いて現状分析から課題を抽出することで主張の根拠を示し、筆者の考える解決策を、具体例を挙げながら説明しました。

最後に結論部分では、序論で述べた主張の表現を変えて再述し、中継を経て問題の広がりについて述べて終わる、という構成を取りました。

最後に現代社会でのポスターセッションをとおして、自らの主張をさらにブラッシュアップした物を元に、2学期末頃から最終のエッセイ(小論文)執筆に取り組み、データ化することで現代文におけるファイナル・プロジェクトは完了となりました。

(3)-① 主張を1Pで書く

F Pのアウトラインの基本型(長さは400字程度)

TS:(目的)のためには、(主体)が(方法)すべきだ。

SS①:なぜ(主体)がやらねばならないか。

SS②:なぜ(方法)が適切といえるのか。

SS③:(方法)の抽象的説明。

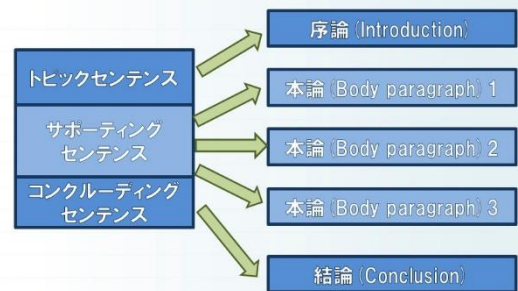
CS:TSの内容を言い換えて再主張。

※TSはSDGsの課題に対する解決策を主張する。現状や原因を述べただけではTSとして不適切。

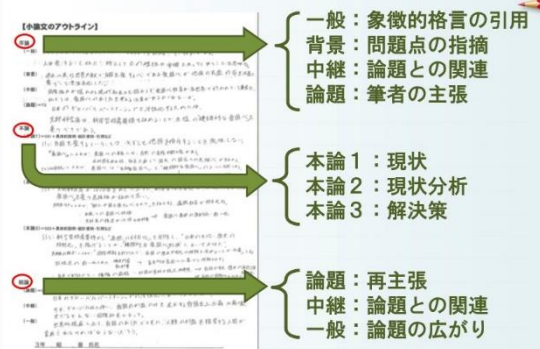
※「私は……と思う。」は禁止! 小論文は自分の意見を客観的に述べるもの。

(3)-② Pを元にエッセイを書く

a) パラグラフ(Paragraph)から小論文(Essay)へ



(3)-② Pを元にエッセイを書く



◆ 生徒感想(ファイナルプロジェクト全体)

「自分が何を伝えたいのかを選択する力がついたと思います。トピックについてとても悩んだのですが、調べることや考えることは無限であるため、自分の中で限界を決めることも大切だとアドバイスを受けました。自分の決める限界を広げられるように頑張りたいです」

「わかりやすく人に伝える力がついた。どうしたらわかりやすいかを一番に考えて、話す順番や言葉選び、話すスピードなどを練習のときからとても気をつけました。」

「調べる能力や、複数の情報をまとめる能力を身につけることができた。人に対してわかりやすく説明することができるようになったと感じる」

「自分の意見をどういう順番で、どう説明すればわかりやすいか考える力がつきました。ポスターとリンクさせるために、ポスターの配置にも気を配りました」

「自分で調べたことを文章化すること、それをわかりやすくまとめて可視化する力がついたと思います。またそれを人に伝えるという力もつけられたのでよかったです」

Final Project 2019 実施計画

	言語技術(現代文)	現代社会	英語
4月	トピックセンテンス (ラベリング・マッピングスキル)	SDGs17ゴールを深める	SDGsに関するボキャブラリー
5月	パラグラフライティング	SDGs ターゲット選び(大テーマ設定)	事実と意見 5W1Hのスキル リサーチクエッション作成
6月	エッセイのトレーニング	5W1Hで掘り下げ・単語調べ リサーチクエッション設定 「〇〇なのはなぜか？」	
7月			
夏休み		素材集め(×Web) 徹底的なリサーチ・フィールドワーク	
9月		仮説作り(小テーマ設定) 「〇〇なのは××か？」	Show&Tell 調べてきたことを整理
10月	400字パラグラフ作成	ポスター作りレクチャー	
11月		ポスター作成	
12月	エッセイ(小論文) アウトライン作成	クラス内ポスターセッション	プレゼンテーション原稿作成
冬休み		ポスターブラッシュアップ	
1月	エッセイ(小論文) 執筆	ポスターセッション(日本語)	ポスターの英語化 Abstract作成
2月	エッセイ(小論文) 入力・完成		ポスターセッション(英語)

Q) UNHCR「WILL2LIVE 映画祭」学校パートナーズ上映会（3年生）

■ 概要

2月22日に行われた第6回の最終企画では、創価学園池田講堂にてドキュメンタリー映画『シリアに生まれて』の上映会を行いました。これは、国連 UNHCR 協会が主催する「WILL2LIVE 映画祭」の学校パートナーズ上映会として高校3年生を対象に行われたものです。上映に先立ち、参加予定の生徒対象にシリア難民についての特別授業を実施いたしました。上映会には生徒326名、一般の方20名の計346名の来場があり、上映後には代表の生徒が、これまでSGHの取り組みを通して学んだことやこれから世界の平和のために私たちに何ができるのかをまとめ、発表しました。

◆ 生徒感想

「難民が何万人という数字上の情報は知っていても、現実はどういう人たちがどれだけ苦労しているのかを知らなかった自分がいることに気づかされた。」「難民の人たちに対して何もできていない自分が恥ずかしくなった。自分に何ができるのかを今日から考えていきたい。」



2011年以来、シリア危機によって故郷を後にした数百万人もの人々、その多くは子どもである。ヨーロッパへと向かう長く奇詭な道のりや周辺国の難民キャンプ、あるいはようやくたどり着いた見知らぬ土地で子どもたちは何を想うのか。爆撃により負傷し、家族と生き別れ、子どもとしての時間を奪われ、それでも新たな希望を胸に運しく生きる7つの小さな命にカメラが丁寧に寄り添う。

監督：エルナン・ジン 製作国：デンマーク・スペイン
製作年：2016年 上映時間：84分

創価高等学校

参加無料

シリアに生まれて



7つの小さな命の物語。

2020年

2/22(土)

映画
上映

時間：10：00～11：50頃（開場9：40～）
 場所：創価学園池田講堂
 概要：①「シリアに生まれて」上映(84分)
 ②創価高校生によるSGHの取り組み報告
 主催：創価高等学校
 後援：国連UNHCR協会

どなたでもご参加いただけます
参加予約はこちら



お問い合わせ・詳細などは
創価高校
042-342-2611(代表)
gcp@tokyo.soka.ed.jpまで



3. グローバル・リーダース・プログラム (GLP)

A) 概要・年間スケジュール

■ 概要

グローバル・リーダース・プログラム (GLP) はその成果を、GCP はじめ全校のSGHの取り組みに還元していく事が最大の使命です。これまでに全校対象で行われている GCP 沖縄・カリフォルニアのフィールドワークは、GLP フィールドワークがベースとなっています。またフィリピン講師とのスカイプ英会話は、現在全校生徒が取り組んでおり、英語の4技能の中でも課題となっているリスニング・スピーキング力の向上に貢献してきました。言語技術授業の英語と日本語往還の実験も、当初は GLP で行われました。

本年度より、20名で行い、これまでの取り組みの恒常化をめざして、3年生のみを対象とした学校設定科目(火曜日5,6限)と、2,3年生の合同実施によるこれまでとおなじ形式の授業をCALL教室で行いました。また必要に応じて合宿などの集中プログラムも継続して実施しました。

■ 昨年度との相違点

①選抜希望者クラスへの取り組み人数を少しでも多くするために、本年度より4名ふやし、20名で行いました。

②これまでの取り組みの恒常化をめざして、これまで毎週火曜日・金曜日のクラブ終了後18時から 19時30分過ぎまでの 2 回で行っていたものを、3年生のみを対象とした学校設定科目(火曜日5,6限)と、2,3年生の合同実施によるこれまでとおなじ形式の授業をCALL教室で行います。また必要に応じて合宿などの集中プログラムを実施します。

③3年生の学校設定科目は、来年度より始まる「総合的な探究」への取り組みをふまえて授業を構成しました。また、授業単位とすることで、教科としての評価方法開発にも本格的に取り組ましました。

④1年間を通じて、4人ずつのグループを固定し、探究活動を深めていきました。昨年より実施している広島と長崎での核をテーマとしたフィールドワークでは、出前授業実施に向け、被爆地でどのような平和教育が行われているかを調査し、インタビューの技法なども活用。この調査内容をもとに、様々な発表会の原稿や最終論文のテーマを深めていくことに寄与しました。

⑤年間の研究テーマは継続して「核廃絶問題」に設定。昨年から行われている年間学習の集大成としての、姉妹校である創価中学1年生(220名)に対して「核廃絶問題に関する模擬授業」を本年度も60分間実施しました。

■ プログラム内容

啓林館の「課題研究メソッド スタートブック」を教科書として、論理的・批判的思考や情報収集・分析力など探究型学習の基礎を育てます。その研究手法を活用し、広島と長崎で実施されるフィールドワークを行います。また地球規模課題への理解と知識を深めるために、国連大学訪問や、平和学者、外交官、国際機関職員による懇談会を行なっていただいています。

す。最終的に中学生に対して、「核廃絶問題に関する出前授業」を60分間実施しました。

■ 年間のプログラムの流れ

まず核兵器に関する基礎的な知識を深めるため、政治学、近代史、国際関係論、科学の視点から講義を行いました。この時に使用するプレゼンの資料は、英語の講義で使われたものをそのまま活用し、今後英語で核問題を発表する際に、用語など自然に取り組めるように工夫を行いました。ここまで行われている「核関連」の授業は火曜日学校設定科目の中で実施され、その内容はオンライン会議アプリ「zoom」で録画し、参加出来ない2年生は、その週末金曜日の授業までに動画を見た上で、google classroom 上で課題を提出させました。さらに、金曜日の授業冒頭には、3年生を中心に講義内容の振り返りをするなど、「学び合い」を活用して、理解の深化を図りました。

5月には「問いの立て方」の導入を行った後、アンケートとサンプリングの技術を学び、フィールドワークにて実施・活用しました。この結果は、学園祭でのSGH報告発表や、関東甲信越探究学習発表会にて発表されました。6月には、国連大学を訪問し、『人間の安全保障』について学び、SDGsの観点から見た核廃絶の問題点について考察するきっかけとなりました。夏休み期間に、長崎・広島にて平和教育に関するフィールドワークを行いました。9月の学園祭には、これまでの活動をポスタープレゼンテーション形式で発表。授業計画の基本を学んだ後、授業案の討議の末に、1月に出前授業を実践しました。ここまでの活動をとりまとめ、活動報告会を英語で行いました。また4月にカリフォルニアで開催されるクリティカルイシューズフォーラム(CIF)に向けて、核不拡散についての研究をとりまとめたミニプロジェクトを全員で作成しました。この内容は3年生が活動報告会にて、英語で発表しました。

GLP 年間スケジュール

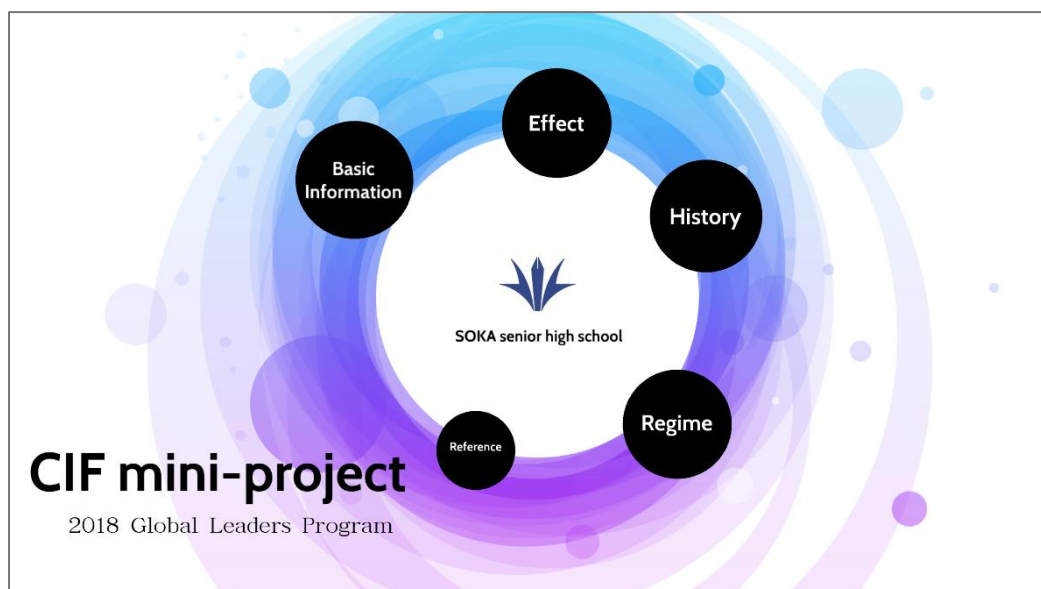
日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
春期休業	集中講義：アイスブレイク、年間計画の確認、ワールドカフェ	iPad 配布(貸与)
4月	Critical issues forum(CIF)参加 (3/27～4/1、代表2名)	カリフォルニア・モントレイ
	ミニポスターセッション	グループワーク
	連続講座「核廃絶問題の基礎」	英語資料活用
	言語技術「質問の仕方・報告書の書き方」	グループワーク
5月	言語技術「インタビューのスキル」	グループワーク
	講義「教育学とは」 講師：パデュー大学 ヌニェス博士	
	授業「研究手法：統計・データ分析のスキル」	グループワーク
6月	授業「核兵器禁止条約」	質問作り
	ディスカッション「リサーチクエスチョン作成」	グループワーク

	授業「現代の核兵器事情と人間の安全保障」	
	国連大学(UNU)研修 講演「SDGsと人間の安全保障」 講師:UNU サステナビリティ高等研究所 今井夏子氏	
7月	ディスカッション「夏季フィールドワーク準備(アンケート項目・インタビュー項目検討)」	グループワーク
夏季休業	フィールドワーク 広島(8/6~8/8) 長崎(8/21~23)	
	授業「ポスターの作り方」	
	フィールドワーク 都立第五福竜丸展示館	
9月	外部フォーラム「核兵器なき明日への選択」参加	
	「世界学生サミット高校生ポスター発表」参加	プレゼンテーション
	ポスター発表「リサーチトピック研究結果」(一般公開)	ポスターセッション
	ミニポスタープレゼンテーション「最新技術と倫理」	3年生のみ実施
10月	論文テーマ作成・ディスカッション	教員とディスカッション
	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	グループワーク
	講義「平和学・紛争解決学」 講師:ケント大学 マイアル博士	
11月	授業「模擬授業に向けて:授業案とは」	
	中間報告会「リサーチトピック研究結果」(一般公開)	プレゼンテーション
	「関東甲信越静地区探究学習発表会」参加(優秀賞)	プレゼンテーション
12月	講義「核廃絶問題」 講師:ミドルベリー大学院 トキマサコ氏	
冬季休業	授業案作成	
	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	
	出前授業準備	グループワーク
1月	高校教員へ模擬授業	
	創価中学校での出前授業実施	
	2019年度 CIF 準備	
2月	GLP 最終発表会	プレゼンテーション
	活動の振り返り・評価	自己評価 相互評価

B) クリティカル・イシューズ・フォーラム (CIF)

- 実施 3月27日(水)～4月1日(月)
- 参加者 代表生徒2名(3年生男女1名ずつ)
- 場所 アメリカ・カリフォルニア州 モントレーミドルベリー国際問題研究所
- 主催 ミドルベリー国際問題研究所ジェームズ・マーティン不拡散研究センター (MIIS)
- 内容 日米露の高校生による核軍縮に関する提案の発表会で、会議には、ロシアから3校、アメリカからハワイも含め9校、日本から5校の代表生徒約2名ずつが参加し、核兵器の不拡散をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを通して意見を交換しました。2019年の Student Conference のテーマは「核リスクの低減:不安定な国際情勢における危機の回避」でした。

また、4月の開催に向け、2年生の GLP のメンバーが核問題についての包括的な理解をまとめ、オンラインプレゼンテーションアプリ prezi で mini-project を作成。事前に提出し、MIIS の研究員からフィードバックを受けました。



MIIS 研究員からのコメント: “On the whole, your team did a really good job to put the basic information of nuclear weapons, nuclear disarmament and nonproliferation regimes concisely. I think you were supposed to touch upon briefly the current challenges in nuclear issues in the mini project. But it's ok. Please try to briefly study the current nuclear challenges such as US-Russia's potential new arms race, North Korea, Iran etc before you move to the final project. I look forward to your final project.”

■ 行程

アメリカ有数の美しい街・モントレーに到着。モントレー研究所のトキ先生によるオリエンテーションの後、簡単な市内散策をしました現地の観光スポットであるラバーズ・ポイントで、それぞれの滞在先となるホストファミリーと初対面。当初は緊張していましたが、子どもたちや、ホストファミリーの温かい人柄に触れて、皆すぐに打ち解けていきました。

2 日目は米露の高校生とともに、モンレー研究所で、同研究所についての講義を受けた後、美しいペブルビーチ沿いにある、寮生のプライベートスクール・スティーブソン高校を見学しました。午後は明日に向けての練習をしっかりと行った後、全17校によるリハーサルが行われました。リハーサル中もみな、初めて会ったにも関わらず、まるで旧知の仲のように話しかけていました。

3 日目はフォーラム初日となり、日・米・露の各校がそれぞれの研究成果を発表しました。本校代表生徒が核兵器を取り巻く新たな動きとこれからの日本の平和教育のあり方について研究発表をしました。前半は兵器の近代化に注目し、アメリカなどを中心にどうということが今後起こり得るのかについて分析しました。後半は日本における平和教育の内容を、広島や長崎の原爆投下といった歴史的なものだけでなく、現在私たちを取り巻いている問題も含んだものに変えていくことを提案しました。これは私たち GLP が、日本が唯一の被曝国であるにも関わらず核兵器禁止条約に賛成できていない現状を不思議に思ったため研究し、2018年12月に中学一年生を対象に行った出前授業をもとにしています。

実質的な最終日となるフォーラム2日目(4日目)は生徒による発表の後、MIISの大学院生による核廃絶問題研究の大学院レベルでの最前線を学ぶ機会となりました。また、日米露の高校生によるディスカッションを行いました。

◆生徒感想

「このCIFに参加して私は、異文化交流の楽しさや大事さを改めて学びました。現地やロシアの高校生と話すなかで、お互いの日常や習慣はかなり違うと実感しつつも、核兵器に関しては全員が本当に核の無い世界を目指し、真剣に学んでいることを知りました。また現地ではホームステイをし、アメリカ式の生活を体験できました。これらの経験をもとに核問題や異文化についてこれからも学び続けたいと思います。また一緒に核について学び、研究発表を支えてくれたGLPのメンバーや先生方に心から感謝申し上げます。」

「CIFを通して、改めて、完全な核兵器廃絶が核の危機から脱する唯一の道であることを感じました。GLP4期生で、各国の軍事政策白書や創立者の提言の分析を通して学んだ、核抑止論の構造的欠陥や矛盾を指摘した上で、実践的な平和教育のモデルを発表できたことは、大きな成果でした。共にCIFに向けて準備したGLPメンバー、そして先生方には本当に感謝しています。また、日・米・露の高校生と、各国の歴史・政治的背景や価値観の差異を超えて、核をとりまく現状の認識を共有し、多角的なアイデアのセッションが行うことができ、大きく触発を受けました。今後の自分の学びや進路に役立てることはもちろん、学園にも最大限還元していきます。」

Critical Issues Forum の2019年生徒発表の様子 参考サイト

<http://sites.miis.edu/criticalissuesforum/2019-student-presentations/>



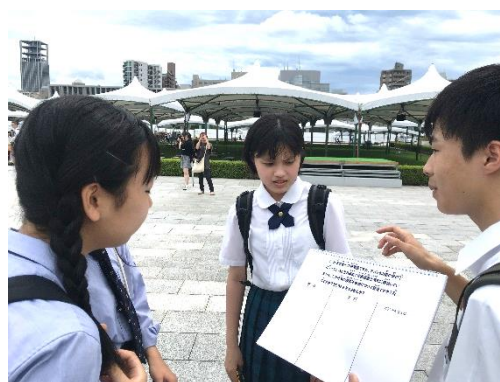
C) フィールドワーク 広島

- 期 間： 8月6日～8日の3日間
- 参加者： 高校2年生7名 高校3年生5名 計12名
- 事前学習・準備

- ・広島女学院高校主催のピース・フォーラムの事前課題として、地球規模課題の中から核兵器廃絶をテーマとして選び、高校生ができるアクションプランを考えました。
- ・現地で行うインタビューに備え、質問項目を作成しました。

<1日目>

原爆投下より74年目となる6日に広島入りし、まず平和記念公園を訪れました。広島を訪れている高校生や外国人にインタビューし、核兵器や核廃絶に対する意識の違いを調査しました。夕方頃から関西校と合流し、翌日の広島女学院主催のピース・フォーラムに向けて東西両校でグループに分かれて発表し、意見交換を行いました。夕方からは平和記念資料館を訪れ、全てを奪う核兵器の非人道性と戦争の残酷さ、平和の尊さを一人一人が改めて胸に刻みました。



◆ 生徒感想

「広島平和記念資料館では、今の私たちと変わらない日常を送られてきた当時の方が、なぜ原爆の被害で言葉にできないような辛い思いをしなけりなかつたの考えると、原爆が憎く、怒りがこみ上げてきました。」

「今回資料館を通して見たもの、感じたことを忘れることなく、周囲の人にも伝えていきたいです。核の脅威について改めて深く学ぶことができたので、これから GLP で核廃絶に向けてさらに深く学び、行動していきます。」

<2日目>

2日目は、広島女学院主催のピース・フォーラムに参加しました。日本各地とハワイから集った高校生が、貧困や人権、核問題など、自分たちが選んだ地球規模課題について、高校生ができるアクションプランを発表し合いました。発表後は、質疑応答や観覧者からのフィードバックを参考に、各グループがプランをさらに改善し、最後の全体会で堂々と発表しました。発表の合間には、高校生同士が積極的に交流し、友情を広げる様子が見られました。フォーラムの後には、充実した平和教育プログラムをもつ広島女学院の生徒にインタビューし、東京との温度



差や違いを改めて感じ、刺激を受けるとともに、自分たちの研究の意味の大きさを再確認しました。終了後には平和記念公園を再度訪れ、爆心地や原爆ドーム、記念碑などを見学し、核兵器のない世界を願い、平和への誓いを新たにしました。

◆ 生徒感想

「自分と歳が変わらない他校の高校生とピース・フォーラムという場で交流させていただく中で、皆がそれぞれの場所で、平和について懸命に知恵を絞り出して考え、議論を重ねているのだなと感じました。自分ももっと努力して、日本中、世界中の高校生みんな与世界平和に尽力していきたいです。」

「通っている学校や地域によって平和教育の格差があるというのが今日のとても大きな発見でした。今、自分たちにできることは小さいけれど、決めたアクションプランをやりきることや、自分の友達に少しでも核についての意識を広めることなど、小さな取り組みから始めていきたいと強く思いました。」

<3日目>

最終日の3日目は、広島大学植木名誉教授の講義を拝聴しました。植木教授自身の幼少の被爆体験や、その影響が半生続いたことを聞き、原爆が人に与える影響の大きさを改めてうかがい知る機会となりました。最後には、生徒の質問にも丁寧に答えていただきました。



◆ 生徒感想

「今まで GLP で学び、考え、深めてきましたが、それだけでは得られなかったことを3日間でたくさん学びました。原爆に関わった方の一言一言が心に刻まれています。悲惨な過去を学ぶことは辛いですが、だからこそ未来に向けて行動すべきだと感じました。」

「植木名誉教授は『日本はリーダーシップが欠けている』と話しており、まさに私たちの課題であると感じました。この3日間で学んだことを最大限に活用し、更に学びを深め、世界平和へ導くリーダーに成長したいと思います。」

D) フィールドワーク 長崎

■ 期間： 8月21日～23日の3日間

■ 参加者： 高校2年生4名 高校3年生4名 計8名

■ 主な訪問場所： 活水高校、長崎文化歴史博物館、長崎原爆資料館、平和公園、城山小学校、長崎大学核兵器廃絶研究センターRECNA

■ 事前学習・準備

- ・2チームに分かれて「長崎」と「高校生」をキーワードとした研究テーマを決めました。
- ・現地で行うインタビューに備え、質問項目を作成しました。

■ 行程

1日目

初日は活水高校を訪問し、国内唯一の平和学習部との交流会を行いました。GLPからは、これまでの活動や現在の研究テーマについて報告しました。その後、平和学習部から、高校生一万人署名やインターネットを活用した戦争体験のアーカイブ作成、平和大使としての海外での交流のようすなどを聞き、大きな刺激を受けました。ディスカッションでは、各校の平和学習の取り組みを共有し、「核廃絶のために私たち高校生に何ができるのか」など、建設的な議論が行われました。



その後は、長崎文化歴史博物館を訪問。長崎を拠点にポルトガル、オランダ、中国などとの交流が進み、全国に多様な文化が広まっていった歴史を学び、多文化共生社会の在り方を考えました。

◆ 1日目生徒感想

「交流会では平和大使を経験した方と話す事が出来、自分と同年の人が核兵器廃絶を目標に行動を起こしているということに感動しました。これからはGLPの活動にもっと積極的になり、自分に出来る事を全力でやっていきます。」

「今日は新しい出会いがあったり、博物館を見学できたりと充実した1日でした。特に印象に残ったのは活水高校の皆さんとの交流です。平和について学ぶだけでなく、様々なアプローチを行っていることを知り驚きました。」

2日目

前半は、被爆の実相を学ぶことをテーマに、長崎原爆資料館、被爆を訪問し、大久保館長に長崎市の平和活動について包括的にお話いただきました。その後、貴重な写真や展示物を見学し、長崎に投下された原爆の被害を目の当たりにしました。午後には、長崎最大の被爆遺構である城山小学校を訪問。焼け跡が生々しく残る校舎を見学し、セメントをも貫く原爆の威力に生徒たちも驚きを隠せませんでした。



その後、長崎駅前、核兵器に関する意識調査アンケートを実施。最終的に1時間程度で50名以上の方にお話を聞くことができました。

最後は長崎平和会館で、原爆投下時、2歳で被爆した中村由一さんから被爆体験をうかがいました。被爆当時のことと共に、その後の生活で起きた辛い差別を語ってくださいました。「この話を聞いたあなたたちに任せましたよ」との真摯な言葉に、生徒の目から涙があふれました。今日は、様々な角度から被爆の実相を学び、核廃絶への決意を深める一日となりました。

◆ 2 日目生徒感想

「中村さんの被爆体験を聞いて、原爆の恐ろしさだけでなく、それが奪う日常の尊さ、身近な人を失う悲しみを感じ、自分たちこそが核廃絶に貢献すべき大切な世代なのだと実感しました。学んだことを、次世代に伝えていきます。」

「原爆資料館・大久保館長の“長崎を最後の被爆地に”“恐怖を植え付けることだけが核廃絶教育ではない”というお話が心に残りました。資料館内の被爆した当時の写真が胸に突き刺さり、実物に触れていくことは大切だと学びました。」

3日目

長崎大学 RECNA にて、山口先生に「長崎の平和教育の実践と課題」についてご講演いただきました。長崎市民の中にも核問題に対し無関心な層が一定数いる現状を踏まえ、そういった層をターゲットに、ご自身が実践されている平和教育についてお話しくささいました。生徒たちからは、「長崎市内での平和教育は、終戦以降どのように変わってきたのか」「核問題に対して無関心な人たちとも、核廃絶というゴールを共有するために私たちにできることは何か」など、活発な質疑応答がなされました。



◆ 3 日目生徒感想

「核兵器の専門的な知識をお持ちの方とお話しでき、嬉しかったです。山口先生に、核兵器に対する米国のスタンスについて質問することができ、ずっと抱いていた疑問が解消されました。3日間を通して感じたことは、『一人』を見ることの重要性です。今まで私は、『被爆者』を一括りにして見ていましたが、一人一人に違った体験があることを学び、価値観を大きく変えることができました。」

E) ゲスト講義および都内フィールドワーク

■ 講義 米国・パデュー大学 イザベル・ヌニェス博士(2019年5月30日)

■ 概要

全編英語で、ご自身の半生を通し、教師として大事にしている信念や、教育の重要性について講義してくださいました。また生徒全員が英語で発言する場面もあり、生徒にとって大きな刺激となりました。



◆ 生徒感想

「講義の内容については、自分が教育の道に進むこともあり、一人の教育者の貴重な意見を学ぶことができました。教師という夢を叶えるために、今の自分ができることは勉強しかないと思っていましたが、全ての瞬間が教育であるという言葉を引き、今この瞬間に学んでいること、体験していること全てが、将来自分が教育者になるための糧になるのだと思いました。」

フィールドワーク 国連大学(UNU)訪問(2019年6月25日)

■ 概要

UNU サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)の今井夏子研究員による講義では、国際社会が目指す「持続可能な開発目標(SDGs)」や「人間の安全保障」と、UNU-IASの業務などへの理解を深めました。また、同大学内の会議場やライブラリーも見学しました。さらに、地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)の方にもお話しいただき、SDGsの17番目のターゲットである「パートナーシップ」がいかに重要であるかを学びました。

◆ 生徒感想

「国連大学を訪問して、会議場の見学などの多くの貴重な体験をしたりすることができました。特に、総会の内容がまとめられた文献を見たときには、その数の多さに圧倒されました。今日学んだ、1つの問題を多角的に捉えるという視点を今後の学びに活かしていきたいです。」



フィールドワーク 都立第五福竜丸展示館訪問(2019年9月16日)

■ 概要

核実験と日本の関わりを学ぶため、希望生徒で「都立第五福竜丸展示館」を見学しました。20分の学芸員の方による講義のあと、館内展示を見学した生徒たちは、広島・長崎に続く日本における被爆の事実を目に焼き付けていました。

◆ 生徒感想

「第五福竜丸展示館を見学して、広島原爆ドームよりも間近に、直接触れることもでき、原水爆の凄まじさ、被爆者の思いに触れることができた。第五福竜丸の被爆が、人々の生活に影響を及ぼし、市民活動につながっていったと知り、核問題と私たちの生活は決して別世界の話ではないとわかった。」



フォーラム「核なき明日(ミライ)の選択～これからの核廃絶運動～」(2019年9月26日)

■ 概要

9月26日の「核兵器の全面廃絶のための国際デー」を記念して行われたフォーラムに参加しました。ICAN(核兵器廃絶国際キャンペーン)の川崎哲国際運営委員、RECNA(長崎大学核廃絶研究センター)の中村桂子准教授、日本原水爆被害者団体協議会の和田征子事務局次長、オール・ニッポン・レノベーションの富樫泰良氏、ナガサキ・ユース代表団の孫明悦氏がパネラーとして参加し、NPO法人フローレンスの駒崎弘樹氏のモデレーションで進行しました。これまでの被爆の事実を若い世代がどのように受け継ぎ、行動を起こしていくかについて、核の専門家だけではなく、様々な分野のスペシャリストからのアプローチも加えて、具体的な議論が行われました。



◆ 生徒感想

「若者と、様々なことが混ざり合うことで、核問題に対して新しいアプローチができるということがわかりました」「自分が若いからこそ、『できない』ではなく、今の時代にないことを成し遂げようと意欲的に取り組んでいくべきだと感じました」

講義 英国・ケント大学 ヒュー・マイアル博士 (2019年11月19日)

■ 概要

英国・ケント大学で国際関係学部名誉教授および紛争研究協会の議長を務めるヒュー・マイアル博士から、「戦争を超えて～平和学はどのように平和を醸成するのか～」と題して、平和学の起こりや紛争解決学について、わかりやすく、ていねいに説明していただいたほか、私たちが普段考える平和を学術的に分析し、その実現のために出来ることなど様々なお話をしてくださいました。



◆ 生徒感想

「平和学という学問の紹介を通して『平和とはどのような状態を指すのか』といった創造的かつ抽象的な問題の解決は簡単では無いことを改めて感じました。しかし解決のために、まず『思考力』を鍛えようと思いました。」

懇談会 米国・ミドルベリー大学院 トキ・マサコ氏 (2019年12月18日)

■ 概要

ミドルベリー大学院ジェームスマーチンセンターのトキ・マサコ氏が来校し、GLPの生徒と懇談会が行われました。トキさんは、現在の核問題に関する認識が少ないことへの危機感と核廃絶教育の必要性についてお話しされた後、生徒たちの質問に答える形式で懇談を進められました。核兵器に代わる抑止力としての、AIと核兵器の組み合わせの可能性や、長崎・広島でのフィールドワークを通して感じた、戦後70年を超えての核廃絶教育のあり方についての意見を伺うことが出来ました。



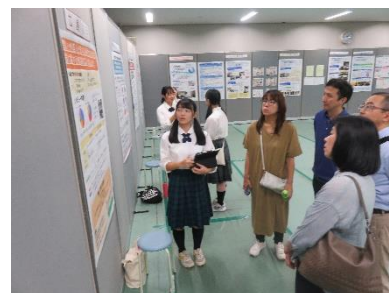
◆ 生徒感想

「若い世代の私たちが核について考えること、知っていくことが大切なのだということを改めて感じました。懇談会の中でトキさんは、諦めない心で目標に向かって走り続けることが大切とおっしゃっていました。私も核廃絶に向けて知識をつけ、考え続けていこうと改めて感じました。」

プレゼンスキル 学園祭ポスターセッション(2019年9月28日・29日)

■ 概要

学園祭において、これまでの探究活動の成果をまとめたポスターセッションを実施しました。今回は、「核と高校生」をテーマにグループ毎に問いを設定し、広島、長崎でのフィールドワークや調査を通してわかったことをポスター形式でまとめました。1日目は学園生を対象に、2日目は一般の来場者に発表を行いました。声の大きさや速さなどの話し方、身振り、目線などの発表態度を意識しながら、学園生だけでなく一般の方々に向けてポスターセッションをすることができました。



プレゼンスキル 「食と農と環境を考える」世界学生サミット高校生ポスター発表参加(2019年9月21日)

■ 概要

9月21日(土)に東京農大世田谷キャンパスで行われた第19回「食と農と環境を考える」世界学生サミットにて、足立結さん(2年生)が「Impact of Advanced Wastewater Treatment on Rising of Water Temperature and Ecosystem in Tamagawa Aqueduct」と題して、玉川上水における高度浄水処理施設と水温上昇の影響について、ポスターセッションを行いました。発表は全て英語で行われました。今回の発表は、これまで生物部や理系クラス希望者がとりまとめてきた調査内容を、足立さんらが英語にしたものです。



この世界学生サミットは世界各国の大学生による国際会議で、その最終日に、今回初めて高校生ポスター発表を行うにあたり、創価高校が招待されたものです。アメリカからの参加者の方からも「よく調べてある発表ですね。なにより堂々としていて素晴らしい。」との声を頂きました。

プレゼンスキル 関東甲信越静地区探究学習発表会参加・入賞(2019年12月15日)

■ 概要

立教大学で開催された関東甲信越静地区探究学習発表会において、GLPメンバーのうち、3組がポスター発表、1組がオーラルプレゼンテーションを行いました。今回の発表会には、SGH校・WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)校中心に20校、計70組が参加しました。GLP生はこれまで、「核と高校生」をテーマにグループ毎に問いを設定し、夏休みに広島、長崎でフィールドワークを実施しました。今回の発表会では、その研究結果を英語にまとめて発表しました。

この中で3年松永隆之介くん、河合美寿々さん、山口詩織さん、2年熊谷琉夏さんのチームが「長崎とその他の地域で核教育に違いがあるか」とのテーマで行ったポスター発表が、英語発表21組中、上位4組となる優秀賞に選ばれました。

参加した生徒たちからは「沢山の大学教授の先生方がお見えになり、質問を頂けて大変

貴重な経験となりました。先生方の質問は、どれも的確で今後の指針となったと思います。また他校の高校生が自分たちの発表を見学しに来たことは、教授の先生方に対するものとはまた別の緊張感がありました。」「今日のプレゼンテーションを通し、反省点もたくさんありました。しかし、これは今日の経験がなければ知られなかったものだと思います。今、このことに気づけたことは、幸せなことだと実感しました。今日の貴重な経験を本当に価値のあるものにできるよう努力し続け、長い目で見たときに自分が誰よりも成長した姿で恩返しをしたいと改めて決意しました」などの感想がよせられました。



Are there differences in "nuclear education" between Nagasaki and other areas?

Rika Kumagai, Misuzu Kawai, Shiori Yamaguchi and Ryunosuke Matsunaga, SOKA HIGH SCHOOL

Question: Are there differences in nuclear disarmament education between the bombed area and areas which were not bombed?

- Why education? → Relationship with highschool students
- nuclear disarmament education → non textbook
- Differences → Learning quantity • Learning quality

Hypothesis
Differences in nuclear disarmament education exist between the bombed area (Nagasaki) and other areas

→ There are many HIBAKUSHA and facilities
We thought history is inherited through education

Research Methods
—Questionnaire in Nagasaki
—Interview (Target: Kwassui Senior High School Peace club students)

Question
—Hometown —Content of education
—Have you ever learned about nuclear issues in school?

Result
Have you ever learned about nuclear issues in school?

〈People in Nagasaki〉 〈Other prefectures〉

NO
6.9%

YES
93.1%

NO
57.9%

YES
42.1%

Conclusion
There are differences in learning opportunities

Education in NAGASAKI

- Peace assembly
→Listen to the experience of Hibakusya
- Educational field trip
→Atomic bomb museum
Bombproof shelter
- Every August 9th is school day
→Research presentation and drama performance
- Exhibition of nuclear damage in school

Education in other prefectures

- School trip
- Moral education

There are differences in learning content

Future steps

- Spread nuclear disarmament education of Nagasaki nationwide
e.g.) Create required subject / Establish a museum
- "Education from various angles is necessary, not just damage" (YAMAGUCHI, 2019)
e.g.) American social background at the time of the drop / Peaceful use / International situation

Reference
H. YAMAGUCHI, Nagasaki University Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Lecture (2019.8.23)

F) 出前授業

■ 要旨

年間学習の集大成として、「核廃絶問題に関する出前授業」を、中学 1 年生対象に60分間実施しました。これまで学んできた核兵器廃絶問題の内容から最も大切な要素を選び、探究の内容をふまえて、核廃絶問題の普及活動とする事がその第一義であります。また、GLP 生にとっても、主体的・対話的な学びの手法の中で最も学習効果が高い「人に教える」ことを、異学年の生徒たちに行うことによって、授業者自身の理解をさらに深める機会となります。

■ 実施日:2020年1月29日(水)

■ 対象:創価中学1年生(220名)

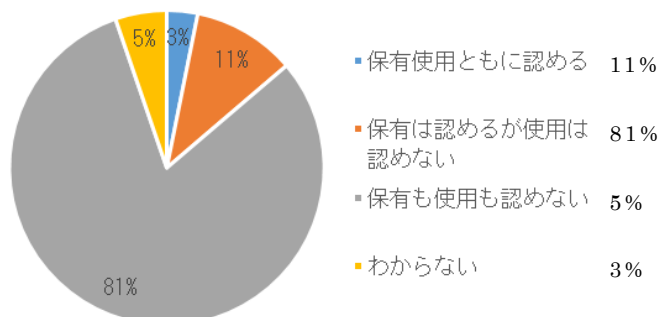
■ 会場:創価中学校 1年生教室(1~5組)各クラスに3または4人のGLPメンバーが訪問。5クラスに展開し、指導案は同じものを実施。

■ 実施までの流れ

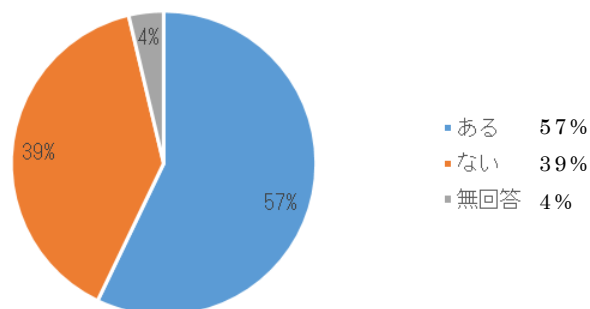
FW 調査「平和教育がどのように実施されているか」(広島・長崎)	夏季休業
教育学「授業展開のメソッドと授業案作成」 落合謙一郎教諭	11月15日
授業項目企画グループ対抗 プレゼンテーションコンペ	1月17日
中学校1年生アンケート	1月11日
授業案模擬授業(高校SGH委員教員・管理職) フィードバック	1月26日
授業案修正	
出前授業実施	1月29日
振り返り	2月4日
内容まとめ・英語化	2月18日

中学1年生事前アンケート(抜粋)

あなたの核兵器に対する考え



小学校で核問題についての授業や活動をしたことはありますか



今年度は、2, 3年生全員が揃う授業数が金曜日のみと半減してしまったため、昨年度使用した教案をもとに討議をすすめさせることにしました。

◆ 教員アドバイス

「少しでも身近に感じてもらう分かりやすい例えを意識して」「授業とは何を伝えたいのか自分の言葉にすること」「クイズなどの活動に移る前、にきちんと明示してあげる配慮が必要」

◆ 中学校生徒感想

「こんなに細かいところまで核兵器に就いて学んだ事がなく、知らないことだらけだったけど、先輩達の話聞いて、核兵器はどんなに危ない物かがわかりました。でもその核兵器を持っていることで、戦争を防いでいるということを知ると、本当は持っていた方がいいのかな？でも持っていること自体が危ないんじゃないかなとおもったりして、今の日本にとって何が一番良いのかわからなくなりました。これからもっと自分で学んで考えてみようと思いました。」

「時代の流れによって戦争というものを経験した人が少なくなるけれども、二度と同じ事をくり返さないためにも負の遺産として様々な人に知ってもらうことは大切だとも思いました。」

◆ 高校生徒感想

「意表をつく意見がちらほら聞こえてきて、中学生の感性の鋭さや理解の早さに圧倒されました。中学生の感想にも核について感じたことを素直に書かれていて、自分たちの授業で学んだことからさらに一歩深めてくれたんだと感動しました。」

「授業とそれまでの準備を通して自分自身の学びが本当に深まりました。また彼らから中学生ならではの新鮮な意見を聞いて、とても勉強になりました。感想を読んでも核兵器について、皆、真剣に考えてくれて、自分の意見や様々な葛藤など率直な感想を書いてくれて、とても嬉しく感じました。」

「私は今回の出前授業を通して、自分が学んだことを人に伝えることの難しさを感じました。私は授業案を考える上で、教える立場、授業を受ける立場、両方の視点から授業を考えることを重視していました。高校生が勉強しても難しいと感じる核兵器の内容を中学一年生にどこまでの範囲をどのくらい砕いた言葉で伝えるのかということについてが、私にとっての課題でした。授業の時間は、中学生にあまり寄り添うことができなかつたことが反省です。もっと自分が話す以外の時間に、生徒の側に立って授業を作っていくことができたなら、と思いました。私の夢は中高の教員になることなので、このような機会を経験できたことすごくありがたく思います。この反省を無駄にせず、すべてを糧に将来に生かしていきます。」



GLP 創価中学校 出前授業案（最終版）

教科	GLP 出前授業		担当教員	GLP
実施年月日	2020年1月29日(水) 14:00～15:00		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	核兵器	本時の題目		
本時の目標	核兵器の非人道性と現在の構図を理解し、身近な問題であると認識する。 核廃絶に向けて自分たちにできることを考える。			
	項目	授業の進行内容	時間(分)	備考
導入	昨日あった嬉しかったこと・楽しかったこと（幸せ）	周りの人と共有してもらおう →その幸せはずっと続くのか？	5	HOOK 難しい話題に入る前に全体を引きつける
展開	核兵器について	レクチャー （広島・長崎の出来事） ビデオ （核兵器を知る） レクチャー （落とされた爆弾の写真、広島・長崎の主な被害内容 [クイズ→解説]、過去と今の威力の差）	10	0'52まで(1分) （映像） 被害説明→スライド
	核抑止について	安全保障 国家の役割を知り、一番優先度の高いものを考える（GLPでやったやつ） →安全保障についての説明	5	
	クイックQ	核抑止について説明する（動画、途中まで＋スライド） 核抑止が必要な理由（安全保障）	10	動画1（0'44まで）
		あなたが国のトップだったら、どんな選択をする？ （安全保障を優先させる）	5	必然的に選択が限られる
まとめ	学んだことを振り返ろう	・ 何で核兵器は非人道的なの？ ・ 何で核兵器は無くせないの？ ➡ 持つてはいけない理由と持つ理由を学んだ上で、どちらの意見も説明できるようにする	5	アウトプットして復習
	締め言葉	アインシュタインの予言（紹介、解説）	5	
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ かかりそうな時間をなるべく正確に出す ・ スライドを作る 			

G) 評価と分析

GLPの活動の評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させる取り組みも3年目となった。本校のSGH構想調書において定義された「グローバル人材」の要件をもとに、以下のような資質と能力を具体的に取り上げ、これをGLPの生徒に自己評価させた(表1)。これは、過去2年のものから、それぞれの項目・分野を見直して、変更を行った。

表 1. 獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

	項目	分野		項目	分野	
世界市民の能力	問題解決能力	ロジカルフレームワーク	世界市民の資質	多面的・多角的な視点と寛容の精神	多様性・異文化の理解	
		論理的思考力			新たな視座(発想力)	
	協働的能力	プロジェクトマネジメント			フィールドワーク	
		ファシリテーション			新たな視座	
		フォロワーシップ			専門性	
	対話力・コミュニケーション能力	遂行能力		教養と理解	マインドマップ・思考設計のプロセス	
		英語コミュニケーション能力			創造的課題解決策の考察と実践	
		プレゼンテーション能力(伝達力)				
		質問力				

この自己評価に基づく自己評価・他己評価については、以下の手順で行った。

【事前調査】3月オリエンテーション:

1年間の活動を通じて自分が伸ばしたいと考えている能力に○をつける作業を行った。この条件だけだと、過去、すべてに○をつけてしまうことがあったため、今回は○をつけていいのは5個までとの規制をかけた。結果、生徒が望むつきたい資質・能力の優先度が差別化され、明確化した。

【事後調査】2月終了時点:

① 自己評価:自分がこの1年間で向上したと考えられる能力に◎を、まあまあ伸びたものに○を、あまり伸びなかったものに△をつける作業を行った。どちらでもないものはそのまま無記入とする。但し、記入した場合は、その根拠となる具体的な例を記入させた(GLPの活動に関わらなくてもよい)。

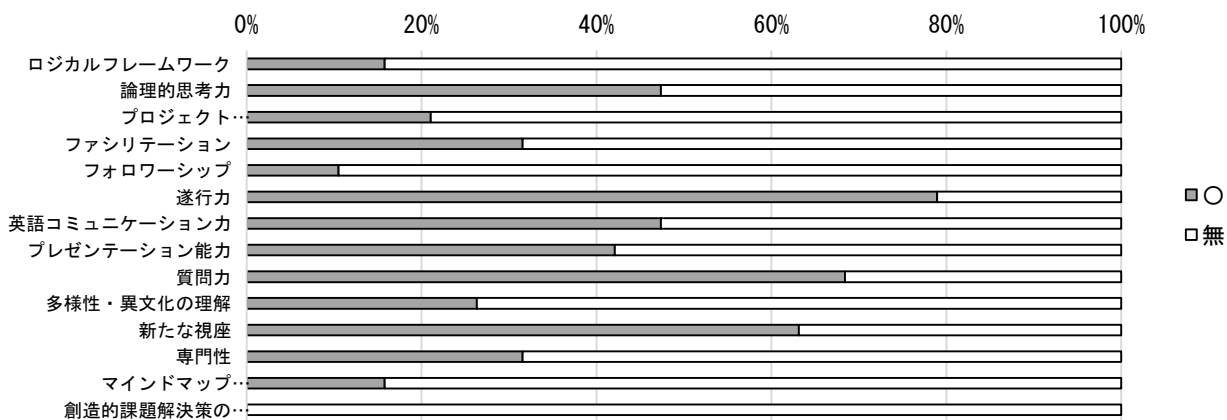
② 他己評価:自己評価終了後、4人ずつのグループに分け、他のメンバーから見た評価を一人7分ずつ述べさせた。述べてもらった内容については、別の色のペンで記入させた。

以下、調査結果を報告する。

3月の事前調査「身につけたい資質・能力」の結果を図1に示す。1年間の活動を通して身につけたい力として、GLP生徒は「遂行力」「質問力」「新たな視座」「論理的思考」に高い関心を示していた。「遂行力」「論理的思考力」の関心が高いのは、昨年と同様の結果であ

る。一方、「教養と理解」にあたる「マインドマップ」、「創造的課題解決策の考察と実践」に○をつけた生徒は少なかった。この項目への関心が低いのは、本年度のGLP生の特徴である。

図1. GLP 事前調査 (2019/03/18)



次に、事後調査の結果を図 2 に示す。例年向上している「ロジカルフレームワーク」「分析力」「プレゼンテーション力」「新たな視座」「専門性」などといった多くの資質・能力について、「向上した」との結果が得られた。今年度から 20 人全員で行う授業が金曜日のみとなった関係で、授業コンテンツの精査を行ったが、結果的には、例年と同様の効果が得られていることが確認できた。また、「ロジカルフレームワーク」が向上したと感じている生徒が約 7 割、「新たな視座」が向上したと感じている生徒が約 8 割と多かった。これらは、「核廃絶」というテーマのもと、化学、生物、歴史、倫理などといった多様な視点からの講義を通して、一つのテーマについて論理的かつ多角的に分析を行った結果と考えられる。

一方、例年と異なった部分として、「多様性・異文化の理解」が伸びたと感じる生徒が約 8 割と多かった。生徒の記述を見ると、広島・長崎へのフィールドワーク、様々な方との懇談会をはじめ、グループでの探究活動での話し合い、外部発表会ことなどがあげられていた。インタビューや懇談会、発表会などを通し、様々な考えをもつ人と意見を交換する機会が増えたことが一因と考えられる。

図2. GLP 事後調査 (2020/02/20)

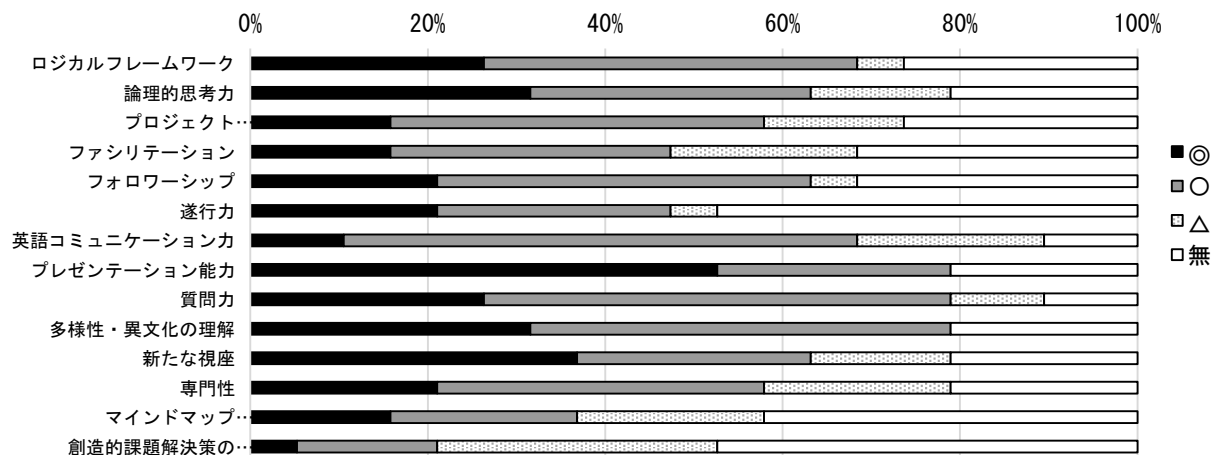
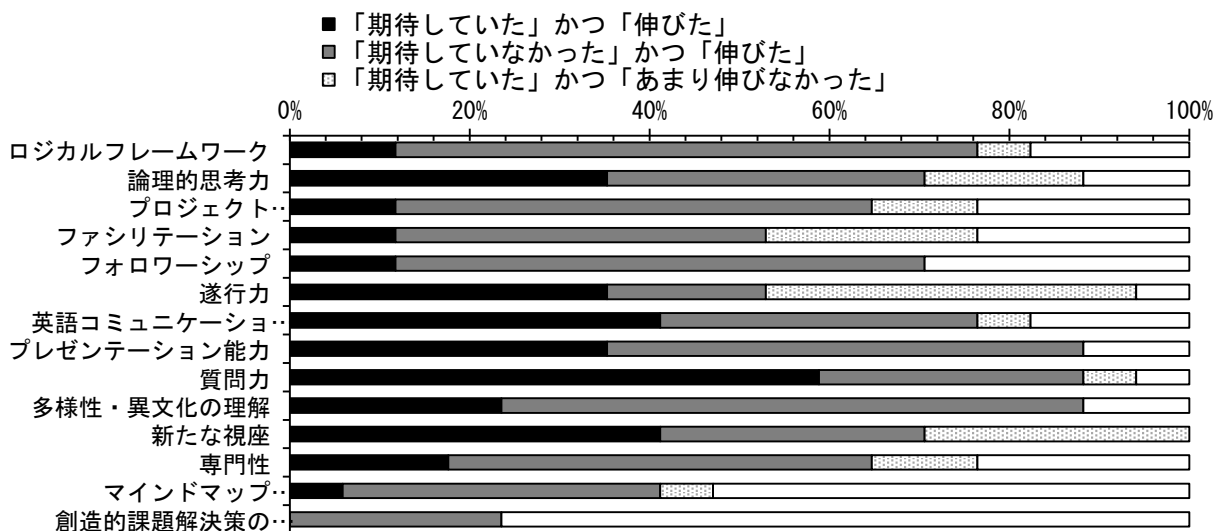


図 3 は、事前・事後調査結果を比較し、「生徒が向上させたいと期待していたか(事前調査)」

と「実際に資質能力が向上したと感じているか(事後調査)」を合わせてグラフにしたものである(それぞれの基準は特記事項参照)。この図によると、「プロジェクトマネジメント」「フォローシップ」という協働的能力について、事前調査では向上を期待していなかったが、事後調査では向上したと回答している生徒が多いことが分かった。これは、今年度1年間を通して、同じチームで研究を行ったことによるものと考えられる。

また、「創造的課題解決策の考察と実践」については、図3より、「期待していなかったが、一年間の活動を通して向上した」と感じている生徒が約2割いることがわかった。この項目は例年、向上を実感している生徒が少ないことが懸案となっていたものである。一方、依然として伸びなかったもしくは評価しない(無印)の解答が8割程度を占めている。生徒の記述を見ると、「考える事はできているが実践できていない」という言葉が複数見られた。これは、GLPで取り扱っているテーマが「核廃絶問題」と、地球規模であり身近な実践に繋げにくいことが原因と考えられる。次年度は、この表現を「提案」に変えて、プログラムの改善を行いたい。

図3. GLP 事前・事後の比較 (2020/02/22)



特記事項

- ・事前調査では、「つけたいスキル5つに○」という条件をつけている
- ・事前・事後の比較について

「期待していた」=事前調査で○をつけた 「期待していなかった」=事前調査で無印

「伸びた」=事後調査で◎もしくは○ 「伸びなかった」=事

4. 言語技術

■ 概要

「言語技術」とは、「議論する(話す・聞く)技術」「読解する(読む)技術」「作文する(書く)技術」「思考する(論理的思考・批判的思考の)技術」といった、言語をより有効に運用するための技術のことです。世界の多くの国々では、この「言語技術」が、各言語の「母語教育」として、小学校から高校まで体系的に教えられています。つまり、世界には発想・表現方法に共通の基盤があり、議論や交渉などは、それらに基づいて行われているということです。まさに「言語技術」は、言語を運用する上での「世界標準」であり、世界の多様な人々と議論を交わし、グローバルに活躍するための必須の能力だと言えます。本校では、グローバル人材像の資質として、「地球規模課題(Global Challenges)の解決に貢献する能力」を有することを定めていますが、この能力の基盤には、コミュニケーション能力や論理的・批判的思考力が欠かせないとしています。「言語技術」の導入は、まさにそれらの力を鍛えていくことを目的としています。本校では、つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏が開発した「言語技術」教育のプログラムをもとにし、同氏から指導・支援を受けながら、「言語技術」教育を実施していきます。

「言語技術」の授業では、まず日本語でトレーニングを行い、同じ内容のトレーニングを英語でも行うという往還学習を実施します。この往還学習は、言語間の共通点や相違点を認識することで、「言語技術」習得の効率性を高めるという本校独自の取り組みです。この取り組みによって、日本語の言語能力の向上はもちろんのこと、各言語共通の「言語技術」の獲得は、外国語習得の効率化、及びその運用能力の向上を促進すると思われます。このようにして鍛えられた言語運用能力は、全教科における生徒一人ひとりの学習理解を促進し、実社会・実生活の営みも、より充実したものにしてくれるはずです。この「言語技術」の授業を通し、世界に通用する言語運用能力を備えた人材を、本校は育成していきます。

■ 昨年度との相違点

- ①生徒のトレーニング(活動)時間を増やすため、授業スライドを印刷して配付し、スライドの内容を書き写させる時間を無くしました。
- ②高校1年生では、「問答ゲーム」を発展させた形で、3～4人グループでの「議論ゲーム」を実施しました。
- ③創価中学校・東京創価小学校の代表者と「言語技術」推進委員会を月1回の頻度で実施し、小中高の「言語技術」教育の内容・接続方法について協議しました。

A) 年間スケジュール

2019年度 高校1年生 言語技術計画	
1学期	
1	・言語技術とは何か ・問答ゲーム(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング、選択)
2	・問答ゲーム(賛成反対) ・英語問答(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング・選択・賛成反対)
3	・問答ゲーム【日英】
4	5W1Hを意識した例文添削 ・問答ゲーム(5W1Hで質問を返す・2往復)
5	・英語問答(5W1Hを使った質問の作り方・「How」の特徴・5W1Hで質問を返す)
6	・問答ゲーム【日英】(相手の応答の正しい掘り下げ方、3往復の問答)
7	・パラグラフとは何か ・パラグラフの構成要素(TS、SS、CS) ・作文課題(優先席、電子辞書)
8	・作文課題(コンビニ24時間営業) ・TSを支えるSSの作り方 ・作文課題をリライトする
9	・英文パラグラフ(コンビニ24時間営業) ・文と文をつなぐ表現(linking words)
2学期	
1	・問答ゲーム、パラグラフの復習・作文課題(チャイムは必要か)
2	・交渉の技術 ・反論の技術
3	・事実と意見の区別(日英) ・論拠の確認
4	・議論の実践(日本語)
5	・議論の実践(日本語・英語)
6	・作文内容の素材集め ・SSの掘り下げ ・課題作文(自分で自由にテーマ設定)
7	・TSの性質を確認 ・TS作成の実践
8	・マッピング ・作文課題(自分の性格・特徴を紹介)
9	・パーソナルエッセイの書き方(複数のパラグラフで文章を書く・素材集め・TS作成)
3学期	
1	・説明の技術①(情報の整理分類、ラベリング) 【キャンプの持ち物・会議の持ち物】
2	・説明の技術②(概要から詳細) 【机の並び方・道案内】
3	・説明の技術③(時間配列の原則) 【ピザトーストの作り方】
4	・英語で物の作り方を説明する
5	・説明の技術④(空間配列の原則) 【国旗の描写・服装の描写】
6	・1年間の振り返り(問答ゲーム・1年間の授業で大事だと思った技術を2つ挙げてパラグラフ・ライティング)

2019年度 高校2年生 言語技術計画

1学期

1	ガイダンス
2	描写①
3	描写②
4	イラストの分析
5	絵画の分析①
6	絵画の分析②
7	詩の分析①
8	詩の分析②
9	小説の分析①
10	小説の分析②

2学期

1	マンガによる視点変更1(赤ずきん)
2	マンガによる視点変更2(赤ずきん)
3	テキストの視点変更1(動詞の変化・英語)
4	テキストの視点変更2(振返り・事実整理)
5	テキストの視点変更3(年表作成)
6	テキストの視点変更4(歴史執筆)
7	テキストの視点変更4(歴史執筆)
8	論理1(三段論法の練習問題)
9	論理1(答え合わせ)
10	論理2(論理の飛躍・隠された前提)/英語
11	反論の方法

3学期

1	ディベートのルール確認、ブレインストーミング
2	ディベート練習①【日本語】
3	ディベート練習②【日本語】
4	ディベート練習③【英語】
5	ディベート練習④【英語】
6	立論(小論)執筆【「型」の解説・執筆】

B) 学習・トレーニング内容

1年生

1年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「対話」のトレーニング
- ②「作文」のトレーニング
- ③「情報伝達」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

①「対話」のトレーニング

「対話」のトレーニングでは、(1)「問答ゲーム」、(2)ナンバーリング、(3)質問の分解、(4)論拠の確認、(5)「事実」と「意見」の区別、(6)交渉の技術、(7)反論の技術、(8)議論の実践の8項目を行いました。

(1)「問答ゲーム」

「対話」のトレーニングでは「問答ゲーム」を中心に行います。「問答ゲーム」は「対話」の技術のトレーニングの基本であり、「言語技術」全体の最も基本となるものです。2人1組となり、簡単な質問と応答をゲーム形式で繰り返します。「好きか嫌いか」という簡単な質問から始まり、「どちらが好きか」「どちらになりたいか」という選択を迫る質問、最後は「賛成か反対か」といった高度な質問まで行います。応答の際に「好き」や「賛成」など、あらかじめ立場を限定して答えさせ、自分の考えとは逆の立場に立って考えさせることも行いました。日本語で「問答ゲーム」を行った後には、中学導入レベルでの簡単な英語による「問答ゲーム」を行います。

対話のトレーニングの実践

例題(理由は1つ)

- 1、あなたは晴れの日が好きですか？
- 2、あなたは冬が好きですか？
- 3、あなたはテストが好きですか？(好き)
- 4、あなたはゲームをすることが好きですか？(嫌い)
- 5、あなたは魚になりたいですか？
- 6、あなたは大人になりたいですか？

Training on Dialogue

Example

1. Do you like watching TV?
2. Do you like cats?
3. Do you like baseball?
4. Do you like reading manga?

発言の際は、以下のルールを必ず守って行います。

- ・結論をまず先に述べ、その後に必ず根拠をセットにして言う。
- ・発言の最後に結論を繰り返す。
- ・主語・目的語を省略しないで話す。

・質問に対して直接的・具体的に答える。

上記のルールに則ったものを「応答の型」として、繰り返しトレーニングし、体に染み込ませていきます。また、英語の「応答の型」も同様にトレーニングしていきます。

応答の型

「私は〇〇が好き(嫌い)です。 ←結論を先に
なぜなら、…だからです。 ←理由を必ずつける
だから、
私は〇〇が好き(嫌い)です」 ←結論を繰り返す

※ 対話の時は相手の目を見ること！

Training on Dialogue

英語の問答ゲームの「型」

“Yes, I like ○○, because That’s why(so) I like ○○.”

“No, I don’t like ○○, becauseThat’s why(So) I don’t like ○○.”

(2) ナンバーリング

理由が複数個ある場合は、ナンバーリングの技術を用います。ナンバーリングの型を日本語・英語それぞれで覚え、「問答ゲーム」で繰り返しトレーニングをします。

応答 (ナンバーリング) の型

★ナンバーリング
初めに理由がいくつあるかを示し、数字を使って順番に意見や理由を述べること。

「私は〇〇が好き(嫌い)です。
理由は2つあります。1つめは・・・だから
です。2つめは・・・だからです。
だから、私は〇〇が好き(嫌い)です」

ナンバーリングの実践(English)

★英語問答の「型」

Yes, (No,)I (don’t) like ○○.
I have TWO reasons (why I like ○○).
Firstly, Secondly,
That’s why(So) I like ○○ .

対話のトレーニング

例題(理由は2つ)
★即座に立場を決める！理由はできるだけ具体的に！

1、子ども部屋にテレビがあることにあなたは賛成ですか、反対ですか？
2、スマートフォンを見ながら歩くことにあなたは賛成ですか、反対ですか？

Training on Dialogue

Watching your Friend’s eyes!!

- 1、 Do you like Disneyland?
- 2、 Do you like jogging?
- 3、 Do you agree that all high school students should belong to club activities?
- 4、 Do you agree that all high school students should do volunteer activities?

(3) 質問の分解

内容の濃い対話のために、相手に情報を伝える時は5W1Hをもとに、落ちている情報がなにかどうか常に意識して話を組み立てます。また、相手の話を理解するために5W1Hを軸に、

不足している情報がないかどうか常に意識して聴き、質問を分解(ブレイク・ダウン)して聞き返します。「質問→応答」の1セットで終わっていた「問答ゲーム」を、「質問→応答→質問→応答」と2セット、3セットと往復して行うようにします。このとき、話題を掘り下げていくような質問をすることを意識し、話題が拡散しないようにさせます。

複数回の往復の「問答ゲーム」をする前に、下に示した5W1H が抜けている例文をもとに、5W1H を補うトレーニングもしました。

対話のトレーニング

☆コミュニケーションの基本

- ①自分の考えをより正確に伝える。
- ②相手の考えをより正確に理解する。

①②のためには、より具体的に話す・聞くこと
 → 5W1Hを意識して話す・聞くようにする!
 → 誤解を生じさせないコミュニケーションが生まれる

5W1Hを意識した対話のトレーニング

次の文で不足な情報を5W1Hを使って質問しよう。

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。不便だから取りに行こうとしているようなので、一緒に行ってあげようとしているみたいです。

5W1Hを意識した対話のトレーニング

SVOCMを意識して、次の文を英語化してみましょう
 そのとき足りない情報は何でしょうか？またそれを尋ねる5W1Hは？

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。

When? Who? Where? Who?

Last ○○, ●● went shopping to △, and said ◎◎ forgot ■■ うっかり.

What?

5W1H in ENGLISH

- 問題文を英語で考えた方が、欠落している情報がよく見えるので、5W1Hは意識しやすい。
- 5W1Hのうち、HOW? は、日本語のWHATと混ざることが多い。HOW? は形容詞・副詞を尋ねる文になる。

(4) 論拠の確認

対話をしている時、相手の発言が、ある「常識」を前提としてなされる場合があります。この「常識」が共有されていないと、対話がかみ合わなかったり、後に問題を引き起こしたりします。よって、対話をしている際には、相手の発言の陰に潜んでいる「常識」に注意していく必要があります。そして、潜んでいるとしたらどのような「常識」が隠れているのか気づけるようにトレーニングをします。

かみ合わない対話

問: マリアが太郎の話を理解できなかった理由は何か考えてみましょう。

太郎: 朝の7時台の電車には、僕は乗りたくないね。

マリア: なんで?

太郎: だって、朝の7時台の電車はとて混むじゃないか。

マリア: (どういこと???)

論拠の確認: 常識・根拠の再確認

自分の話を、当然相手も理解をしていると思って話していたら、相手はまったく理解をしていなかったという経験はありませんか?

→ 対話・議論の前提 = 「Warrant」(常識・根拠の正当性) が共有されていないことが原因という場合があります。

円滑な対話・議論をするためには、提示された情報について、前提(常識)が共有できているか判断する力が求められます。

(5) 「事実」と「意見」の区別

話したり聞いたりするとき、「事実」と「意見」を区別することができれば、中身に振り回されることなく情報を得ることができ、正確な情報を発信できるようになります。まず、短文を「事実」か「意見」か区別するトレーニングを行いました。その後、「事実」と「意見」が混ざった文を区別するトレーニングを行いました。

事実と意見を区別できるようになると・・・

「事実」・・・本当にあること、本当にあったこと
 「意見」・・・人の考え、人の思い、人の判断

①内容に惑わされずに受信

→どこまで本当でどこから意見か、人の言葉や文章を冷静に客観的に検討できるようになる。

②事実に基づく正確な発信

→より説得力のある話や文章になる。 (黄色のテキスト13ページ)

説得力のある言葉(話・文章)とは

- ①『リオネル・メッシは優れたサッカープレイヤーだ』
- ②『リオネル・メッシは観客を魅了するような華麗なドリブルをする』
- ③『リオネル・メッシはこれまで欧州最優秀選手に5回選出された』
- ④『リオネル・メッシはこれまでFIFA最優秀選手賞を6度受賞した』
- ⑤『リオネル・メッシはこれまでFIFA最優秀選手賞を10度受賞した』

→「事実」の内容は(正しければ)否定しようがない。

→また自分の意見を支える根拠が「(正しい)事実」であれば、相手への説得力が増す。

事実と意見の区別のトレーニング②

- A.これは、建設から30年経ったビルだ。
- B.これは、建設から30年経った古いビルだ。
- C.これは、隣のビルよりも古いビルだ。
- D.リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であった。
- E.リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であったと、皆が言っている。
- F.リチャード・ニクソンはベトナム戦争を終結させ、国民に実施した人気アンケートでは、歴代大統領の中で第2位だった。

Fact and Opinion in English

1. Blue is the prettiest color.	F / O
2. Sarah went to the store on Monday.	F / O
3. A camel is a mammal.	F / O
4. Spinach tastes great.	F / O
5. Everyone should go to the movies on Friday.	F / O
6. Theresa's dog is a poodle.	F / O
7. Bears are very interesting.	F / O
8. Jake is the best baseball player.	F / O
9. George Washington was the first president of the United States.	F / O
10. Picnics are better in the summer.	F / O
11. Soccer is a dumb game.	F / O
12. The earth has a north and south pole.	F / O
13. Cheetahs can run faster than horses.	F / O
14. George Washington was the greatest president of the United States.	F / O
15. Red shoes are better than white shoes.	F / O
16. Tuesday comes after Monday.	F / O
17. Spiders are creepy.	F / O
18. January is the worst month of the year.	F / O
19. Dogs have a better sense of smell than humans.	F / O
20. Halloween is in October.	F / O

(6) 交渉の技術

相手に自分の欲求を満たして欲しいとき、自分の感情だけでお願いしても相手は望みを叶えてはくれません。やはり、そこにはしっかりと理由が必要です。「問答ゲーム」でトレーニングしたように、自分の主張に対して必ず理由づけをして、相手に「交渉」しなければなりません。しかも当然ながら、その理由は相手を納得させるものでなければなりません。教室では相手を替えながら「交渉」のトレーニングをし、どのようにしたら相手が納得してくれるか、理由の吟味も行いました。

交渉とは

何かが欲しい時は、相手に対し「交渉」の必要性が生じます。相手が納得しなければ、自分の欲しい物は手に入りません。

相手を説得するためには、相手が納得できる明確な理由を示し、論理的に構成することが重要です。

交渉の失敗例

次郎:お母さん!新しい自転車買って!

母: どうして?まだ今の自転車に乗れるでしょう?

次郎:だって、みんな持ってるよ!みんなと同じのが欲しい!

母: みんなが持っているからってのは理由にならないわね。

次郎:今すぐ流行ってるんだよ!だから絶対欲しい!

母: 流行っているからといって買う必要はないわね。

次郎:.....

交渉の成功例

母:「何か言いたそうな顔してるわね。どうしたの?」

次郎「お母さん、僕に新しい自転車を買ってください。僕はどうしても新しい自転車が欲しいんだ!理由はね、今乗っている自転車は、もう古くてとても乗れる状態じゃないんだ。ブレーキはキーキーと嫌な音がして、かけてもすぐに止まれず危険なんだよ。以上が、僕がどうしても新しい自転車が欲しい理由です。お母さん、どうか僕に新しい自転車を買ってください。お願いします。」

母:「そうなのね。次郎が乗っている自転車は、もともとお兄ちゃんが乗ってた物だものね。考えてみましょうか。」

「交渉の技術」のトレーニング

じゃんけんて勝った方が最初に交渉する側(子ども役)になります。交渉される側(親役)から「何か君は言いたそうだね。どうしたの?」と言ってスタートしてください。(理由は1つ)

- 1、腕時計を買ってほしい。
- 2、最新のスマートフォンを買ってほしい。
- 3、財布を買ってほしい。
- 4、1万円のボールペンを買ってほしい。

「○○さん、私に△△を買ってください。私はどうしても△△が欲しいです。欲しい理由は…だからです。以上が私が△△をどうしても欲しい理由です。○○さん、どうか私に△△を買ってください。」

(7) 反論の技術

相手の意見や主張を聞いて「それは違う」と思った時、「反論」する場面が生じます。また、相手から何かをお願いされた時に、その要望には応えられない・応えるべきではないと思った時も、「反論」の場面となります。「反論の技術」では、大きく2通りの反論の方法(型)を学び、それらに則ってトレーニングをします。どちらの方法(型)にもメリット・デメリットがあることを考え、場面に応じて使い分けていくことが重要であることを確認しました。

「反論の技術」

◎反論の方法の種類

- (1)相手の主張に直接的に反論する方法
- (2)相手の主張を受け入れてから、反論する方法

(参考)22ページ「朝食にはパンよりご飯が適当」への反論

★相手の主張を受け入れてから、反論する方法のポイント

「確かに(なるほど)……しかし(けれども)……」

《「AはBである。なぜならCだからだ」という主張への(2)の反論の型》

「AはBだというあなたの意見は一理あります。確かにCという点では正しいと思います。しかし、…という点では適当と言えません。」

◎「反論の技術」のトレーニング

◎23ページの練習問題①と②を(2)相手の主張に理解を示した上で、反論する方法で行いましょう。

※じゃんけんて勝った方が①を主張し、負けた方が反論してください。終わったら主張・反論の役を交代して②を行ってください。

《「AはBである。なぜならCだからだ」という主張に対する反論の型》

「AはBだというあなたの意見には一理あります。確かにCという点では正しいと思います。しかし、…という点では適当と言えません。」

(8) 議論の実践

与えられた議題について、自分の立場を明らかにし、その立場を支える理由を述べる。お互いに曖昧な箇所を5W1Hの質問で掘り下げ、より具体的にします。違うと思うところに対しては反論をする。以上のように、これまで「対話の技術」でトレーニングしてきたことをすべて使い、3~4人で1グループとなって、模擬議論をしました。均等に発言の機会を持たせるため、はじめは順番に従って発言・質問・反論をするという約束のもとで実施しました。また、英語では議論の流れを先に文字にし、それを読む形で議論の体験をしました。

◎今日の授業

議論のトレーニング

○議論＝主張・質問・反論の繰り返しです。
つまり、これまでの**総復習トレーニング**です。

議論のトレーニングの実践

それでは本日の議論のテーマです。

◎あなたは、「高校では毎日8時間目まで授業をして、**金土日**を3連休にした方がいい」という意見に賛成ですか、**反対**ですか。

議論に入る前に事前準備をします。5分間、時間を取りますので、自分の主張の理由、予想される反論、反論に対する反論を考えてみましょう。

議論の際の注意事項

- ①主語・述語・目的語を入れて、文で話しましょう。
- ②1回の発言はシンプルにしましょう。
- ③途中で、新たな主張・理由を言ってはいけません。
- ④質問・反論する時は、相手の主張・理由から離れないでください。
- ⑤質問する時は、相手の発言内容を復唱して、相手の主張・理由を掘り下げるものにしましょう。

議論のトレーニングの実践

◎ABCDの4人で行います。※Aさんが進行役となってください。

★プリントの注意事項を意識しながらトレーニングを行ってください！

1周目：ABCDの順でテーマについて自分の主張(理由1つ)を述べる。

2周目：BCDAの順で、自分と立場が違う人に5W1Hの質問をする。

質問された人は答える。

3周目：CDABの順で、自分と立場が違う人に理解を示したうえで反論をする。

4周目：DABCの順で、自分の立場にされた反論に対し、反論をする。

5周目以降：順番は関係なしで、時間が来るまで質問・反論を繰り返す。

Useful Expressions in discussion

議論を始める

Let's talk about

(...について話しましょう)

What do you think about

(...についてどう思いますか)

Today's topic is ...

(今日の議題は...です)

Useful Expressions in discussion

同意する・反対する

I agree with you.

(...に賛成します)

I think that's a good point. /Good idea!

(それは良い点だと思います)

I don't think so. In my opinion ...

(私はそう思いません。私の意見では...)

That might be true, but I am not sure about that because

(それはそうかもしれませんが、でも...という点で、正しいかは確かではありません)

Let's make a skit for a pair discussion!

Do you agree with the opinion that Japanese high school students should be given homework?

◎あなたは高校生にとって宿題は必要であるという意見に賛成ですか、反対ですか。

AさんとBさんの役をペアで決めて、反対の立場の意見で議論をするスキットを作成しましょう。

Let's make a skit for a pair discussion!

1. できあがったスキットをペアで、読み合わせてみましょう。
2. 役割を交代して、読んで見ましょう。
3. なるべく見ないで、感情を込めて読めるように、練習してみましょう。

②「作文」のトレーニング

「作文」のトレーニングでは、(1)パラグラフの構成と作り方、(2)説得力のあるサポーティング・センテンスの作り方、(3)トピック・センテンスの作り方 の3項目を行いました。

(1) パラグラフの構成と作り方

パラグラフと、日本でいうところの「段落」との違いに着目させ、パラグラフの構成要素を学びます。社会に出て求められる意見文や報告文の文章は、パラグラフ形式で書かれた文章であることを教えます。また、英語をはじめ欧米の言語は、基本的に文章をパラグラフで書くことが決まっており、外国語の文章を読み書きする時にとっても重要になることを伝えます。

パラグラフの構成要素と作り方

- ・トピック・センテンス(TS) →主張・話題を述べる。基本的に第1文目に置かれます。
- ・サポーティング・センテンス(SS) →TSに対し根拠・例示などを付け加える複数の文です。
- ・コンクルーディング・センテンス(CS) →再主張して締めくくる文。基本はTSを繰り返します。
- ・TS、SS、CSを改行せずにひとつなぎで書く(=パラグラフ)
→「対話」の技術における、発言の際のルールに従った「応答の型」をひとつなぎで書けばパラグラフになります。

(2) 説得力のあるサポーティング・センテンスの作り方

トピック・センテンスの内容が説得力を持つよう、サポーティング・センテンスでは定義・説明・事例・根拠などを記述してトピック・センテンスを支えます。まず大前提として、サポーティング・センテンスがトピック・センテンスの内容から絶対に逸脱しないようにしなければなりません。また、サポーティング・センテンスを事実や自身の経験をもとに書くと説得力が増すことを学びます。さらに、自分の主張を支える理由・根拠が、相手からしてみると不十分で納得できない場合がありますので、挙げた理由・根拠を5W1Hで掘り下げるトレーニングをします。理由・根拠を5W1Hで掘り下げるトレーニングでは、以前に自分が書いた意見文を掘り下げさせ、書き直しをさせることで、説得力のつけ方を実感してもらいます。

本日のトレーニングの内容

《説得力のある文章を書く》

↓ そのためには・・・

主張(TS)を支える「理由」(SS)が大事

↓ つまり

事実や筆者の経験をもとに、説得力のある理由・根拠・例を書けるかどうか

こういう理由の文はダメ！

問：以下の(理由)は何がいけないでしょうか？

- **24時間営業のコンビニエンスストアの存在に反対**
(理由)コンビニエンスストアが24時間開いていると、深夜に働かなくてはいけ
ない人が必要となり雇用が生まれるから。
- **24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成**
(理由) 24時間開いていると、いつでも買い物ができる、深夜でも店員がいて
安全だから。
(理由) 1つ目は、24時間開いていると、いつでも買い物ができる便利だから。
2つ目は、他の店が閉店していても自分が欲しいものが手に入るから。

理由をもう一段階掘り下げる！

●小学校への英語の導入に反対

1つ目は、英語が授業に入ると、国語の学習時間が減る結果になるから。
→国語の学習時間が減ると、思考力や表現力といった、母語の使い方を学ぶ時間が減り、学力低下につながる。

2つ目は、小学校で英語を教えると、英語嫌いの子供を増やす可能性があるから。

→小学生が英語で自分の考えを話すことは難しく、うまく話せない経験が、彼らに英語への苦手意識を植え付けてしまうと思われる。

サポーターティング・センテンスの悪い例

A項目：根拠になっていない例

- ▼コンビニエンスストアはたくさんの商品が置いてあるから。
- ▼私はコンビニエンスストアの商品が好きだから。
- ▼コンビニエンスストアは近くにたくさんあって便利だから。
- ▼1つめはいつでも買えるから。2つめはお腹がすいたときすぐ食べ物を買えるから。

B項目：掘り下げになっていない内容の例

- ▼電力の消費が莫大 → 24時間営業をやめれば節電ができる
- ▼電力の消費が莫大 → 冷暖房が強く電力もかなり使っている
- ▼いつでも物が買えて便利 → 店がやってなければいつでも買えず不便
- ▼いつでも物が買えて便利 → 店舗がたくさんあってすぐに買いに行ける
- ▼明るさが防犯対策になる → 私は明るいところによく行く

文章を書く前に、サポーターティング・センテンスの素材となりうるものをできるかぎり挙げてから、どの素材が最も読み手を納得させるかを考え、選択し、アウトラインを作成することは、一貫した文章を書くうえで大切なことです。いきなり文章を書き始めることは禁止とし、発想を広げ、文字に起こし、テーマに応じた素材の良し悪しを比較検討する練習もしました。その1つの思考ツールとして、「マッピング」を用いました。

本日のトレーニングの内容

《論理的な文章を書く》

↓そのためには・・・

文章を書く前に、主張・話題につながる素材(根拠)をたくさん挙げる。

↓そして

たくさん挙げた素材の中から、どれが根拠として一番いいか(読者を納得させられるか)をよく吟味して取捨選択する。

《本日の課題》

「○○に賛成(○○に反対)」の意見文を1つのパラグラフで書きましょう。○○の内容は自分で自由に決めてください。

文章を書く前に、主張・話題につながる素材(根拠)をたくさん挙げる。(10分間)

①自分の主張を決める。

「私は○○に賛成/反対である」の○○の内容を決める

②自分の主張を支える理由・根拠を3個以上挙げる。

③3個以上挙げた理由・根拠の、さらに掘り下げた説明を、それぞれ2個ずつ挙げる。

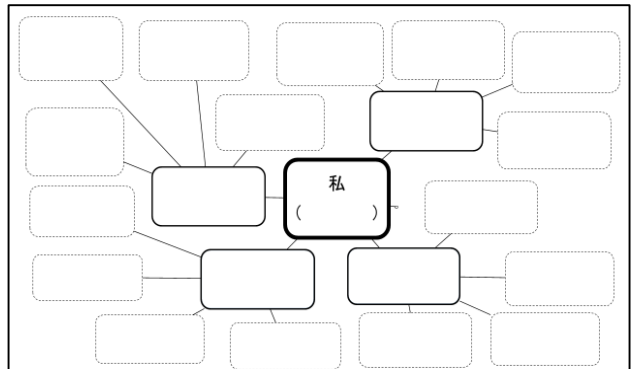
☆10分間、手を止めずに書き続ける！思いついたものをそのまま書く。書く前に、その内容がいいか悪いか自分で判断してない！

《本日の課題》

「私、○○○○は、△△△で□□□な人間である」というトピックセンテンスの文章を1つのパラグラフで書きましょう。

【手順】① プrintのマッピングを完成させる。

- (1)真ん中の枠の「私」の下に自分の名前を書く。
- (2)真ん中の枠から伸びている4つの枠に、自分の性格・性質や特徴・特性を表す内容をより具体的に書く。
- (3)4つの枠それぞれから伸びている枠の3つ以上に、掘り下げた内容(裏付ける例やエピソード)を書く。



(3)トピック・センテンスの作り方

トピック・センテンスの2つの構成要素を知り、より良いトピック・センテンスを作る練習をします。トピック・センテンスを読んだときに、読み手が、その続きのサポーターティング・センテンスに興味を持ち、「おおよそこんな内容なのだろうか?」「このトピック・センテンスを支えるのはどのような内容なのだろうか?」「この続きを読みたい!」と考えるような文を作ります。逆に、単なる事実を示す文や、具体的に詳細を語りすぎる文は良いトピック・センテンスとは言えません。

トピック・センテンスで言及されていない内容は、サポーターティング・センテンスで述べてはいけま

せん。逆の言い方をすれば、サポーター・センテンスで述べた内容を包含したトピック・センテンスにしなければなりません。いくつかの例題について考えながら、トピック・センテンスの作り方を身につけていきます。

パラグラフの復習

例題: 次のパラグラフの悪いところは何でしょうか。

伊藤家の長女の薫は、気丈で面倒見がよい。一方、次女の渚は、常に自分のことが優先で、周囲の状況にあまり関心を示さない。また、三女の華は、すぐに甘えて人に頼ろうとする。

★パラグラフでは、1つのトピック(話題)しか言うてはいけない！
 ★TSは、そのパラグラフで何を話題にするのかを示す一文！だからTSの内容から外れた事を、そのパラグラフ中で言うてはいけない！

課題A: 上のパラグラフでは、どのようなTSを作ればよいでしょうか？
 隣の人と考えて見ましょう。

課題B

山田中学校は、多くの人と触れ合い、貴重な経験をする
ことができる学校である。

まず

外部の講師による
講義がたくさんある。

また

近隣の小学校との
連携授業

さらに

地域清掃

命の尊さを学んだり、世界の状況を知ったりした。

将来生きる上で大切なことを私たちに教えてくれた。

先生として児童の世話をしたり、一緒に遊んだりした。

地域清掃を通して町に住んでいる方々と交流しあってきました。

SOKA Gakuen

Cats are nicer pets than dogs in some ways. **TS**

First, cats are cleaner. They love to be very clean. **FE**

Cats are also quieter than dogs. Cats are safer, too. **SS2** Dogs sometimes bite people, but cats almost never do. **SS3**

Cats have many advantages to keep as pets. **CS**

Paragraph Reading in English

文と文をつなぐ表現(LINKING WORDS)

列挙	first(ly) (第一に), second(ly) (第二に), third(ly) (第三に), finally (最後に)
順序	before (～の前に), after (～の後で), earlier (以前に), later (後で)
追加	also (～もまた), besides / moreover (その上), in addition (加えて)
例示	for example / for instance (例えば), such as (～のような)
逆接	but (しかし), however (しかしながら), on the contrary (それどころか)
譲歩	though / although (～だけれども)
対比	meanwhile / on the other hand (一方では), while (～の一方で)
原因・理由	because (～なので), because of (～の理由で), since (～なので)
結果	so (だから), therefore (それゆえ), thus (したがって), as a result (結果として)
言い換え	in other words (言いかえると), that is (to say) (つまり)
要約	in short (要するに), in a word (一言で言うと), in summary (要約すると)
結論	in conclusion (結論として)

以上、学んだ3項目をもとに、日本語と英語でパラグラフ・ライティングの実践をします。

(1)～(3)のトレーニングをするにあたって、生徒たちには以下のテーマで作文を書かせました。

【作文課題】

- 1、あなたは、授業の始めと終わりにチャイムを鳴らすことに賛成か、反対か？
- 2、あなたは24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成か、反対か？
- 3、私が、学校で教わる教科の中で1つだけ残すとしたら〇〇である。
- 4、私は、〇〇(という意見)に賛成か、反対か？
- 5、私は、高校の部活動を廃止すべきだという意見に賛成か、反対か？
- 6、私は、集団より個人を優先すべきだという意見に賛成か、反対か？
- 7、「私は〇〇で△△な人間である」というTSの文章を書く。(マッピングを活用)

③「情報伝達」のトレーニング

「情報伝達」のトレーニングでは、(1)情報の整理分類、(2)ラベリング、(3)空間的秩序の原則、(4)時間的秩序の原則 の4項目を行いました。

(1) 情報の整理分類

同じ性質を持つ情報は共通項でくくり、整理分類をして提示するようにします。そうすることで説明は格段に分かりやすくなります。

(2) ラベリング

整理分類し、共通項でくくった情報に、ラベル(見出し)を貼って先に示します。「この部分は何についての情報なのか」を先に明らかにしてから説明すると、聞き手は分かりやすくなります。

上記の(1)(2)までを学び、トレーニングする例題として、「キャンプの持ち物の説明」を取り上げます。キャンプに持って行く持ち物を、ただ羅列して挙げるだけでは、聞き手は理解するのに手こずります。そこで、共通の性質を持つもの同士でカテゴリー化し、そのカテゴリーにラベルを付けます。また、同じ枚数どうしでくくると、説明はより分かりやすくなります。今回の例題では、以下に示すように、「衣服」と「洗面道具」というカテゴリーに分け、ラベルを貼ることができます。

情報伝達の技術① ～より分かりやすい説明のために～

★情報を整理分類して提示する

→同じ性質を持つ情報を、共通項でくくって提示する。

★ 情報伝達の技術②

★ラベリング

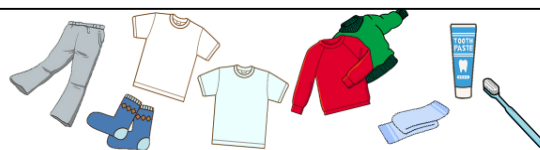
共通項でくくった情報にラベル【見出し】を貼り、共通する性質（＝どういう共通項でくくられているのか）を先に明らかにする。

→相手に話す内容の見通しを与えることで、話を理解してもらいやすくなる。

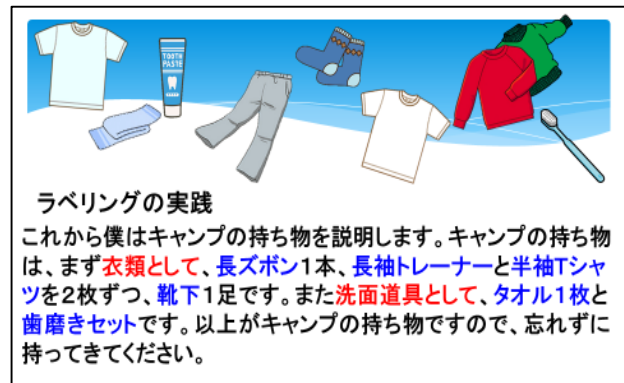
問題

三郎君がキャンプの持ち物について、以下のようにクラスのみみなへ説明をしました。この説明の良いところは何でしょうか？

「半袖Tシャツ1枚、タオル1枚、歯磨き粉、長ズボン1つ、靴下1足、半袖Tシャツをもう1枚、長袖トレーナー2枚、歯ブラシ1本です」



これから私はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、長ズボンを1つ、靴下1足、長袖のトレーナーと半袖のTシャツを2枚ずつ、タオル1枚、歯磨きセットです。以上でキャンプの持ち物の説明を終わります。



(3) 空間的秩序

空間的秩序とは、大原則として「概要から詳細へ」説明するというものです。相手に情報の全体像（見通し）を与えてから、部分の詳しい説明をします。道案内をするときや、探している物を相手に伝える時など、最初に概要を伝えてから、詳細な部分を伝えます。最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージ（理解）しやすくなります。また、小原則として「一方向」で説明をするということがあります。例えば、「上から下、あるいは下から上」「右から左、あるいは左から右」「手前から奥、あるいは奥から手前」「外から内、あるいは内から外」というように説明するということです。聞き手（読み手）の視点が行ったり来たりしないようにします。一方向の説明の方が、聞き手（読み手）は覚えやすく、理解しやすくなります。

情報伝達の技術③
 ~より分かりやすい説明のために~

☆空間的秩序(空間配列)の原則

大原則: 全体から部分へ・大情報から小情報へ
 小原則: 一方向で説明する

①上から下(下から上) ②右から左(左から右)
 ③手前から奥(奥から手前) ④外から中(中から外)

課題① 会議室にはどのような机が並べられていますか。机の並び方を説明しなさい。

【今日の説明の技術】

★概要から詳細へ、全体から部分へ、
 大きい情報から小さい情報へ

課題② プリントにある地図をもとに、今日学んだ「説明の技術」を必ず使って、A駅から青空第一中学校まで相手がよく分かるように道案内をしてください。

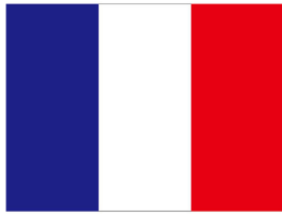
※相手は大人で、A駅周辺に詳しくないこととします。

【考えてみよう】

「道案内」における「全体の情報」
 「大きい情報」とは何でしょうか。

「道案内」における「部分の情報」
 「小さい情報」とは何でしょうか。

問:相手が頭の中に、フランス国旗を描けるよう、言葉だけで説明してください。相手は、「国旗」というものが何かは知っていることとします。



問:夏美さんの服装を説明してみましょう。



(4) 時間的秩序の原則

時間的配列の秩序とは、時間の経過に従い、時間の早いことから順を追って説明していきます。物の作り方や実験の手順などを説明・報告する時には、時間が逆行しないように、この時間的配列の秩序を守ります。また、聞き手(読み手)が分かりやすいように、順序を表現する副詞(まず、最初に、はじめに、次に、それから、その後、最後に、終わりに等)を有効に使うようにします。

情報伝達の技術④

～より分かりやすい説明のために～

☆時間的秩序(時間的配列)の原則

→時間の経過に従い、早い順から説明すること

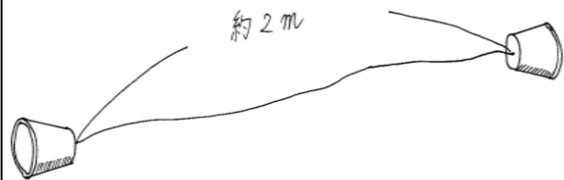
☆順序を表現する副詞を有効に使う

・まず・はじめに ・次に・それから ・最後に・終わりに

【今日の説明の技術のトレーニング】

★「時間的秩序の原則」に従い、物の作り方の説明をする。

課題① 下に示された物の作り方の説明をしてみましょう。



説明の技術のトレーニング

物の作り方の説明手順の例(時間的配列)

- ①自分が何について説明をするか
- ②必要な道具
- ③必要な材料
- ④下準備・下ごしらえ
- ⑤作業工程

説明の技術のトレーニング

☆明日香さんは俊平君に自分の好きな食べ物の作り方を説明しました。



まず具を適当に切るのよ。それでパンにソースを塗ったら、具をのせて、チーズものせて、焼いて終わりよ。

課題1:明日香さんの物の作り方の説明で分からないこと・あいまいなところに対し、5W1Hの質問をペアで10個以上書き出しましょう。

2年生

2年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「情報分析」のトレーニング
- ②「認知」のトレーニング

③「議論」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

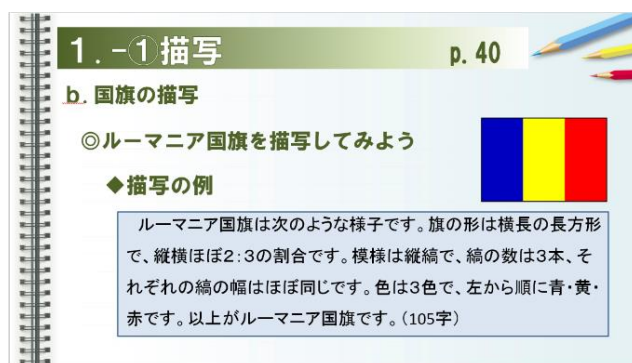
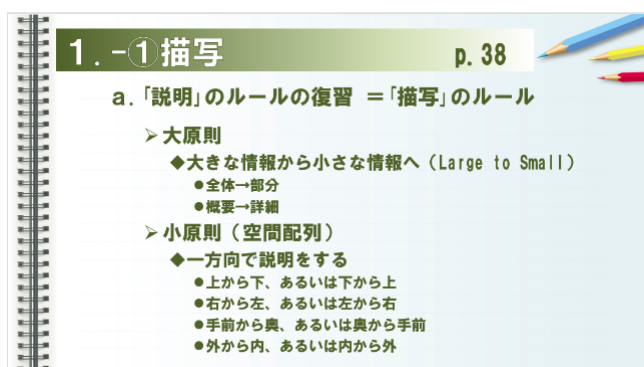
①「情報分析」のトレーニング

「情報分析」のトレーニングでは、(1)描写、(2)絵の分析、(3)テキストの分析 の3項目を行います。

(1)描写

最初の描写では、ごく簡単な国旗やイラストを言葉のみで伝えることを例題として、下記の3項目の必要性を確認し、グループワークで協力して行います。

- ・描写に必要な情報を列挙する
- ・挙げられた情報を分類整理する
- ・どの順序で描写すると効果的かを考える

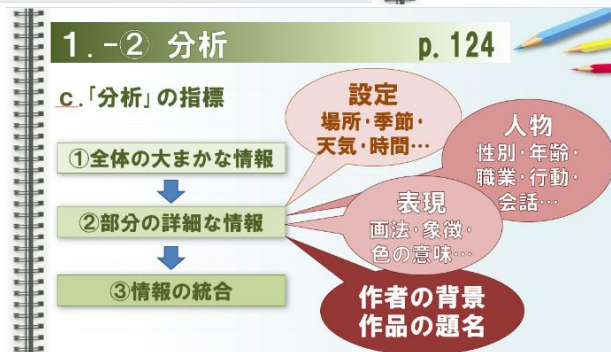
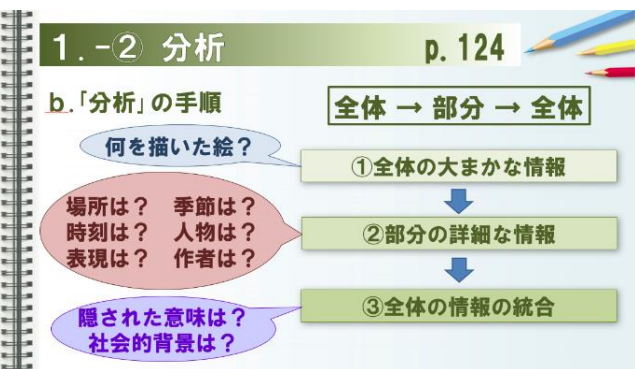
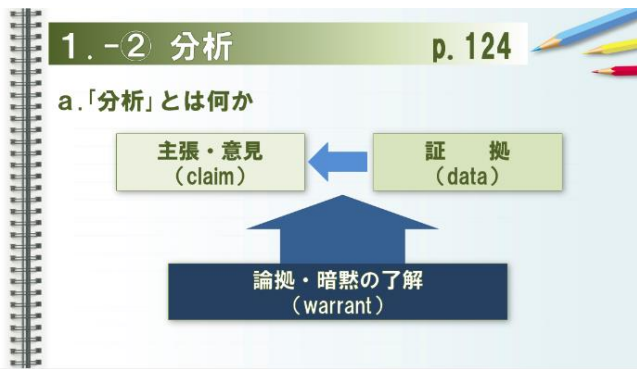


次に個人の作業として、1年次に学習したパラグラフライティングの形式で、描写文を書くことに取り組みます。このように2年生の言語技術、特に日本語では、作文を書く機会が多いので、生徒が書いた描写文は、担当教員の1人がループリックに基づいて採点、添削して返却するようにしています。具体的なループリックと添削については、後述します。

最後に、「大きな情報から小さな情報へ一方向で説明する」という空間的秩序の原則を確認して描写の授業を終わります。

(2)絵の分析

私たちはある絵を見たときに、絵から得られた視覚情報を元にほとんど無意識のうちに「この絵には〇〇が描かれている」などと判断します。この授業では、そのような判断が、どのようにして成り立っているのかを意識することから始めます。



まず、絵という情報をよく観察し、そこから判断の根拠となる証拠を発見します。次にそれらの証拠を総合して解釈することで、ある判断が成り立っていることに気づかせます。

さらに、絵の中にある1つの情報が何を意味するかは、常識や慣習などの暗黙の了解を論拠としていることがある、ということも学びます。このような「暗黙の了解」は、文化を共有している者同士では何の説明もなく通用しますが、異文化とのコミュニケーションを図ろうとすると、意識して説明する必要が出てきます。この暗黙の了解は、認知のトレーニングや、議論のトレーニングでも振り返る必要のある重要な項目です。

以上のように、絵の分析を行う目的を理解した後は、具体的な「分析」の手順を学びます。分析の手順は、基本的に前項の空間的秩序の原則と同じく「全体から部分へ」ですが、少し違うのは、最後にもう一度全体に戻るという点です。細部の観察を行った後に、これまでの情報を統合して、この絵が何を描こうとした絵なのか、どんな意味が隠されているのかなど自分の意見を持つこととなります。絵の分析ではそれほど情報量の多くないイラストの分析から始め、次のステップで、情報量の多い絵画を分析し、そこに隠されたテーマや物語を読み取ることへと進みます。

(3) テキストの分析

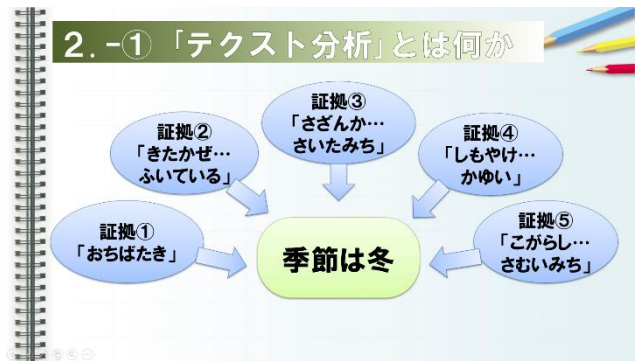
テキストの分析も、絵と同じように、テキストの中から証拠を見つけ、それらを解釈することで成り立ちます。たとえば、「たき火」という童謡の歌詞を分析すると、

2.-① 「テキスト分析」とは何か

この詩に描かれた季節は？

「たき火」

かきねの かきねの まがりかど
たき火だ たき火だ おちぼたき
「あたろうか」「あたろうよ」
きたかぜじいふいっている
ささんが ささんが さいたみち
たき火だ たき火だ おちぼたき
「あたろうか」「あたろうよ」
しもやけおてがもつかゆい
こがらし こがらし さむいみち
たき火だ たき火だ おちぼたき
「あたろうか」「あたろうよ」
そつだんしながら あるいは

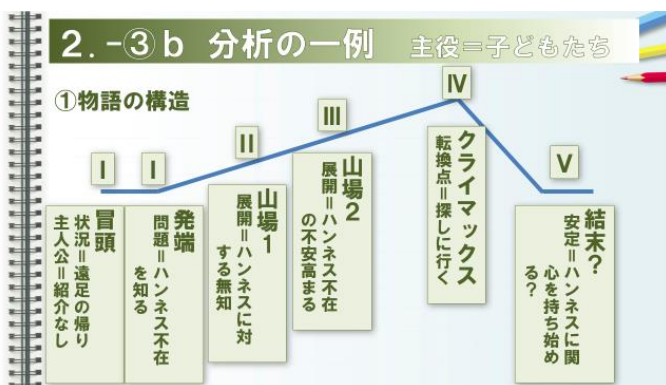


季節を示す様々な証拠が見つかります。一つの証拠だけでは季節を確定できないものもありますが、全ての証拠を総合すると、季節は「冬」とであると解釈することができます。このように、テキスト分析とは「テキストに書かれた言葉を証拠として、そこから推論して解釈や意見を示すこと」をいいます。

テキスト分析の実践では、まず詩の分析から始めます。詩は、1時間の授業で取り扱える程度の分量であり、具体的なイメージが掴みやすいからです。まず始めに日本語の詩から登場人物の境遇や、中心的に描かれている対象との関係等を読み解くことから始めます。大切なことは、絵の場合と同じように、必ず本文の中から証拠を挙げて解釈を示すことです。

このようにテキスト分析を行うことで、1年次から徹底してきた「話すとき、書くときには必ず主語をつけよう」という原則を改めて確認できる、という効果もあります。

テキスト分析は、詩に続いて短編小説の分析を行いました。短編小説では、物語の構造と、文中に描かれた太陽の象徴性を合わせながら、グループで協力して分析しました。



2.-③ b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか ~分析の手順~

- 本文の太陽に関する記述をマークする。
- 構造図に太陽の状態(位置・明るさなど)を図示する。
- 太陽に関する記述の前後をよく読んで、根拠を探し、何と関係しているかを考える。

2.-③ b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか
根拠を示す⇒引用して説明する

根拠の示し方の例

太陽が「……」(行)ている時に、○○は「……」(行)ている。ところが、太陽が「……」(行)になると、○○は「……」(行)しており、太陽が○○○○を象徴していることを示している。

2.-③ b 掌編小説の分析

引用の方法

必要最低限の簡潔な引用

《適切な例》 ページと行を明示
下人は、「猫のように身をちぢめて、息を殺し」(34-12)しており、緊張していることを示している。

《不適切な例》 引用には必ず「」をつける
下人は緊張している。なぜなら、「猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。」(34-12)と書いてあるからである。

必要以上に長い引用


「なぜなら…からである」の繰り返しになり、冗長

さらに、分析結果を全員の前で発表する際には、パラグラフの形式に従って話すことと共に、必ず証拠を示しながら話すことを徹底しました。このように、分析結果を発表するという行為をとおして、分析のみならず、1年次で学習した説明の能力や、パラグラフ・ライティングの能力も繰り返してトレーニングすることになります。

さらに昨年に引き続き、絵本の分析として『手のなかのすずめ』の分析に取り組みました。

3-1 「絵本」の分析

1ページ目の扉絵を見て、何が描かれていますか。
また書かれているものから、これからどんな物語が始まるかが予想されますか。




グループでのディスカッションを中心に、題名や扉絵から想像できることを話し合ったり、2人一組で絵本を音読したりして授業を進めました。既習の「物語の構造」に照らし合わせて「事件の発端」を確認した後、主人公のティムにとって小さな成長のきっかけとなった「すずめとの出会い」が絵と文章にどのように描かれているかを話し合いました。母親と買い物に出かけ、すずめと出会う前後で、ティムがどのような成長を遂げたかを分析し、その結果を作文の課題として書き上げました。ルーブリックに基づいてお互いの原稿を添削採点し、さらにその原稿を教員が採点する、という手順をとりました。

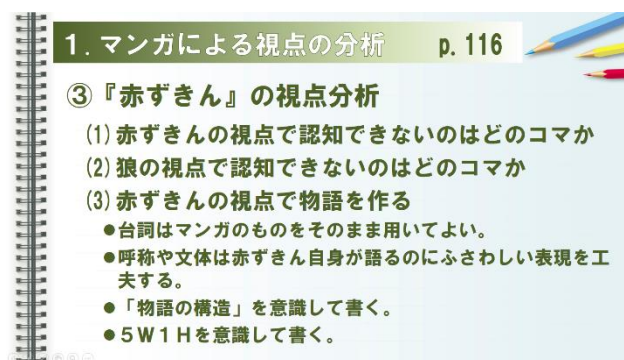
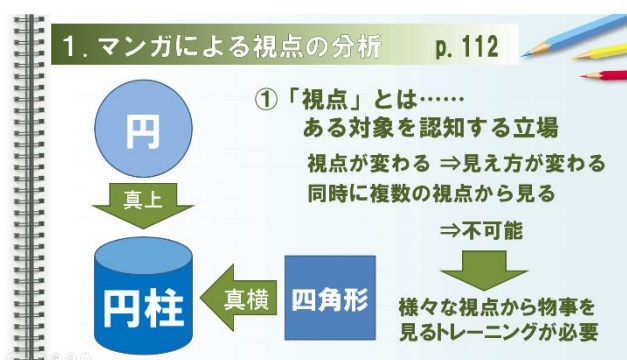
階段を登り始めたティムが描かれている。	このページではすずめと出会う前の大人への	保護の関係を強調している。以上の事から	りお母さん、ティム、すずめの間にある保護	たり、遂に何かに包まれている間に物であ	じょうろなど金物の何かに支えたりする	いじに描かれている手すり、かご、植木鉢、	中であることも表れている。さらに、このペ	まだお母さんに守られる立場であり成長の途	人への階段を登り始めた事に加え、その大	守られる立場から何かを守る立場になり、大	んに包まれている。この事は彼がお母さんに	段の真ん中で手にすずめを持ちながらお母	味にしている。また、ここにおいてティムは階	いによつてティムが様々な事を得たことと意	くさんの物がある。この事はすずめとの出会	鉢が描かれており2ページの窓と比べるとた	ている。ページ上部の窓にはじょうろと植木	人への成長の柱。ティムが暗示的に描かれ	にページにはすずめとの出会いによって大
---------------------	----------------------	---------------------	----------------------	---------------------	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------------

認知のトレーニング

認知のトレーニングでは、(1)漫画による視点の分析、(2)テキストの視点変更 の2項目を行います。

(1) 漫画による視点の分析

授業の初めに、私たちは、物事を認知する際にはどうしても特定の視点から認知せざるを得ず、視点が変わることで事実の認識が変わることに気づかせます。そこで、童話「赤ずきんちゃん」のコマ漫画を使って、赤ずきんの視点で認知できないコマがあることを確認し、まず、日本語で、赤ずきんの視点で物語を書きました。



(2) テキストの視点変更

昨年度同様、本年度も TOK のテキストを参考に、芸術界で物議を醸し出した「生きた金魚ブレンダーにかけるのは芸術？」の文章を読み、この芸術作品に反対する市民グループ、擁護派の美術館館長、この事件を裁定した裁判官の判事の3つの立場に立ち、それぞれの主張にどのような根拠、かくれた論拠(ワラント)があるかを議論し、浮かび上がらせました。

さらにその後、3者のなかのいずれかの立場を取り、「異なる意見にも言及しながら」自分の意見を書く、という課題を課しました。これは、独りよがりの主張に陥ることなく、明確な根拠を伴うわかりやすい主張ができるようになることを意図していました。どの生徒も達成できることを助けるため「確かに・・・しかし～」という反対意見へ言及したのち、自分の主張を行う型を明示しました。



③ 議論のトレーニング

議論のトレーニングは、(1)論理の学習、(2)反論の技術、(3)ディベートの 3項目を実施します。

(1) 論理の学習

論理の学習では、日常的にもよく耳にする、「『論理』とは何か」「『論理が正しい』とはどういうことか」「『論理的』とはどのような状態か」などのことばを定義するところから始めます。更に、論理を組み立てる際の「前提」や「推論」といった用語を説明してから、具体的な練習問題に取り組みます。

練習問題としては、まず、論理の基本となる三段論法を紹介し、例示された三段論法のどこに問題点があるのか、を話し合うところから始めます。続いて20問ほどの練習問題を出題し、生徒が協力して、それぞれの論理的問題点を指摘します。それらの練習問題を考えることをとおして生徒たちは、正しい推論の条件として、

- ・理論の飛躍がないこと
- ・前提が正しいこと

の2つが必要なことを確認します。

更に、同じような文化や生活を共有している者同士では、論理の前提が隠されていること、いわゆる「暗黙の了解」があることを学びます。これは、「絵の分析」で学んだことの復習にもなります。

最後に、200字程度の文章を示して、その中に含まれる様々な論理的欠陥を指摘する課題に取り組みます。この時に問題文として示した文章は、昨年卒業した生徒たちがファイナルプロジェクトとして作成した文章を、練習用に改作したものです。これは、現2年生も、来年のファイナルプロジェクトのポスターセッションの際に質疑応答をすることを念頭に置いて、論理的に欠陥のない文章が書けるように意識させるためです。

(2) 反論の技術

ここでは、反論の方法として、

- ・相手の主張に直接的に反論する方法
- ・相手の主張に理解を示した上で、論理的に矛盾している部分などについて反論する方法

の2種類があること、更に、それぞれの方法を実際に用いる際の、話し方の「型」を学びました。以下がそれぞれの「型」です。

① 私は、〇〇君の意見に反対です。〇〇君は、「…(引用)…」と述べています。しかし、この主張は成立しません。第1に、……。第2に、……。以上の理由により、〇〇君の意見は成り立ちません。

② 〇〇君の意見は一理あります。確かに「…(引用)…」という点では彼の主張は正しいと言えます。しかし、その主張は次の点が矛盾しています。第1に、……。第2に、……。以上のように彼の主張には複数の矛盾点があるため成り立ちません。

いずれも、1年次で学習した「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングの形式に基づいて、始

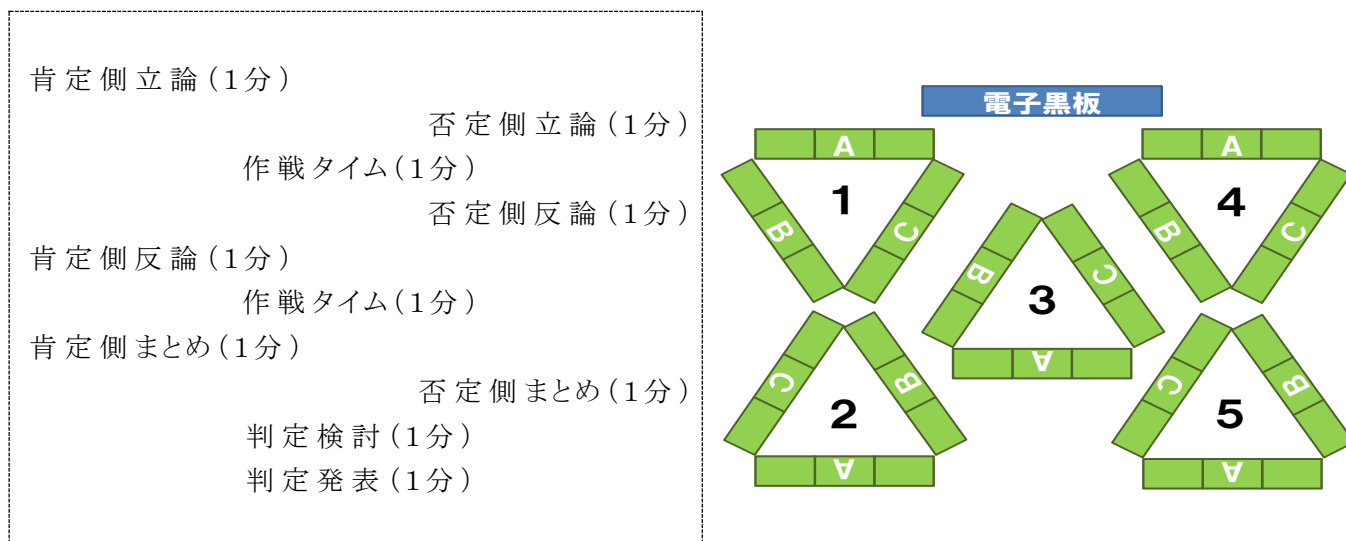
めに自分の立場を明示し、続いてその根拠を示し、結びとして自分の立場を再度主張する、という形をとっています。生徒たちは、「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングでこの形式には慣れていきますので、この後のディベートでもこの「型」を使いこなしていきます。

(3) ディベート

生徒の多くは、中学校の国語でディベートを経験していましたが、ディベートそのものの定義や説明は、ごく簡単に示すにとどめ、チーム作り、役割分担、論題決めなど具体的な準備を始めます。教室で一斉に実施するために、各チームが、試合ごとにどの論題を取り上げるのかは予め決定しておき、それぞれの論題について肯定・否定両方の立論や反論を作成する形で準備を進めます。

なお、ディベートのルールや方法を説明する際には、英語表現の教科書を併用します。これは、英語表現で英語によるディベートが取り上げられていますので、日本語に続いて英語でもディベートを行うことを考慮したものです。従って、試合の方法などは原則として英語表現の教科書に合わせます。

下記が試合の進行です。ディベート甲子園などの本格的ディベートとは違い、質疑応答を行わないなどかなり簡略化してありますが、これも英語表現の教科書に合わせたものです。



次ページの図が教室内の配置図です。3人1チームを原則として15チームを作り、3チームを1グループとして、グループ内で対戦します。例えば、第1試合はAチームとBチームが対戦し、Cチームがジャッジと進行を担当する、という形で、全チームが2試合行い、1試合はジャッジを行うようにしてあります。

以上のように、全員が日本語でのディベートを体験してから、英語でのディベートに取り組み、ディベートのやり方に慣れることを目指します。これは、GCPで実施する人権ディベートの準備ともなっています。

C) 評価

評価の対象は、毎回の授業の課題への取り組みと、振り返り記入になります。

作文課題の場合は3～5つの評価項目を立て、それぞれ1～5点で採点しました。評価項目は、作文を書く目的に従って変えています。課題によっては、生徒に相互採点もさせます。相互採点は、ルーブリックに基づいて行います。互いに評価と添削を繰り返すことで、評価のポイントが強く認識され、結果として自身の文章力の向上にもつながっています。

以下に、1年生の授業で、課題作文を書かせる前に生徒に見せる「評価のポイント」のスライドと添削後の作文課題、2年生の課題作文における評価ルーブリックを示します。

作文課題の評価

★A～Dの項目ごとに各2点満点

A: パラグラフ形式で文章が書けているか。
▼TS・SS・CSがある。冒頭1字下げている。途中で改行していない。

B: 条件が守られているか
▼理由が2つある。

C: 主語・述語・目的語の抜け落ちがないか。
▼主語・述語・目的語の抜け落ちがあると減点。

D: 授業メモ・振り返りがしっかり書かれているか。

※その他の注意点: 誤字脱字。文体の統一(常体・敬体)。「なので」。

作文課題の評価

★A～Cの項目各2点、D項目3点、合計9点満点

A: パラグラフで書けている。CSがTSとまったく同じでない。

B: 「まず・最初に」などの副詞を使い、1つめの性格・特徴について、読み手が納得する内容を書けている。
(文として意味が分かる。特徴を裏付ける例が適切である)

C: 「次に・また」などの副詞を使い、2つめの性格・特徴について、読み手が納得する内容を書けている。
(文として意味が分かる。特徴を裏付ける例が適切である)

D: マッピングがすべて埋まっている。

「道案内」の課題の評価

★A: 2点、B: 3点、C: 5点、D: 2点の評価

A: ①最初に何の説明か述べている。②締め言葉がある。

B: 全体の情報(①距離②時間③交通手段)を述べている。

C: 部分の情報を抜け落とすことなく説明している。

D: 左側下部の「今日学んだ中で一番大事だと思ったこと」と「その理由」がしっかり書かれている。
※問いに対応していない記述(例えば「難しいと思った」等の感想)は減点。

「ピザトースト作り方」の課題の評価

★A: 2点、B～D: 3点の評価

A: ①最初に何の説明か述べている。②締め言葉がある。

B: 情報を整理分類し、ラベリングをしている。
※整理分類ができていない or 分類が間違えてる -1
※「道具」「材料」「作り方」のラベリングが1つないごとに -1

C: 副詞を活用し、時間的秩序に則って説明ができている。
※手順が違う -1、日本語としておかしい -1

D: 「メモ」「課題1」「課題2(1)」がしっかり書かれている。

私は二十四時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成です。理由は二つあります。一つ目はコンビニエンスストアは地域の安全を守る役割も担っているからです。私達や登下校をしている児童が不審な人物に追われた際に逃げ込み助けを求めることが出来ます。二つ目は夜遅くまで運転をしている人が休息のために立ち寄れることです。運転手がきちんと休息を取るとは、疲れや眠気による事故を防ぐことにもつながります。

よ。て、私は二十四時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成です。

A	5	4	3	2	1
B	5	4	3	2	1
C	5	4	3	2	1
D	5	4	3	2	1
E	5	4	3	2	1
計			10	10	

私は、高校の部活動を廃止すべきだという意見に反対だ。まず、部活動は団体での協調性が育まれると思うからだ。部活動は先輩や後輩、同期との団体行動であるため、協調性が育まれる。また、私たちが信賴のできる最高の友人を作ることで、かえりからだ。たせば、私たちが、毎日のように交わし、戦い、私たちが、毎日のかうた。戦いは、信賴のできる友人が、高次の部活動を廃止するべきだという意見に反対だ。

◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したこと

作業はいつも自分たちでやるが、先生始めのほうでそれを絶対にしてほしいという意見は、今日初めて知った。構想を練る時間をはかるといい。

A	5	4	3	2	1
B	5	4	3	2	1
C	5	4	3	2	1
D	5	4	3	2	1
E	5	4	3	2	1
計			14	14	

【描写文】「手提げバッグの描写」 (200字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記a)～c)の全てにおいて優れている。 a)TSの内容が明快である。 b)TSとSSが論理的につながっている。 c)CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てが守られているが、どれか1つに工夫が必要である。 〈例〉TSがやや分かりにくい。	a)～c)の全てが守られているが、2つ以上に工夫が必要である。 〈例〉TSとCSが全く同じ。TSとSSのつながりにやや問題がある。	パラグラフの構成についての理解不足。 〈例〉TSとCSの内容が変わっている。TSとSSの順序が入れ替わっている。	パラグラフの構成が理解できていない。 〈例〉TS・SS・CSのどれかが欠落している。途中で改行している。
B	内容	下記イ)～ハ)の全てにおいて優れている。 イ)描写すべき情報が分類整理されている。 ロ)「空間配列」のルールに従って記述されている。 ハ)個々の情報の表現が適切で分かりやすい。	イ)～ハ)のどれか1つが不十分である。	イ)～ハ)のどれか2つが不十分である。	イ)～ハ)の3つとも不十分である。	課題を理解していない。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体の統一 II 主語の挿入 III 接続語が適切 IV 句読点が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある

【分析型パラグラフ】「手のなかのすずめ」12ページの分析 (400字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記 a)～c) の全てにおいて優れている a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) TSとSS、SSとCSの内容が整合している。 c) CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てがほぼできているが、更に工夫が必要である。 〈例〉TSの内容がわかりづらい。TSとSS、SSとCSのつながりが分かりづらい。TSとCSの表現が同じ。 など	a)～c)のどれか1項目ができている。	a)～c)のどれか2項目ができている。	a)～c)が3項目ともできていない。または、下記のどれかにはあてはまる。 〈例〉途中で改行している。TS・SS・CSのどれかが欠落している。TSやCSが「私は～思う。」などとなっている。
B	内容	下記 イ)～ニ) の全てにおいて優れている イ) 解釈の根拠が明示されている。 ロ) 解釈と根拠の関係が分かりやすく書かれている。 ハ) SSの配列が「大から小へ」の原則に従っている。 ニ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	イ)～ニ)のどれか1項目が不十分である。	イ)～ニ)のどれか2項目が不十分である。	イ)～ニ)のどれか3項目が不十分である。	イ)～ニ)の4項目全てが不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体の統一 II 主語の挿入 III 接続語が適切 IV 句読点が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1項目に不備がある	ルールのうち2項目に不備がある	ルールのうち3項目に不備がある	ルールのうち4項目以上に不備がある

【意見型パラグラフ】ディベートのまとめ (400字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記 a) ~ b) の両方において優れている。 a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) CSをTSと別の表現でまとめている。	a) ~ b) の両方がほぼできているが、更に工夫が必要である。 (例) TSの内容がわかりづらい。 TSとSS、SSとCSのつながりがわかりづらい。 TSとSSの表現がほとんど同じ。など	a) ~ b) のどちらか1つができている。	a) ~ b) の両方ができていない。	途中で改行している。
B	内容	下記 ① ~ ② の全てにおいて優れている。 ① TSの意見の理由として、SSの内容が適切である。 ② 各理由に対する反論が適切である。 ハ) 反論に対する反駁が適切である。 ② SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	① ~ ② のどれか1つが不十分である。	① ~ ② のどれか2つが不十分である。	① ~ ② のどれか3つが不十分である。	① ~ ② が4つとも不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている Ⅰ 文体(常体)の統一 Ⅱ 主語の挿入 Ⅲ 句読点が適切 Ⅳ 用語が適切 Ⅴ 誤字・脱字がない Ⅵ 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある

毎回の授業において、ペアやグループで話し合った内容をメモし、授業の最後の5分で、「今日の授業で自分が学んだこと」や、自分が考えたり気づいたりした内容を記録させます。学んだことを自分で意識化できているか・学んだことを活かそうと意識できているかどうかチェックします。

授業プリントはファイリングさせ、いつでも学びの履歴を見返せるようにします。他の授業や行事の時に、このファイルを見返しながら文章を書いたり、説明の準備をしたりする生徒の姿も見られました。まさに実生活に活かせるポートフォリオの作成ができたと思います。

以下に生徒の振り返りの例を示します。

①今日の授業で大事ななと思ったこと・なるほどと思ったこと

「日本式対話の特殊性」はとも承得できる内容だった。日頃自分が日本語に対して思っていることだったので。今までなんとなく使っていた「結論を先に言うや「テンパード」などの技術をより詳しく知ることができたためだった。
選択肢のある質問に対して「Aが嫌いだからBが好ま」は使いがちなので気づいていなかった。

①今日の授業で大事ななと思ったこと・なるほどと思ったこと

母国語との違いを覚えること、「相手に伝える」ということを忘れないのが大切だなと思いました。
結局英語でも日本語でも言いたいことを伝えるにはそれぞれの語彙が必要だなと思います。
それにその通りです!

◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したいこと

・復唱する時に、英語でも日本語でも主語が抜けてしまうことが多かった→以前からあったので、次回からも改善させていく必要がある。
(特に、引用するとき抜ける) ↑

・掘り下げる瞬間の感覚は不思議な感じがする。
かっこいいと思う。
すばらしい。



◎今日の授業で学んだこと・感じたこと・気づいたこと・質問したいこと ^{本当にその通り!}

掘り下げる質問は、前の答えをしっかりと聞いておかないと掘り下げることもできないことが分かった。
英語の2往復の質問は日本語では考えられるけれど、英語にできないか、たうで、どうすれば簡単にできるのか知りたい。

ここではとにかく「サンプルにする」ことに集中して下され。日本語で上手く言えなかったら、英語でも少しづつ言えるようになります。



◎今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと

・順をおて説明することの大切さとするところによる分かりやすさが実感できたのでこれから実際に気をつけて説明したいと思いました。また、副詞も今回の授業で考えて使えなるといけないなと思いました。

◎今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと

1回1回授業を積み重ねるとラベリング、大きい情報から小さい情報へ、段階的に説明するなど新しい情報が入ってくるので大変だと思ったり、どんな説明の技術が面白いような気がしたか?、その調子で人に分かりやすい説明をする技術の向上を促すという。

すばらしい!

◎振り返り(今日の授業で学んだこと・気づいたこと・質問したいこと)

・おれ「空間的秩序」という言葉を意識したことにはなかったけど、結構使っている場面もあったので、もっと自然に使いこなせるようにしていきたい。

・国旗の説明がすごい難しかったけど、この説明を通して、言葉だけで図をイメージさせる大切さ、大変さを学ぶことができてよかった。

D) 成果および今後の課題

成果

①生徒アンケート

一昨年度末、昨年度末と同じ項目で、今年度末も1、2年生全員にアンケートをとりました。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、昨年同様95%以上の生徒がそれらの技術の重要性を実感していました。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生も、85%の生徒が、それらの技術の重要性を実感していました。4年間、「言語技術」の授業の進め方・内容を振り返り、改善を繰り返してきた結果、生徒たちの学びの実感も安定して高い状態を維持できています。

また、「言語技術で学んだことを英語で活用できた」と回答した生徒は1年生で80%と、前年より5%ほど下がりましたが、これは「英語を使用する際に、自分の意見などに理由をつけるよう意識するようになった」(91%)や「英語と日本語の構造の相違点や共通点を意識するようになった」(87%)などの具体的な活動での高い数値が示すように、生徒の中で、無意識ながら英語と日本語の往還が行われたためと考えられます。2年生も昨年に引き続き、85%が「活用できた」と回答しています。活用という点においても、この4年間の取り組みによって、安定度が出てきたと思われれます。

②英検スコアにおけるライティング得点の占める割合

上記①の生徒アンケートにおいて、「英語で活用できた」という回答が上昇したアンケート結果は、実際の外部試験でも成果を出しています。本校では、2019年度第3回目の英検2級を、高校2年次の総合クラス(「言語技術」の授業を受けているクラス)のほぼ全員が受検することになっていますが、リーディング・リスニング・ライティングの3技能のCSEスコアの平均は、昨年度は1463と、英語基礎力の高かった昨年度の2年生より33ポイントの減少となった。しかし、3技能のCSEスコアの平均におけるライティング平均の得点の占める割合は、一昨年度より一貫して25%を維持し続けている。これは、安定した英語ライティング力が見られると感えられることから、「言語技術」教育の成果と言えます。

③ポートフォリオの作成

生徒には昨年同様、毎回の授業で「学んだこと」等の振り返りをさせ、記録・ファイリングさせました。このファイルを見返しながら、身につけた技術を活かそうとする生徒の姿が見られ、実際に活かせるポートフォリオの作成ができました。

④小中高一貫プログラムの作成

昨年度から始まった、小中高の「言語技術」担当者による「言語技術」推進委員会を、今年度は定例で月1回実施し、小中高の「言語技術」教育の内容・接続方法について協議を進め、各校の「言語技術」教育を推進しました。

⑤ファイナル・プロジェクトにおける小論文作成指導

昨年度から開始した、3年次での週1時間の小論文作成指導(GCPファイナル・プロジェク

トの最終レポート作成と連動)を、昨年度の反省をもとに授業内容を精選し、進め方を改善した結果、さらに質の高い小論文が見られるようになりました。

⑥キャリア教育と連動した作文指導

1年次では、言語技術で学んだ「作文」の技術を応用して、自分自身の進路や学校生活についての考えをパーソナル・エッセイとして書かせました。このパーソナル・エッセイは、本校が10年以上にわたって伝統的に取り組んでいるものです。ほとんどの生徒が1000字～1200字で、形式の整ったエッセイを書きあげました。

2年次では、1年次のパーソナル・エッセイを発展させて、大学入試を意識した「志望理由書」の作成に取り組みました。生徒たちは、2年間の言語技術の学習をとおして、パラグラフ・ライティングの技術がかなり定着していますので、多くの生徒が論理的にもしっかりと文章を書きあげました。

⑦教員自身の言語技術トレーニング

一昨年、昨年に引き続き、「言語技術」の授業に担任教員が毎回参加しました。今年度で、ほぼ全教員が「言語技術」の授業を受けたことにより、学校全体として「言語技術」を活用していく態勢が整いました。

今後の課題

①創価中学校・東京創価小学校での「言語技術」教育の浸透のため、小中高「言語技術」推進委員会を引き続き定例で開催し、協議を重ねてまいります。

②ほぼ全教員が「言語技術」の授業を学び終わったことを受け、学校全体で「言語技術」が活用される体制をさらに強化していきたいと思えます。「言語技術」がすべての学びの土台となるよう、各教科との連携も密にして、生徒が活用する機会を増やし、活用事例を蓄積させ、誰でも活用できるようなシステムを作ってまいります。

③3年次GCPファイナル・プロジェクトの、最終レポート作成指導において、国語科・英語科・地歴公民科が連携した合教科型の取り組みの2年目が終わりました。今年度の反省をもとに、内容・進め方を再検討し、より効果的な授業を実施してまいります。

④保護者の授業参観後の感想では、「社会でとても役に立つ内容」「自分も中学・高校時代にこの授業を受けたかった」といった内容のものが多数ありました。また、オープンキャンパスや、外部対象の教育公開講座にて、多数の来校者を相手に模擬授業を実施しました。参加者のアンケートには「社会で必ず必要とされる力であり、このようなことが学校で学べるのがうらやましい」といった感想が多数ありました。「言語技術」の取り組みを、より広く知ってもらうため、ホームページでの毎回の授業内容の発信を強化してまいります。

⑤より効果的な指導・より効率的な評価のために、ルーブリックや、自己・相互による評価法の開発をさらに推進いたします。

5. フィールドワーク

A) カリフォルニア

- 期間：11月1日（金）～11月7日（木）（1～3年生 14名）
- 場所：アメリカ・カリフォルニア州
- 主な訪問地：南カリフォルニア大学、アメリカ創価大学、インターナショナルポリテクニクス高校、ノードホフ高校、ゲティ美術館、ロナルド・レーガン大統領図書館
- 目的 核廃絶問題と貧困問題をテーマに、カリフォルニアにてフィールドワークを実施しました。現地・高校生や大学生の前でテーマごとにプレゼンテーションと意見交換をし、さらに一流識者の講義を受講しました。

■ 行程

● 1日目

南カリフォルニア大学を訪問し、アメリカ創価大学卒業生のガイドでキャンパスツアーを実施。またアメリカの大学事情について、英語で懇談会を行いました。

● 2日目

地元 iPOLY 高校で行われた平和フォーラムでは、同校生徒と核廃絶と貧困の問題について発表しあったあと、グループに分かれて、自分たちで設定した社会課題に高校生としてどのように関わって行くかを議論し、提案を発表しあいました。初めて会う仲間と真剣に討議して、日米共同作業によるプレゼンテーション作成作業が行われました。いずれのグループも発表・議論ともにしっかりとした内容で、生徒たちの成長を実感できるものとなりました。

◆ 生徒感想

「フォーラムを通して、アメリカの高校生との文化の違いを、肌身で感じる事ができました。時々、その文化の違いに圧倒されて、自分の言いたいことが言えなかったり、ごまかしてしまうことがあったので、明日からはどんな時でも挑戦の精神で失敗を恐れずに体当たりしていきたいと思います。」

「今日アメリカの高校生と話したことで相手も人間であり、文化交流が大切であることを実感できました。今度は相手校の建学の精神や学校行事を知れたり、基本情報や歴史を学びながら、より深い対話を目指していこうと思います。」



共同制作したプレゼンスライド

● 3日目

到着2日前まで続いていた、ロサンゼルス近郊の山火事のため閉鎖となっていた、世界的名作を収めるゲティ美術館と、冷戦とアメリカ政治について学べるロナルド・レーガン大統領図書館は、見学は難しい見込みでした。しかし到着後より営業が再開され、一流の作品や、冷戦の歴史について深く学べる機会となりました。結果的に、休日にも関わらず、人も少ないのでじっくりと見学し、学習する事ができました。

◆ 生徒感想

「レーガン図書館を訪問して、1つの歴史的事実でもたくさんの見え方があるということ学びました。私たちが普段学習している事も、違う視点から考えると全く違う発見や考えが浮かんでくることがあります。このように、日本からの視点だけではなく、それ以外の国の立場になって問題を見つめ直すことはとても大切であると気づくことができました。この発見を今後の授業などで生かしていきたいと思います。」

「中学生時代に学んだ、印象派のモネや、空を大きく描くシスレーなどの画家の絵をゲティ美術館で見ることができ、芸術の楽しさに触れることができました。美術館や博物館で展示を見て回る時に、もう少し英語の文章を読んで置きたかったということが反省点です。このフィールドワークでの経験を活かし、このような場面でも積極的に挑戦していきたいと思います。」

● 4日目

午前中はベンチュラ市にあるノードホフ高校を訪問し、同校で1,2時間目に行われたアメリカ史と経済学の授業に参加させていただきました。日米の戦争史観の比較や、高校生の日常について、それぞれが3人の現地高校生相手に意見交換をしました。午後にはアメリカ創価大学を訪問。イアン・リード教授より、「ブラジルの多文化社会」の特別講義を受けた後、ハブキ学長と懇談していただきました。

◆ 生徒感想

「ノードホフ高校でのディスカッションは、はじめとても緊張していましたが、生徒の皆さんがとても親切にしてくださり、有意義で楽しい時間を過ごすことができました。アメリカの文化について学ぶことができただけでなく、日本の文化を伝えることもできました。また、国の文化の差異を超えた人との出会いの素晴らしさを感じることができました。」



● 5日目

実質の最終日となりました。午前中はアメリカ創価大学(SUA)のキャンパスツアーから開始。午後には核廃絶(オガタ准教授)と貧困(ヘフロン教授)のテーマごと、グループにわかれて、教授の前で発表と討論を行ないました。ゼミ形式の本物のリベラルアーツの授業を体験することができました。夕方からはSUA生との交流会で「多文化主義の実践について」積極的に議論する姿に、短期間での成長を感じ、感動しました。



◆ 生徒感想

「SUA生との交流に触発をされ、さらに語学を学ばねばと痛感しました。今はただ英語に集中して、大学入学後は、第2、第3外国語をいよいよ学んで、より多くの人と意思疎通を図り、人脈・友情の輪を世界に広げていきます。今回『娯楽』としてではなく『学び』としてアメリカに来たからこそ、本当にたくさんの方のことに関心を持ち、視野・観点を広げ、友達も作ることができました。このような貴重な経験を帰国したら周りの人達に語り、さらに全てに五感を研ぎ澄ましていきます。」

フィールドワークの流れ(事前・事後指導)

日付	内容
6月15日(土)	1次試験(英語)
6月24日(月)	2次試験(英語グループディスカッション)
7月10日(水)	合格者指導会
夏季休業中	オンラインにて3つの課題提出 ・1) 核兵器禁止条約の成立について ・2) 「SDGs 目標 1 あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」の現状と日本の貢献について ・3) 日本の貧困問題についての4つのネット記事を読んで(英語)
9月10日(火)	第1回学習会 テーマ別検討会 英語討議
9月18日(水)	第2回学習会 Relative Poverty (英語)
10月2日(水)	第3回学習会 Nuclear Disarmament(英語)
10月22日(火)	第4回学習会 Gender 貧困・核問題別発表練習会
10月28日(月)	最終リハーサル
10月30日(水)	壮行会 プレゼン完成
11月11日(月)	事後指導会

B) 岩手

- 期 間 7月23日～25日の3日間
- 主な訪問地 岩手県葛巻町・陸前高田市
- 参加者 高校1年生5名 高校2年生4名 高校3年生3名 計12名
- 目 的

「環境問題」をテーマに、環境先進自治体である岩手県葛巻町を訪れ、クリーンエネルギー諸施設の見学や循環型農業を実感的に学ぶ。また、8年前の3.11東日本大震災の際に大きな津波被害を受けた、岩手県陸前高田市を訪れ、自然と共生する復興の様子を学ぶ。

■ 事前学習・準備

環境問題に関するポスターセッション(グループ毎にポスターを作成)

(クリーンエネルギー、食糧問題と葛巻町、葛巻町について、地球温暖化の現状)

陸前高田市についての調査・ポスターセッション(グループ毎にポスターを作成)

(防災・復興、産業・文化、ノーマライゼーションという言葉の知らない町づくり)

現地でのインタビューのための質問シートの作成

■ 行程

■ 1日目

くずまき高原牧場(葛巻町)へ訪問

講義:「循環型酪農経営について」

体験学習:乳牛の世話、原木シイタケ栽培管理体験



◆ 生徒感想

「私たち人間が普段何気なく食べているお肉は、動物からいただいた、かけがえのない命であるということに改めて気づかされました。この経験を忘れることなく、食べているもの全てに感謝を持ちながら『生命の尊厳』という精神を体現していきます。」

■ 2日目

(午前)くずまき高原牧場

講義:「クリーンエネルギーの取り組みについて」

見学:上外川風力発電施設

(午後)陸前高田市に移動

市内見学:追悼施設、復興まちづくり情報館、
防潮堤等

ポスター発表(講評;陸前高田市参与 村上清さん)

交流:姉妹都市交流で滞在中のクレセントシティ(アメリカ)の方々との交流、
陸前高田市在住の方々との懇談会



◆ 生徒感想

「陸前高田市では今でも復興工事が行われていました。お会いした地元の方々、明るく強く復興に向かっていることを感じました。家族や友人の死を乗り越えて復興への取り組みを進めてきた8年間は、辛く苦しいものだったと思います。東日本大震災を乗り越え、前進していく姿に勇気をい

いただきました。私も自分の夢に向かって前進しようと思います。」

■ 3日目

陸前高田市戸羽市長との懇談

陸前高田市市内見学

(箱根山展望台、伝承館等)

◆ 生徒感想

「戸羽市長のお話で、特に印象的だったのが、『SDGsとは当たり前の項目であり、この当たり前のことを、当たり前にするのが非常に難しい』ということです。当たり前のことを当たり前にするのが社会の形成に少しでも力になりたいと思いました。」



■ 研修内容をまとめたポスター

葛巻町 2019 7/23.24

～くずまき高原牧場～

《特徴》
 ☆東北一の牧場
 ☆豊富な乳製品

《施設紹介》
 ☆くずまき交流館「プラトール」
 ☆シユクランハウス
 ☆焼肉ハウス

～乳牛餌やり体験～
 ・エサ(草)の選別、ほぐす
 ・1つの牛舎に4頭
 →まんべんなく全ての牛に
 ★牛は塩分を固形の岩塩から少しずつ舐めて補う

～シイタケ栽培体験～
 ・原木の移動作業
 ・シイタケの収穫体験 1人ひとつシイタケを収穫
 ・普段は御婦人2人で作業している

～葛巻町とクリーンエネルギー～

風力発電所の見学
 ・16,000世帯分のエネルギーを作る風力発電
 ・高さ60m、ブレードの長さ33m
 ・総出力 21,000kw
 ・ブレードの中は空洞
 ・日本初の標高1,000m以上に設置の風車

鈴口さんのお話
 ・再生エネルギーの活用による「安心、安全なまちづくり」
 ・電力自給率約160%
 (総発電量:約5,700万kWh、電気消費量:約3,500万kWh)

命の尊さと地域活性化への意欲を肌で感じ、感謝の思いが私たちの中に強く残った。また、環境を守り自然とともに生きていくことの大切さを学び、後世に伝えていこうという強い決意となった。

陸前高田市 2019 7/24.25

被害状況

- 死者数 1,556人
- 行方不明者数 203人
- 家屋倒壊数 4,046棟
- 津波痕跡高 最大18.3m

2万本の松から生き残った奇跡の一本松
 津波の被害を受けた気仙中学校
 新しくできた堤防から見た海

復興への取り組み

陸前高田市とクレセントシティ

◎陸前高田市の中心街にあるアパセットかたがある地域の土地は、通常の土地より10mかさ上げしている

クレセントから返却された船「かもめ」

ノーマライゼーション

ビルド・バック・ベター
 理想の街
 =多様な人が差別なく互いに助け合いながら暮らすことがごく自然である

市立図書館 ～バリアフリー化～
 ・欄間の幅を広く
 ・文字の大きい本
 ・点字の仕様の本

まとめ・感想

私たちは、さまざまな事前学習を重ね、陸前高田という地を訪れました。実際の現地での学びは何よりも濃いものでした。皆さんにも、これをきっかけに陸前高田に興味を持っていただき、機会があれば、ぜひ陸前高田を訪れてみてください。

C) 沖縄

■ 目的

唯一の地上戦であった沖縄戦の事実について、博物館見学や壕内部の見学、戦争体験聴講を通して学ぶ。さらに、沖縄県立那覇国際高校の生徒とテーマについて意見交換し、交流を深める。

■ 期間 11月7日(木)～9日(土) 2泊3日

■ 参加者 生徒12名(男子4名、女子8名)・引率教職員2名

■ 行程・感想

<1日目>

初日、参加した12名は、羽田空港から空路、沖縄県・那覇空港に降り立ち、ひめゆり平和祈念資料館で、沖縄県立那覇国際高等学校(SGH校)の生徒10名と合流し、ひめゆり学徒隊について学びました。その後、沖縄県平和祈念資料館で常設展示を見学。同館会議室にて、両校交流会(ピースフォーラム)を開催し、「平和の礎」にて思い出深い記念撮影や交流のひと時を設けることができました。



◆ <生徒感想>

「戦時中の教育や状況、酷い辛い現実を詳しく知ることができ、また亡くなったひめゆり学徒隊の1人1人の写真と紹介を見たとき、本当に言葉では表せないほどの悲しい気持ちになりました。これを私たちのもっと後世にも伝えていかなければならないと思いました。今日、沖縄に来て知ることができてよかったと思える学びのある1日でした。」

「今までの戦争への考えは、教科書や動画で得たもので浅はかなものでしたが、戦時中の展示を見て自分の考えが変わりました。また、那覇国際高校と、『平和』のために自分たちは何ができるかを討論し、『他人へのうらやみ、嫉みの廃絶』だと結論付けました。そのためには、自分の心が強なくてははいけません。自分にしかできないこと探し、相手を尊重する。このこと大切にしていきたいと決意しました。」

<2日目>

第2日目の午前中は、沖縄戦戦没者の遺骨収集事業に取り組んでいるNPO法人ガマフヤー(具志堅隆松代表)の遺骨発掘ボランティア作業を体験しました。

糸満市山城付近のガマの中にも入れてもらい実物の遺骨や遺品も拝見しました。午後には、沖縄研修道場を訪問しました。総県長より、付属展示室を案内頂き、創立者のご発案によってミサイル基地が「平和の要塞」と生まれ変わった意義を学園生へ丹念に説明してくださいました。帰りの道中では、嘉手納基地を一望できる道の駅「かでな」に立ち寄り、沖縄と米軍基地の現状を肌で感じる機会となりました。



◆ <生徒感想>

「沖縄研修道場の見学では、かつてはそこに国を滅ぼす威力のある核兵器があったのだと思うと本当に怖いと思いました。そして、創立者が戦争を起こさないために外国の多くの識者と対話を重ねて、平和を築いてくださっていることは本当にすごいことだと改めて実感しました。今日も本当に多くのことを学び、充実した時間を過ごすことが出来ました。」

「遺骨収集のボランティアでは様々なことを教わりました。地域を越えて、国境を越えて人々と意思疎通ができるような社会のために、まずは目の前の勉学を頑張りたいと思いました。沖縄研修道場では、戦争体験者の方に描いて頂いたという絵が印象に残りました。もう二度とこんな悲惨な戦争が起こるようなことはあってはならない、という事を改めて痛感した1日でした。」

「『他人を殺すこと、他人に殺されること、そして自分を殺してしまうことを絶対に許してはならない』という具志堅さんの言葉は、重みがあって胸に刺さりました。遺骨収集を体験してみると、実際はなかなか見つかりませんでした。収集には長い時間をかけて、何度も足を運ぶ必要があるとわかりました。遙か昔に行われた戦争ではないことを心から実感できました。』

<3日目>

最終日となった3日目は、沖縄国際平和会館を訪問し、株式会社ぬちまーすの高安藤副社長によるご講演を沖縄県立那覇国際高校の生徒代表と共に拝聴しました。在沖米国総領事館で広報文化担当補佐官をされていた経験等を通して、グローバル人材に成長するための方途を語ってくださいました。午後には、総沖縄長が特別展示室を丁寧にご案内くださいました。創立者と沖縄の絆、そして昭和39年12月2日の『人間革命』執筆開始の模様をはじめ、創立者の数々のエピソードを伺いました。

すべての行程を終え、那覇空港から東京に帰京しました。無事故・大成功でフィールドワークの全行程を終えることができました。



◆ <生徒感想>

「セミナーで高安さんは、今『ひと踏ん張り』をすれば将来色々なことを達成できるということを教えてくださいました。将来のために今しかできない頑張った経験づくりに励みます。午後は恩師記念室を見学しました。創立者の姿に、目の前の人を励ますことは容易なことではないと感じました。この3日間、たくさんの人に励まされたので、次は私が誰かを励ましていきたいです。」（1年 女子）

「セミナーでは、私たち高校生に英語の勉強方法や、挑戦すること、今頑張ること、ひと踏ん張りした経験を持つことが大事だと教えて頂きました。これは負けじ魂に通ずる部分があると思いました。この3日間、沖縄戦のことをよく学んだので、創立者の『人間革命』の冒頭を肌身で感じる事ができました。」

「高安さんのセミナーを受けさせて頂き、いま頑張る大切さ、勉強する重要さなど、精神面でも役に立つことをたくさん教えて頂きました。私は将来、教育の分野に携わりたいので、今日、恩師記念室で三代会長の師弟を学び、創価の教育理念について自分から調べてみようと思いました。たくさんの決意が生まれたフィールドワークでした。」

D) JICA 地球ひろば(市ヶ谷)

- 期間 8月31日(金)
- 参加者 28名(高校1年生28名)
- 目的

「国際理解」をテーマに、JICA 地球ひろばを訪れ、青年海外協力隊の経験者による施設案内や、レクチャーを通して、世界の実情を体験的に学び、その解決の方途を探る。また、テーマディスカッションを通して、世界の諸問題に対する関心・理解を深め、国際協力のあり方を見つめ、また将来の進路選択の一助とする。

■ 行程

フィールドワーク当日、市ヶ谷駅に集合し、10分程度歩いて、JICA 地球ひろばに行きました。合計3つある研修のうち、最初は、青年海外協力隊としてタイで日本語教育をしていた方の体験談を伺いました。体験談では、貧困国で暮らす人々が私たちの想像を超えるような環境下で勉強をしていることや、文化の違いを乗り越える国際ボランティアの大変さを学びました。

その後、2つ目の研修である、地球ひろばの施設をスタッフの方にご案内いただき見学しました。施設見学では、充実した体験型の展示により、多種多様な地球規模課題と「持続可

能な開発目標 (SDGs)」との関連性を学ぶことができました。また、昼食にエスニックビュッフェとして海外の素材を使った料理を味わいました。

昼食を挟み3つ目の体験型のワークショップを実施しました。ワークショップでは、地球ひろば独自で開発された「持続可能な開発目標 (SDGs)」のカードゲームを通じて学びを深めました。目標を達成するためには、自分のグループのことだけやっていたら良いのではなく、周りのグループとも協力しなくてはいけないことなど、体験的に実感することができました。実際の課題とゲームでの内容を比べると、各国はただ一つの課題だけでなく、複合的に絡まった課題解決の難しさの中で、国際支援をしていることを学びました。また世界のさまざまな課題や SDGs の中で何を優先して取り組んでいくことが大切なのかを考え、グループごとに発表する中で、いろいろな視点で考えることの大切さを学びました。



◆ 生徒感想

「一番心に残っているのは、『日本に生まれて安全にきちんとした教育を受けられるのは、宝くじよりも低い確率なんだよ』という青年海外協力隊の方の言葉です。夢の実現に向けて思い切り勉強できることへの感謝を、世界の恵まれない子供たちのためにも絶対に忘れてはならないと思いました。」



「ワークショップでは、みんなで SDGs の 17 のゴールについて話し合い、深められたので良かったです。今回学んだことを、今後の進路や学校での活動に取り入れて、少しでも多くの方が平和で笑顔で過ごせる地球を皆で作っていきたいです。」

F) 国立ハンセン病資料館(東村山)

- 期間 2/16(日)
- 参加者 30名 (高校2年生30名 男子11名 女子19名)
- 目的

国立ハンセン病資料館並びに多摩全生園を訪れ、ハンセン病回復者の方との交流を通して、ハンセン病の歴史的背景を学ぶとともに、人権を踏みにじられてきた体験者の痛みに触れ、自身の生き方や人権について考え、深める機会とする。

■ 事前学習

参加対象の2学年に対して 12月12日の LHR で全員に語り部「佐川修さん」の記録映像を視聴し、今回のフィールドワークの意義を確認した。今回は、30名のエントリーがあった。

参加予定者とは3回事前学習会を行なった。1回目は学習冊子を読んだ上で法務局の人権学習ビデオ「家族で考えるハンセン病」の視聴と“差別がなくなるためにはどのようなことが必要なのか”をテーマにしたグループディスカッション。2回目は「ひとりの人間として～ハンセン病訴訟「控訴断念」への道のり～」のドキュメンタリー映像を視聴するとともにディスカッションを通して学び合った。3回目は「熊本地裁の裁判と宿泊拒否問題（一部）」を視聴しディスカッションを行い、ハンセン病に関する基礎知識を踏まえ、一人ひとりが現地でハンセン病回復者さんに伺いたいことを考えて当日を迎えた。

■ 行程

午前は、国立ハンセン病資料館の展示を見学し、日本におけるハンセン病の差別の歴史を学んだ。各地の療養所で実際に使われていた生活道具や患者さんがつくった詩や芸術作品を目の当たりし、出口の见えない隔離生活の厳しさとその中で生きる希望を持ち続けた患者さんたちの力強さに心が震えた。

昼食は、多摩全生園内の中央集会所にて頂いた。また、全生園の明日をともに考える会の代表である藤崎 美智子さんからのお話も頂くことができた。

午後は「ハンセン病回復者と話す会」と多摩全生園のフィールドワークに参加した。話す会でお話を伺った三人の回復者さんは、家族が差別を受けないように自分の故郷を離れ、療養所でつけた名前でも生活されていた。また、ハンセン病にかかったあとも差別を受ける中、故郷の友人との温かい交流があったことなどを知ることができた。回復者のかたは参加した生徒一人ひとりに明るい未来をつかっていってほしいとの期待を語ってくださった。回復者の方、一人ひとりにかけがえのない人生があったこと、それを踏みにじった差別が現実にここ日本で存在したのだということに大きな衝撃を受けた。差別に苦しみ続けてきた回復者さんの生の声に直接触れ、生き抜いてきた地を自分の足で歩く中で、生徒一人ひとりが人権という問題と深く向き合う時間となった。



◆ 【生徒感想】

「私は『無知であること』が人として一番残酷ではないかと思いました。今回の研修があるまで私はハンセン病のこと、回復者の方の事を何も知らずに生活してきました。私は将来、教育者として差別や偏見をなくしたいと考えています。創立者が言われている『誰一人置き去りにしない教育』を目指し、成長していきます。」

「ハンセン病に関する知識や人権問題について深く学べました。回復者の方との懇談では当時の偏見や差別のお話を伺い、事前学習だけでは感じる事のできない人権の大切さに気づくことができ、私の夢である弁護士になるための貴重な経験ができました。この体験を、まずは身のまわりの友人や家族に話していきます。」

「ハンセン病が社会から強く影響を受けた病であることや、時代の風潮に流された偏見や差別

により、多くの方が苦しめられてきたという歴史を学び、強い憤りと悲しみを何度も感じました。懇談会では体験を涙まじりに震える声でお話していただき、その姿にも胸がしめつけられました。辛い経験を話して下さった上に大きな期待をして下さる回復者の方の思いを胸に刻んでいきます。」

F) 国際連合大学(渋谷区)

■ 期間 12/3(火)

■ 参加者 13名(高校3年生)

■ 目的

国際連合大学(以下、国連大学)は、SDGs の全ての分野にて高い専門性を持ち、世界各地に研究所を有する。そのため、国連大学は地域の課題を解決する上でグローバルなネットワークとして重要な役割として機能している。今回は「国際貢献・国際パートナーシップ」をテーマに、ここに訪れ SDGs 達成の鍵である 17 番目のゴール「パートナーシップで目標を達成しよう」について、実際の活動経験者や研究者から、その現状と具体的な取り組みの話の伺い理解を深める。

■ 事前学習

出発前の事前学習として、国連大学と現地で講演を頂く地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)についてまとめたプリントを、参加者に配布しました。参加者には、プリントを読み込み、また QR コードからそれぞれの HP にアクセスして、興味がある取り組みや質問事項を整理して当日に臨みました。

12月3日に本校3年生の13名がSGHのフィールドワークとして国連大学を訪問しました。渋谷駅の新橋口前に集合し、徒歩10分程度の道のりを歩き、国連大学に行きました。

国連大学では、関西創価学園の卒業生でもある今井夏子氏(国連大学サステナビリティ高等研究所)に出迎えていただき、国連大学の図書館内にあるレクチャーコーナーに案内されました。最初の講義は、今井夏子氏が担当していただき、UNU(国連大学)が修士号と博士号を授与する大学院大学であること、UNUは、国連が持つ様々な機関の中で唯一日本に本部があること。また、この建物内にUNU-IAS(国連大学サステナビリティ高等研究所)があることを学びました。





今井夏子氏ご自身が関わった紛争地域の復興援助について体験を通して話して頂きました。参加生徒たちは、国連大学の概要と「人間の安全保障」のために国連大学が行政やNGOなどの機関と連携を取り組んで実施している取り組みを学ぶことが出来ました。

次に、UNU-IAS が環境省と共同で提唱した日本発の SATOYAMA イニシアチブについて担当者からのレクチャーしていただき、地球規模課題に繋がる地域の課題に対して、地域や行政、企業、研究機関、NGO などの団体が連携しながら解決していく流れを、実際にあった事例を踏まえながら紹介して頂きとても充実した時間になりました。

また、国連大学内の図書館では、国際連盟の時代から国連で採択された議決に関する製本された資料なども手にとって見る事が出来ました。

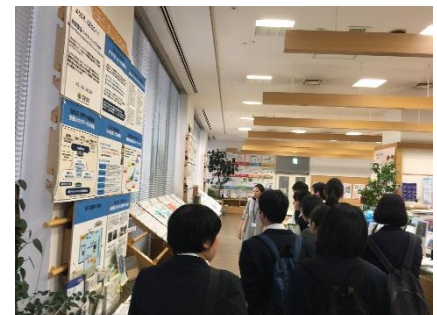
滞在時間2時間という短い時間の中で、漠然としたイメージがあった「パートナーシップ」の在り方が、具体的な事案を聞く中でより明確になりました。



◆ 生徒感想

「私は気候変動に興味があるのですが、今までは地球温暖化を止めるためにはどうしたら良いのかということばかり考えていましたが、洪水などによるインフラの崩壊などを防ぐための防災の大切さを知り、これからは地球温暖化を止めるための解決策と共に、地球温暖化に対応できる社会をつくるにはどうしたら良いかということも考えていきたいと思います。」

「国連大学のテーマにある持続可能な社会をつくるために未来と現在にニーズを満たす政策を打ち出すために、直接つながるような学びをしていくというところにとっても魅力を感じました。私は、アフリカに教育の面で支援していきたいと思っているので大学で教育についてとことん学び、国連大学のような将来に直接繋がる場所で学んでいきたいです。」



6. グローバルセミナー

■ 目的

国内外で活躍される有識者・学術者・本校卒業生をお迎えし、講演会・懇談会を開催することによって、生徒がグローバル人材へと成長するための触発の機会とする。一貫校である創価中学校にも広く公開する。

■ 実施

2019年度は9カ国15組のゲストスピーカーをお迎えし、グローバルセミナーを開催した。(詳細は一覧表を参照)その中から、以下3つのグローバルセミナーについて概要等を報告することとする。

No.	来校日	国名	来校者	役職等
1	2019/05/15(水)	マカオ	シンディ・ラム (Dr. Cindy LAM)	マカオ大学国際部ディレクター
2	2019/05/30(木)	アメリカ	イザベル・ヌニェス (Dr. Isabel Nunez)	バデュー大学フォートウェイン校教育学科長・教授
3	2019/06/04(火)	タイ	チュラロンコン大学教育学部教員ご一行	
4	2019/06/14(金)	アメリカ	ブライアン・ペンプレイス (Dr. Bryan E. Penprase)	アメリカ創価大学教務部長
5	2019/06/17(月)	フィリピン	カピストラノ・ベリンダ・メルカド (Dr. Capistrano Belinda Mercado)	イースト大学看護学部長
6	2019/06/27(木)	中国	首都師範大学・南開大学・北京教育学院教員ご一行	
7	2019/10/18(金)	パナマ	パトリスシア・ブリエグ (Ms. Patricia Vlieg)	パナマを代表する盲目の歌手
8	2019/10/30(水)	ウズベキスタン	アヴァズジョン・マラヒモフ トウルスナリ・クジーエフ	ウズベキスタン国立大学総長 元文化大臣
9	2019/11/11(月)	イギリス	クレア・レガッタ (Ms Claire Leggatt)	イギリス・ケント大学
10	2019/11/11(月)	日本	二木 孝 氏	外務省大臣官房公文書監理室
11	2019/11/13(水)	中国	首都師範大学初等教育研究所現職教員ご一行	
12	2019/11/13(水)	中国	キンファン・ユイン (Dr. Xiaofeng YIN)	東大大学院在籍
13	2019/11/19(火)	イギリス	ヒュー・マイアル (Dr. Hugh Miall)	ケント大学国際関係学部名誉教授
14	2019/11/25(月)	アメリカ	マリアン・ハルトグレン (Dr. Marianne J Hultgren)	カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)看護学研究科
15	2020/02/13(木)	日本	真田 久 教授	IOC公認筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長

◆ブライアン・ペンプレイス博士(アメリカ/アメリカ創価大学教務部長)

〈開催日・会場〉2019年6月14日(金)・グローリーホール

〈テーマ〉科学と地球市民の使命

〈概要〉

天文分野の研究者でもあるペンプレイス博士より、宇宙と人間のつながりや、人間と自然、人間と科学の結びつきについて講義。天文学においても「世界市民」としての考え方が重要で、世界的な科学の探求は、世界平和に通じていると話された。

◆生徒感想より

「人間と宇宙は一体であるということにとっても心を打たれました。今日の講演で、宇宙、そして人間は計り知れない可能性を持つのだと感じました。」

「今日の講演で博士は『勇気を持つこと』『成功するまで一生懸命取り組むこと』『必要なときは他の人に助けを求めること』『他の人に質問すること』ができれば、どんな難問でも必ず答えが見つけ出せるとおっしゃっていました。私も勇気を持って挑戦していきます。」



◆二木孝氏(日本／外務省大臣官房公文書監理室上席専門官)

〈開催日・会場〉2019年11月11日(月)・栄冠ホール

〈テーマ〉人の違いは出逢いの違い

〈概要〉

国際社会で活躍するには、ユーモアの感覚を身につけることが必要であり、身につけるためには客観的に自分を見つめることができなければいけないことや、演劇などで立場の違う役を演じる経験などはこの能力を身につけるのに役立つことを教えてくださいました。異文化との交流のために必要なこととして、一つは、情緒に富むイマジネーション力を身につけることが必要であり、これは作者が世界観を描いている古典的文学を高校時代に読むことで得られるのではないかと。さらに、自分の外に新奇性を求めるのではなく、自分自身が「新しい眼」をもつこと、つまり複数の視点を持つことが重要であると語られました。また働く事について、働くとは「人と動く」「人のために動く」ことであり、「自分が大切だと思ふことを根気強くすること」である。「自分は変ると決めれば、周りも変わる」など大切な言葉を教えてくださいました

◆ 生徒感想より

「外交官や、異文化交流についていろいろな言葉を通して知ることができました。特に「人は人生で逢うべき人には必ず逢う。それも一瞬早からず、一瞬遅からず」という言葉が印象に残っています。学園に入学してから今までなんとなく過ごしてしまっていたので、高校時代が大切だというお話を聞いて良かったです。また読書の重要性を再認識しました。」

「外交官の仕事というとなかなかイメージがありましたが、今回のグローバルセミナーはとてもわかりやすかったです。ジョークなどで例えてくださり、様々な方のお言葉を聞いたのも、自分にとってためになることばかりでした。特に私の心に残ったのは「本当の楽しみは努力した後に生まれる」です。また、外交官に求められる7つの資質も、全く知らなかったので勉強になりました。今からしっかり勉強し努力していこうと思いました。」

「今回の講演を通して、高校生である今の大切さを深く感じました。私が特に印象に残ったことは、異文化交流の上で大切なことは、文学を学び情緒ある想像力を養うことであり、それは20歳までの今のうちにしかできないということです。現在、高校3年生であり、残されている時間はあまり多くないことに気づき、まずは読書に挑戦していきます。」



◆真田 久氏 (日本 / IOC 公認筑波大学オリンピック教育プラットフォーム事務局長)

〈開催日・会場〉2020年2月13日(木)・講堂

〈テーマ〉東京 2020 大会とその後の社会

〈概要〉

まず、パラリンピックの歴史をひもといてくださり、その起源とされているのは、1948年に開催されたロンドンオリンピック開会式(7月28日)と同日に、イギリスのストック・マンデビル病院で行われたストック・マンデビル競技大会であり、これは、戦争で負傷した兵士たちのリハビリテーションとして「手術よりスポーツを」との理念で始められたものであることを教えてくださいました。

また、2016年リオパラリンピックで、パラリンピック盛り上げようと、イギリスのテレビ局「Channel 4(チャンネル4)」が作成した、PR動画「We're The Superhuman」をご紹介します。『Yes, I Can』とのフレーズを通し、「どんな困難があろうとも、諦めなければ道が開ける」と学園生にエールを送ってくださいました。

◆生徒感想より

「パラリンピックについて学ぶことができ、パラリンピックとは本当に人の心を震わせる世界大会なのだ改めて感じました。動画を見て、『できない』と最初からあきらめずに、『自分にならできる』と可能性を信じる強さに胸を打たれました。あきらめずに一つの事に向き合い、挑戦していくという情熱を頂きました。」

「『We're the Superhuman』で障害者の方々が不可能だといわれるようなことを自信満々でやっていて、輝いている姿が記憶に残りました。外国人や障害者の方々にカベのようなものをつくってしまっていたが、パラリンピックをつうじてそのカベを壊していけるようにもっと関心を持っていきたいと思います。」

「講演の中でグッドマン博士の「失われたものを数えるな、残されたものを最大限に生かせ」という言葉が強く印象に残りました。障害を持ちながら自らの中にある力を最大限に引き出して戦うパラスポーツの選手の姿はまさに“負けじ魂”の姿だと感じました。」



7. 英字新聞(GCP)

■ 期間 11月中旬～3月中旬

■ 参加者 21名(1年生6名 2年生8名 3年生7名)(希望者)

■ 目的

英字新聞の作成を通し、英語力・発信力を高めるとともに、取材や新聞作成を通じ、社会や世界との関わり方、情報活用能力、チームによる計画実行能力等を涵養する。

■ 事前準備

学年が混在した4名ずつの5グループに編成。プロジェクト全体を統括する編集長・副編集長を定めました。第一回の講義で記事の内容をプレゼンするため、それぞれのグループで書きたい内容を検討し、発表の準備を進めました。

■ 講義内容

1回目 11月13日(水)(2時間)

初回の講義はジャパントイムズ編集局長の大門小百合氏に担当していただきました。それぞれのグループが記事の内容をプレゼンし、氏から講評を頂きました。講義では、「成田に到着したばかりの外国人に伝わるように書く」との、英字新聞の根本スタンスを教えてくださいました。

2回目 11月16日(土)(2時間)

第二回の講義では、報道部デスクエディターである、内藤陽介氏をお招きしました。英文記事を書く上で重要な、取材の仕方や写真の撮り方、英文の書き方など、英字新聞を書く上で不可欠な知識・スキルをご講義頂きました。一人称は用いないことや、情報の出所を示すことなど、客観的に事実を記述する仕方を学びました。

3回目 12月18日(水)(2時間)

ジャパントイムズ編集企画部・部長の松谷実氏に講義を担当してもらいました。本講義までに生徒は記事の第一校を作成し、それに対する修正提案を行って頂きました。より明確に伝えたいことが伝わる文章を提示して頂き、また読者の目を引くような熟語の使い方などを学びました。加えてレイアウトの作成の仕方も教わり、本格的に新聞を作成する準備が整いました。

4回目 3月9日(月)(2時間) ※未実施

実施予定でしたが、コロナウイルスの感染症対策として学校が休校になってしまい、実施することが出来ませんでした。ジャパントイムズの大門小百合編集局長の担当で、生徒版とプロのチェックを入れて完成した版を比較し、英文・見出しなどがどのように修正されたのか解説を受ける予定でした。



8. 時間管理手帳

■目的

時間管理能力育成(タイムマネジメントの指導法開発)

■実施

SGH の取り組みの一つとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳(以下、〈スコラ〉)を全生徒に配付して活用しています。キャリア教育推進委員会(月 1 回程度開催)での協議をもとに、学年ごとに計画的に生徒への指導・激励を行っています。

学園祭では校内手帳甲子園を実施し、第 8 回手帳甲子園東京大会(主催:NOLTY プランナーズ)に本校より 25 名を出展。関東大会(2019 年 12 月 14 日/於:立正大学付属立正中学校・高等学校)では、深瀬真歩さん(1 年)が「手帳活用部門」において優秀賞を受賞。深瀬さんは関東大会代表として、第 8 回手帳甲子園本大会(2020 年 2 月 1 日/於:東京国際フォーラム)に出場し、「見える化・リスト化・振り返りで未来へ繋がる手帳に」と題して、手帳活用のプレゼンテーションを行い最優秀賞(全国第 1 位)を受賞しました。本校としては、3 年連続の全国大会出場となり、最優秀賞受賞者は 2 名となりました。

■卒業生からの報告

本校卒業後 3 年を経過した大学 3 年生 A さんは、ある企業でインターンシップ中に、A さんが日常的に自分の手帳を使って時間や情報の管理していたところ、その姿が企業担当者の目にとまり、「社会人でもここまで自己管理できる人は少ない、それを高校時代からやっているなんて」と大変に驚かれ、「是非、わが社に就職を」と声をかけて頂いたとのこと。A さんからは、「高校時代に身についた習慣が、実社会で活かされることを実感した」とのコメントが寄せられました。

■〈スコラ〉効果測定

NOLTY プランナーズが〈スコラ〉を活用している全国の生徒に実施した効果測定(2019 年 7 月に実施/164,723 名が回答)では、「手帳の使い方参考になったものはありますか?(複数回答可)」と「手帳をいつ使っていますか?(複数回答可)」の質問項目について以下のようなデータが測定されました。本校においては、同級生から手帳の使い方について学ぶ割合が全国平均よりも極めて高いため、今後も活用事例紹介の機会(TV 放送や掲示物)をさらに効果的に年間計画で配置したいと思います。また、時間管理とともに、自分が気づいたことやアイデアをメモする割合が全国平均よりも抜きん出て高いことが判明しました。ジェネリックスキルの成長を測る PROG-H(河合塾)の 2 年生の受験結果によると、「課題発見力」の平均値が 3.05(全国平均 2.75)、「計画立案力」の平均値が 2.98(全国平均 2.62)という高い数値で測定されました。スコラによる日常的なトレーニングが、これらのコンピテンシーの育成に貢献しているのではないかと推測しています。

	「手帳の使い方参考になったものはありますか？」（複数回答可）						「手帳をいつ使っていますか？」（複数回答可）					
	同級生の手帳（全国平均）						気づいたことやアイデアをメモする時（全国平均）					
	1年次		2年次		3年次		1年次		2年次		3年次	
〈52期生〉	2019年度	30.97% (14.45%)	—	—	—	—	2019年度	38.94% (19.90%)	—	—	—	—
〈51期生〉	2018年度	30.96% (16.85%)	2019年度	34.85% (15.35%)	—	—	2018年度	40.84% (22.30%)	2019年度	38.48% (18.41%)	—	—
〈50期生〉	2017年度	25.50% (15.50%)	2018年度	48.02% (17.94%)	2019年度	42.02% (13.70%)	2017年度	32.86% (19.43%)	2018年度	37.08% (19.47%)	2019年度	42.94% (21.25%)



9. 評価と分析

A) アンケートと分析

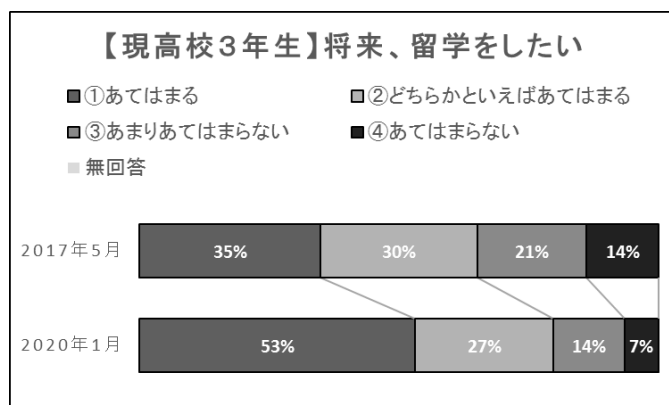
■ 生徒対象のアンケート

2020年1月、SGH活動に関するアンケートを全校対象に行いました。

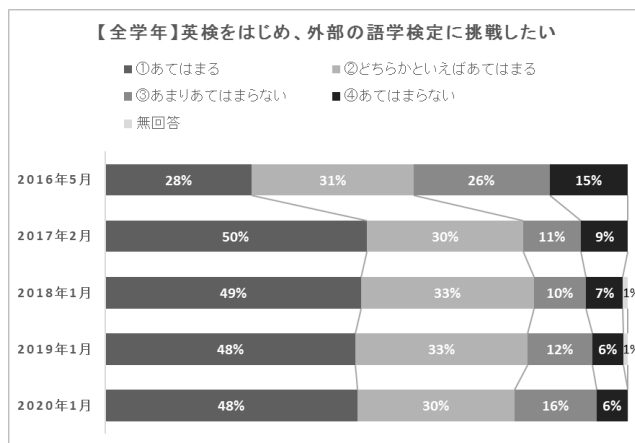
現在の高校3年生については、入学年からのアンケート結果との比較を行いました。また、語学への意欲の変化、協働能力を問う質問については、SGHに認定されて以降過去行ったアンケート結果との比較を行っています。

● 海外への志向性、語学への意欲の変化

「将来留学をしたい」という問いに対し、SGHの活動に3年間取り組んだ現3年生の入学時と卒業時の結果を比較したのが以下のグラフです。「留学をしたいですか」の問いに対し、「あてはまる」と答えた生徒が、2017年5月では35%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは53%と、18ポイントも増加しています。SGHの活動を3年間継続して行うことで、留学がより身近に現実的に感じられるようになってきたことがわかります。



また、「語学試験挑戦したい」という問いに対する回答について、経年変化を示したのが以下のグラフです。これによると、SGH認定後の2017年2月以降、全体の8割前後を保ちながら推移しています。語学修得に対し、前向きに取り組もうとする生徒の割合が高いことがわかります。



受験者数を見ると、2014年から2015年へかけて2倍近く増加しています。2015年度にSGHアソシエイト校に指定され、英検の受験料の助成が行われるようになったことが、増加の一因としてあげられます。SGHの活動を行う中で、語学の重要性への認識が高まっていると考えられます。2019年度からは英検受験料の助成がなくなりましたが、そのような中でも、英検準1級には多くの生徒が挑戦しています。また、1級にも、確実に実力のある生徒が挑戦していると考えられます。

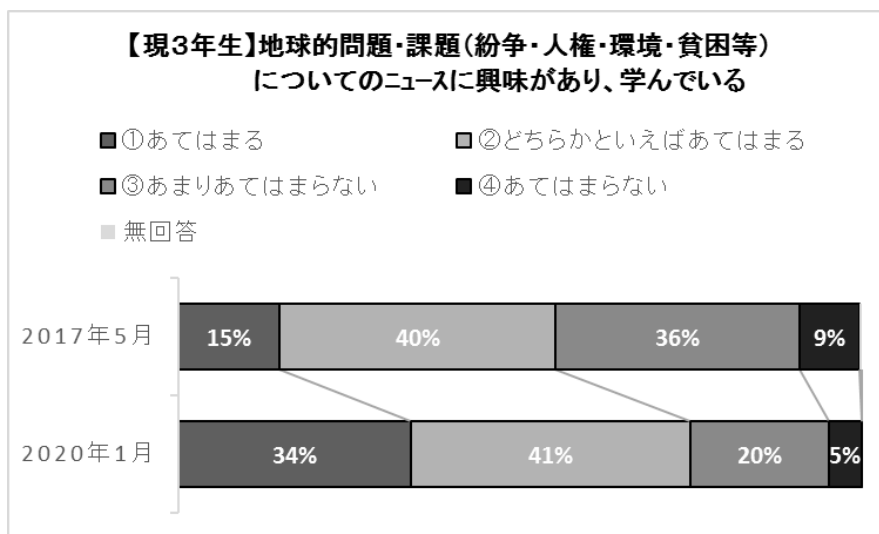
英検の受験者数の推移

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度
準1級	67(6)	127(13)	204(23)	272(32)	258(25)	251(15)
1級	1(0)	6(1)	18(4)	16(1)	15(0)	3(1)

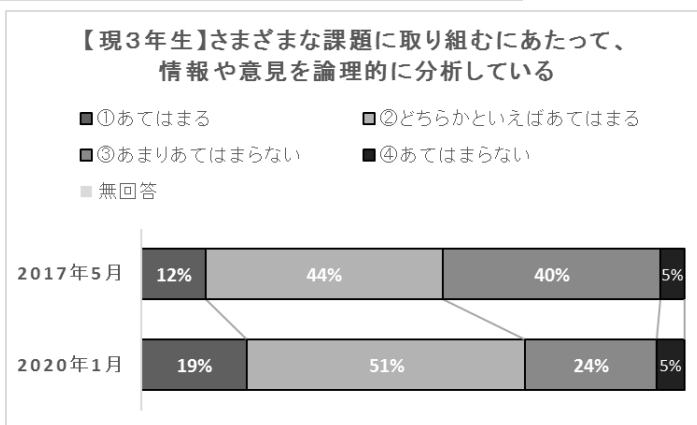
※カッコ内は合格者数

●身につけてほしい資質や能力の定着

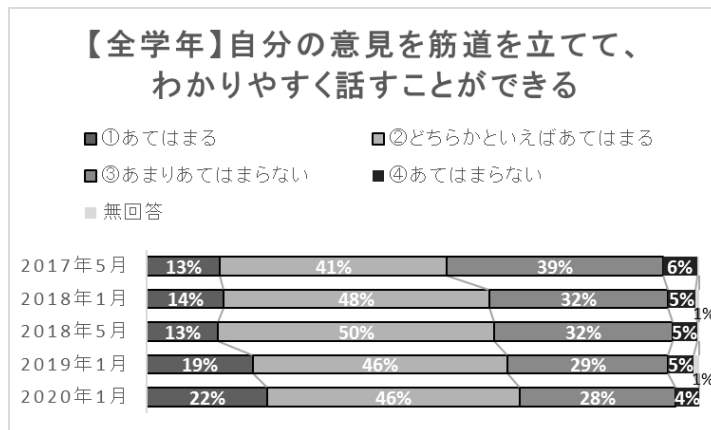
次のグラフは、地球的問題・課題への興味や理解に関する問いで、3年間SGHの活動に取り組んできた現3年生の入学時と卒業時の結果を比較したものです。入学時には「あてはまる」と答えた生徒が15%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは34%に増加しました。また、2020年1月のアンケートでは「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と75%の生徒が答えており、SGHでの活動が生徒たちの地球的問題・課題への興味や関心を高め、具体的な学びにつながっていることがわかります。



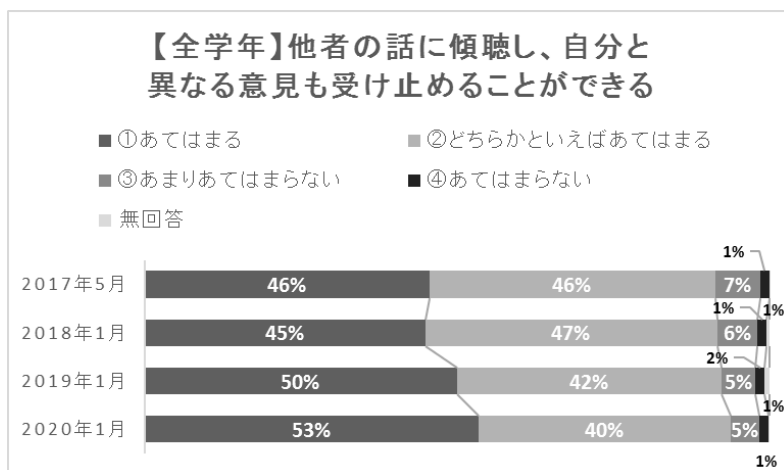
次のグラフは、現3年生の問題解決能力の入学時と卒業時の比較です。入学時と比較すると、卒業時に「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は14%も増加しています。3年間の言語技術、3年次の「Final Project」を通して、情報や意見を論理的に分析する力を大きく高めることができたと考えられます。



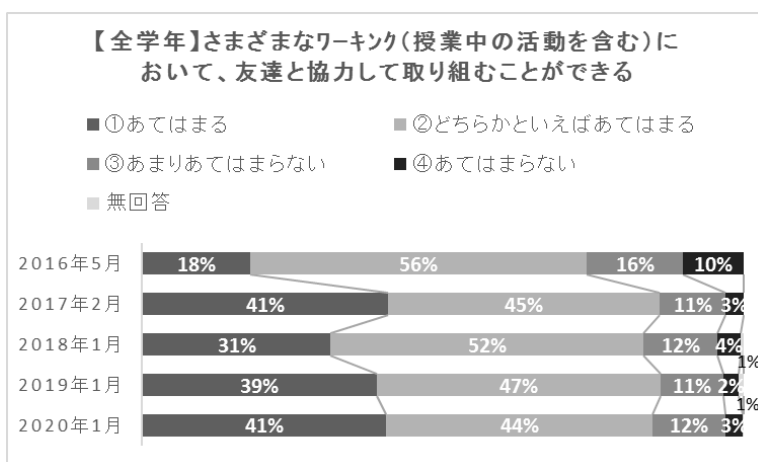
以下のグラフは、対話・コミュニケーション能力を問う質問への回答の2017年からの推移をまとめたものです。2017年5月では「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は54%だったのに対し、2020年1月のアンケートでは68%となり14%増加しています。言語技術の授業を軸に、他教科や学級活動の中でも言語技術で身につけたスキルを積極的に使用していくことで、対話・コミュニケーション能力に自信をつけてきていることがわかります。



次のグラフは、「他者の話に傾聴し、自分と異なる意見も受け止めることができる」という質問への回答の2017年からの推移をまとめたものです。こちらは「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と回答している生徒の割合は、2017年当初から90%以上と高い水準を保っています。



一方で、他者と協働して物事に取り組む力は向上している傾向がみられます。下のグラフは、「様々なワーキングにおいて、友達と協力して取り組むことができる」という質問への回答の2017年からの推移をまとめたものです。SGHの活動が始まったばかりの2016年5月とそれ以降を比べると「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」が10%程度増加しているのがわかります。本来持っている傾聴力の高さに加え、仲間



との協力なくしては成り立たないSGHの活動を通して協働力に自信をつけ、他の授業でも協働力を活かしながら取り組むことで更に協働力が高められていると考えられます。

B) SGH4年次中間報告会

11月30日(土)14時00分 会場:創価高校 栄冠ホール

【式次第】

一、校長挨拶	塩田校長	14:00～(5分)
一、GCP 報告	岡部教諭	14:05～(15分)
一、GLP 活動報告	石野教諭・生徒代表	14:20～(15分)
一、FW 実施報告	生徒代表	14:35～(20分)
一、講評ならびに講演	飯田順三 創価大学法学部教授	14:55～(25分)
一、閉会宣言	中川学園長	15:25～(5分)

【講評】 飯田順三 創価大学法学部教授

大学というのは生徒が社会に出る一歩手前の学びの場所。社会との接点が常にあり、社会の入り口、学びの出口となる場所。今日は社会で求められている力と創価高校の取り組みについて話をしていきたい。

SGH の成果報告では、教育プログラムの開発について、生徒の資質能力はどのように向上したか、大学への学びの影響はどのくらいか、SGH で学んだ手法がどのように大学の学びで生かされているか、外部利害 関係者の評価はどうなっているかについて文科省が注目していることがわかる。

加えて、社会においては、新時代に対応した学校改革に焦点があてられている。創価高校でも今後、GCP の発展的解消によってあらたなプログラムが考えられていたり、教科書のあり方の検討、連携校との関係の発展などについて検討が進んでいるようだ。

ところで、ノート持ち込み OK、単元テスト化という記事が朝日新聞に出ていた。定期テストを撤廃しこまめに小テストをすることで学校改革をしている学校もある。

このような社会的動きを見て、創価高校の取り組みはどう評価できるかを考えたい。創価高校のプログラムは言語技術の習得がベースになり、GCP、GLP などで探究型学習の発展に力を入れている。1年生は世界の多様性と格差、2年生はルワンダジェノサイド、3年生は核軍縮問題について調べている今回の企画だった。GLP は各種 FW を通じて、核兵器、防災、原発、国家、多様性について学びを深めている。このすべてが大学での学びに繋がり、(国際人権法、平和学、国際関係学など)学問に密接につながっていることを知ってもらいたい。

では、今後の社会に視点を移したい。今後の社会を国はどのように描いているのかを考えたい。経団連では、Society 5.0 時代に求められる人材と大学教育について言及している。必要と言われる論理的思考力は言語技術で、規範的判断力は例えば今回で言えばルワンダ内戦の学習で磨かれているのではないか(国際規範が身につけていないと、内戦の責任者を法で裁くことはできない)。Society 5.0 時代とは、イノベーションにより様々なニーズに対応できる、人の可能性が広がる、AI により必要な情報が必要なときに提供される社会のことなどをさす。

現在、大学生を間近で見ていると、大学生のモチベーションと社会のニーズにある種の乖離があるように感じる。例えば、日本発祥の英語技能テストである TOEIC は受験者数が近年大幅に伸びているが、「社歴別受験者数と平均スコア」を考えると、内定者のスコア平均が最

高(554)、その後入社年数が伸びていくにつれて平均スコアは低くなっていく傾向にある。ここから何が読み取れるか。社会に入ってから英語を使う機会が減少傾向にあることも考えられるのではない。英語をやらないといけない、という学生時代の高いモチベーションと、実際に社会にでてからの英語の必要性の乖離はある程度ある。着目したい点は、必要な力は語学力だけではない、ということ。

経団連のアンケートでは、コミュニケーション能力が、選考にあたって特に重視した点としてあげられている。語学力は下から4位にランクしている。つまり、語学力といったスキルの必要性よりも、主体性、チャレンジ生、ストレス耐性などの人間性をより重視している。早稲田大学の吉田先生の分析によると、「空気を読んで円満な人間関係を築くことのできる人材」のほうが「論理的に相手を説得できる人材」よりも求められている。スキルがある上で、人間関係が順調にいくようなはなしかた、言語能力などが必要になってくる。

世界3大投資家、ジムロジャーズ著書「日本への警告」の中で、彼は「もし私が今10歳の日本人ならば、自分自身に小型銃を購入するかもしくは、この国を去ることを選ぶだろう」と発言している。つまり、日本に対する期待値が非常に低い。加えて、日本の人口推移をみると減少傾向にある。この状況を打開するために外国人に多く入ってきて欲しいといった思いが生まれる。結果、在留外国人が7年連続増加している。では、日本以外ではどこが期待値が高いのか、それは中国である。AI産業に関して言えば、米国と大きな差が存在しているが、キャッチアップのスピードを急速に上げてきている。また、中国においては人口も増加しているので、若者が力をつけて社会変革を成し遂げる大きな推進力となってくことは間違いない。

現在、日本の就活生は中国企業に関心を持っている。また、中国への留学をする学生も増加している。「今後稼げる人的資本が大きい若い世代は、リスクをとって外資系企業を選んでも良いはず」と先述のジムロジャーズは言っている。日本の大学12年生の実態は、地方・国家公務員への志望者が全体の47%にのぼる。

ここまで考えて、創価高校のSGHプログラムを再度考えたい。結論としては、今後の社会事情を考えると、創価高校で培っている力は社会で必要とされている力である。今後の社会形成の上でみなさんが「主体者である」という自覚をもっていたきたい。

創価大学(SGU)では創始者が開かれた道を世界各国の学生が歩み進んでいる。この道をさらに拡充していく学園のSGHの活動であることを祈っています。

アンケートより

1, 午前中のGCP企画について

・全学年の企画で共通していたことが、生徒が「自分で体験する」ということだった。実際に肌で感じることで国際問題をより身近に考えることができるのだと感じた。

・皆で協力して話し合い、学び合う、ランダムに指名された人が自分の意見を発表する。簡単にできそうでなかなかできないことができていて、日頃からの訓練のたまものだと思います。

2, 学校全体の取り組みについて

・Active Learning の実践を参観させて頂き、本当に勉強になった。一人一人が楽しそうに参加しつつ、企画を通して、気づきや発見、動機付けもされた様子を感じることができた

・企画全体がとても工夫されていて、わかりやすく、見ているだけでも感心することばかりだった。学校としての取り組みから、社会に向けてのものへと発展させられたら素晴らしいと思った

C) SGH(4年次)活動報告会

2月22日(土)13時30分 会場:創価高校 栄冠ホール

【式次第】

一、校長挨拶	塩田校長	13:30～(5分)
一、1年生GCP報告	江添教諭	13:35～(10分)
一、言語技術授業実践報告	永嶋教諭	13:45～(10分)
一、GLP活動報告	生徒代表	13:55～(15分)
一、講評	村上運営指導員	14:10～(30分)
一、講評	無藤運営指導員	14:40～(30分)
一、閉会宣言	中川学園長	15:10～(3分)

【講評】 村上運営指導員

今日朝からこちらにお邪魔させていただきまして、午前中に行われたGCPから見せていただきましたが、この4年間、素晴らしい展開をされてこられたなど、私自身感じております。

特に、私は陸前高田市の参与もさせていただいておりますが、創価高校の皆さんが陸前高田市のほうにFWでこられると、その中で陸前高田市の市長からの講話をうけます。その市長がいつも、「創価学園の生徒の講話を一番楽しみにしています」と話します。それはなぜかということ、一つ目は優秀そうだなということ、二つ目は、質問も素晴らしいと言って、いつも感動しています。今年も楽しみにしていますと言っていました。

そういった流れで、SGHの取り組みとして、世界だけでなく、東北にも足を伸ばしてくれていることを、出身者としても大変嬉しく思っています。

今日の報告会では、SDGsの話と言語技術の話といただきましたが、まずSDGsについては、先ほど私もクラスにいて、色々な国を担当している生徒さん達と話をしました。その中で、国連役の生徒さんに「(国に渡している)このお金、どこから来るんですか」と聞いたら、「考えた事ありませんでした」と話していました。国連がどこからお金を集めているかという事が実は一番大事なところですので、ここもぜひ考えてみてほしいと、元国連職員の立場から思いました。

先程、先生方とお話しする中で、来年度以降探究科をすすめられていると聞きましたけれども、SDGsは海外ばかりではなくて、身近なところにもたくさんあります。例えば、家庭にも問題があります。近所、コミュニティ、自治体にも問題があります。そういった身近な問題が、SDGsの17の目標の中でどう当て嵌まるのか、考えていってほしいと思います。

そういったことが、生徒さんのキャリアに結びつく可能性が十分高いだろうと思います。

言語技術に関しましては、多角的に考える力を養うための取り組みをかなりやられていくことがよくわかりました。地球規模課題を解決する上で、考え方、分析の仕方、発表の仕方等を学ぶことは非常に重要なことです。ただ、もう一方で大事なことがもう一つあります。

私も昨年、国連の防災に関する会議や世界銀行等の会議でディスカッションしたり交渉したりすることがありました。日本を代表して、国内避難民の問題についても話し合いをしたわけですが、その中で、分析して、プレゼンをして、答えるという事はすごく大事ですし、いろんな交渉事も大事です。が、本当に大事なことは、人と人との信頼関係をどう作るか、ということです。これは分析や、論理的な話ができるということだけでは構築できないものです。ユーモアを交え

ながら会話ができる、そういった関係をどう作るか。これがすごく大事。そういった関係性をもとに、「じゃあこういう風にしていこう」という話ができることが大事であって、

今やっている言語技術はベースとしてやっていただかなくてはいけなくて、そのうえにこの人間性をどう育てていくのか、これは創価学園がつくっている「人間性を高める」というひとつのベースがされているわけです。あとはどうやって、ユーモア溢れる話をできるような人間を作らないと、きちんとした関係ができないということを知っていてほしいと思います。

それから、さきほど核抑止の映像を見せていただきましたが、今、軍縮といっても核軍縮だけではないんですね。今後言われているのは、AI を使った兵器をどうやってなくすか、また開発させないかが今大きな話題になっています。生徒の皆さんが大人になった時は、そういった問題がまざまざと出てくる時代です。どうやって、この TV ゲームのような戦争をさせないような環境をつくっていくか。軍縮ではなくて、通常兵器で戦争ができてしまう、画面上で戦争ができてしまう、そういった状況をどう防ぐか。これは、非常に大きな問題だというふうに思います。先日、国連事務次長、軍縮担当の中満さんとお話ししました。中満さんがおっしゃっていたのは、「そういった AI を活用した兵器の開発をどうやって止めるかはすごく大きな問題だ。それは、今の大人の頭ではなかなか考えられない。最先端兵器をどうなくすかといった問題は、これからの人達に考えてほしい」と話していました。

中満さんは「ぜひ高校生に来てもらって、お話ししたいし、お会いしたい」とお話されていました。ぜひ、中満事務次長に直接メールを出されて、「お会いしたい」と要望されてはどうでしょうか。高校生のうちからそういった方とお話しするのは、大きなインパクトをみなさんにも与えて頂けるのではないかと思います。

先程、(CIF のテーマである)「Change Agents」という言葉が出てきましたが、私はこの考え方は非常に重要だと思います。社会をどのように変えていくか、世界をかえるか。これは、創価高校の生徒さんひとりひとりが、「自分は Change Agent なんだ」と自覚していくことが大事だろうと思います。ですから、GLP、SGH の最終的な目的は、「Change Agent」と思えるような人をどうやって作っていけるのかが大事です。創価の哲学をもった一人一人が「自分が Change Agent として世界を変えていくんだ」という思いを持てるかどうか、そういった教育を、ぜひ創価学園で作ってほしいと願っています。

【講評】 無藤運営指導員

先ほど3つの実践の発表を聞かせていただいて、特に、最後の GLP の生徒さんの英語の発表にすごく感動いたしました。さきほどのコメントにもありましたが、その発表で出てきた「Change Agents」-「変革する主体」と訳すのでしょうか、この考え方は、ちょうど今私が関わっている学習指導要領改訂の背景にある基本的な考え方につながると思います。

昨年、OECD から「2030 年の教育を目指して」という文章が発表されています。その中心となる考え方は、「co-agency」です。「Agency」とは、さきほども出てきましたが「主体性」「行動主体」などと訳すとよさそうですけども、「co」は「一緒に」「共に」という意味ですので、全体では「協働主体性」とでも訳せばいいのかもしれませんが、そこで言おうとしていることは、「全ての人が自ら具体的に行動し、それぞれの状況を変えていけるようなそういう主体になってほしい」ということです。学校教育に即していえば、生徒一人一人が主体であるし、教師も主体、そこに関わる保護者や様々な人も主体であるわけで、それらが協力し合いながら良い社会を実現

していこうということになります。もちろん生徒さんは、今、育っていつている途中なわけですから、その行動する主体というものが育っていくときです。その時に例えば、高校が終わったら「これまで学んだことをもとに、大学では主体になりましょうね」と急に言われてもなれないわけです。そうではなくて、高校から、中学から、さらに言えば小学校から、「主体的な行動のあり方」というものを授業の中で育てていく。そういう考え方を 2030 年目指して進めていこうと、世界の教育関係者に呼びかけています。そういった中で、SGH の実践も、まさにそういった方向であろうと思います。先ほど、この SGH を具体化するという意味で、来年度、世界市民探究 (Global Citizenship Inquiry) という探究科を作ると聞きました。この言葉は、まさに先ほど述べた精神を表すだろうと思います。

「Global」-世界的というのはまさに、先進国だけではなく、あらゆる国、民族、地域を含めるということですし、そして日本がその中のひとつというだけではなくて、日本の中そのものがすでにグローバルであるし、また日本人がその日本の中で様々な活動をしていく、その中で発生する問題も、グローバルな課題であるわけです。そういう今の時代のあり方を知るだけではなくて、いかにして、それぞれの人、特に若い人たちが、「自分が何ができるのか」「自分がそこに寄与できることがあるか」、そういう姿勢になっていくことが大事です。ただ勉強して「こういう問題があるな」ということを知るだけではなくて、そこに自分が今できること、将来できることを考えながら、いろんな人と協働していくようなあり方が「Global」という事なんだろうと思います。

二番目の「Citizenship」というのは、日本語でいえば「市民」「市民性」と訳しますが、要するに我々一人一人のことを指します。Citizenship とわざわざいうのは、それぞれの人の生きる権利を確保し実現していくことを表すことです。それは、世界を見るならば、貧困や、病など様々な問題のある中で、必ずしもそういった権利が実現できない多くの人達がいるわけです。そういった人たちの権利をどうやって実現していくか、いかに形ある、実のあるものにしていくか、(Citizenship とは)そういう問いかけなのだろうと思います。私達の住む日本は、曲がりなりにも民主主義として、それぞれの人の自由や権利というものを確保しこの社会をつかってきたわけですが、もちろん日本の社会にもたくさん問題があります。それをよく知っていくことばかりではなく、世界中の様々な国・地域にどうやって広げていくか、そういった地域に住んでいる人たちの視点に立つという事が、この「Citizenship」という言葉なのだろうと思います。

三番目の「Inquiry」-探究ということですが、これは新しい学習指導要領の高校の科目においても「探究」という時間が作られたり、それ以外の教科にも探究という事を強調している部分です。探究のためには、多くの知識や情報が必要ですので、それを学ばなければいけないわけですが、それを学ぶだけではなく、「どう活用するか」に力点があるわけです。知識は当然知っている方がいいわけですが、それらが頭の中にあるだけで眠っていたら、それは単なる物知りであって、その知識をどう活用するかが重要なポイントです。そこを、中学生、高校生も、様々な教科で勉強してほしいわけです。知識を使うということは大きく言うと 2 つの側面があります。一つは自分なりの問題意識を持つことです。先程の核兵器の問題でも、AI の問題でも良いわけですが、自分なりの問題意識をもったときに、初めて自分にとっての知識のメリハリ、遠近がみえてきます。その中で知りたいこと、やりたいことが何かみえてきます。もう一つは、そのためには様々な知識を得なければいけないわけですが、インターネットの時代において、実は情報を得るだけならば、Google で検索すればいくらでも出てくるわけですが、その中から必要な情報を選び、評価し、「本当に役に立つ情報は何か」を判断することがだん

だん重くなってきています。昨年発表された国際的学力調査の PISA の結果で、日本は「読解力」と称される部分がかかなり落ち込んでいました。その結果をよく見てみると、コンピューターで解答する方式にあまり慣れていないことも原因の一つとしてありますが、公開されている問題をみてみると、通常の国語の読み取りではありませんでした。様々な問題に対して、対立する意見があり、そのどれが正しいかを判断する問題でした。そのために与えられた情報に重み付けしながら考えることを問う問題になっていました。基礎的な読み書きの力は当然必要ですが、その上で、「情報がたくさんある中でどういった情報を選ぶのか」「その中で自分なりの情報として何を発信するか」、そういった力を育ててほしいという、学校教育へのメッセージとして受け止めていくべきだろうと思います。そう考えてみると、GCIの試みというのは、非常に貴重なものになっていくだろうと思います。

先ほどあった実践報告の中で考えてみると、SDGs カードゲームですが、非常によくできていて私もやってみたいと思うくらい面白いと思いました。良いなと思うのは、具体的な制約があるということです。つまり、「みんなが平和に仲良くしましょうね」ということは簡単なわけですが、それでおわっているのは平和教育は成りたっていません。そうすると現実をみてみようとなるわけですが、その流れでこれまでの日本の環境教育は上手くいっていなかったわけですが、その一つの理由は、様々な知識を学ばば学ぶほど、嫌になってしまうんです。「何もできない」「もう無理だ」という無力感におそわれてしまい、そうなる現実を見たくなくなってしまうんです。ですから、「こういうことを実現したい」という理想を掲げながら、その一方で「現実には様々な事情がある」ということの両方の中で、なんとか具体的に行動できる選択肢をいくつも見つけていかないといけない。実を言えば、大人の世界はそういったものなんです。実社会に簡単な正解なんてないんですけど、中学生、高校生時代にぶつかることは、しんどいことはたくさんありますし、教科の中で正答がある場合も必要ですが、その一方で、「何が正答か迷うけれど、これはできそうだ」ということを見つけていくような場が必要です。簡単に正答が見えるわけではないけれど、それぞれが主体として「自分ができることを作り出す」という態度を養うことが重要です。そのための取り組みとして、このカードゲームは非常に面白いと感じました。

二番目の言語技術についてですが、言語技術そのものは、ここ数十年、小中高校色々なところで試みられてきましたし、新・学習指導要領では、かなり比重が増えていきます。言語技術というと「言葉のスキル」という印象を受けやすいんですけど、その中身は「様々な情報を選びながら論理的かつ批判的に考える」ということを指しています。批判的、Critical というのは、「悪口をいう」ということではなくて、様々な根拠をもとにして丁寧に吟味していく姿勢や力を指す言葉です。論理的で Critical であるということは、例えば自分の意見をしっかりとつこと、と同時に、その意見に対して明確な根拠を持つということです。こういったことは、大人になって「やりなさい」と急に言われても、いきなりはできません。中高時代から、そういうことが重要です。これは抽象論ではありません。ここでおこなわれている言語技術の中でトレーニングをつみあげていくことももちろんですし、言語技術の時間だけでなく、理科のレポートなど様々な教科で練習をしていくこと、それをカリキュラムに落とし込んでいく事は、非常に有益な方向性であろうと思います。

最後に GLP についてですが、発表がすごくよくできていて、感心をして見ていました。特に先程から言っているように、「現実には可能なことは何か」を考えていることが重要であると感じました。核兵器の問題についても、単に「そんなのなくしたほうがいい」というのは簡単ですけども、

「一方的になくせば相手が得をするかもしれない」という中で、可能なことをどうしていくか、これは非常に難しい事ですが、それを考えていく事が大事であろうと思います。更にもう一つ私が大事だと思ったことは、中学生や高校生が今生きている、学んでいるこの場所と、将来生きて、活躍していく場所、世界をどうつないでいくかということです。もちろん目の前にある教科学習を大事にしてほしいけれど、そのことが一体将来にどう生きていくのか、大学の進路というだけでなく、広くこの社会で活躍していく自分を考え、その中で何ができるのか、視野を広げて考えていってほしいと思います。これは私も反省するわけですが、これまでの日本の学校教育で足りなかった部分だと思うわけです。様々なことを世界から受け取るだけでなく、こちらから寄与していこうということ、日本の中のことだけでなく、「世界の問題は目の前にある」と考えられることが今後求められます。まさしく GLP の生徒さんたちが、それを実行されていることが素晴らしいと思いました。この4年間で素晴らしい実践と教材をお作りいただいたので、今後、他の高校、中学、小学校でもこのようなやり方が広がっていくだろうと大いに期待して、私のコメントを終わらせていただきます。

アンケートより

1, GCP 企画について

(1年生企画:SDGs カードゲーム)

・1年生とは思えないほど各自のアイデアを出し合い、他のグループとも話し合い、目標を達成しようとする姿に感動した。

(2年生企画:人権ディベート)

・身近なテーマを扱うことで、日頃から自分の意見とその反対の意見について考えていけるようになると感じた。いろいろな意見があることを受入、より良い方向へ進めていける実力をつけることが、複雑に絡み合う問題を解決していける力をつけることになると期待している。

(3年生企画:UNHCR・WILL2LIVE)

・難民の現状は見ていてつらいものだが、これが現実なんだと知ることが解決の第一歩であり、若い生命への触発になると感じた。休憩時間で思ったことを話し合う生徒たちもいて、感動した。

2, 活動報告会、学校全体の取り組みについて

・生徒さんの英語のスピーチが上手だった。先生方の実践発表が、講評の方の評によって意味づけがなされ、会全体として立体的な構造になっていたと感じる。「信頼できる人間関係作り」との言葉が印象的だった。

D) 運営指導委員会

第1回運営指導委員会

日時:2019年11月30日

参加者:佐藤 悟 元ブラジル大使/飯田 順三 創価大学法学部教授
狩野、中川、塩田、久保、谷、佐々木、石野、永嶋(記録:吉澤)

飯田：中国との関係を深めていかねば日本はどんどん遅れていく。東アジアの人たちを交えた学びの場を増やしていく必要があるのではないか。中国と台湾の人たちの出会いの場が創価大学にある。民間レベルの交流を通して友達になっていく過程を見ると、先生が開いてくださった交流の道の大切さを感じる。

中川：SGH の後を考えると、中国を始め諸外国というような「違う視点」を入れていくことは重要かもしれない。

狩野：私の世界としても中国との関係を重視していきたいという視点がある。キーになるのが創価大学だと感じる。中国の学生で日本にいきたいと考える人は増えている。ただ、学園としてどう舵取りをしていくかは難しいと感じる。

飯田：若い世代の交流という視点では、高校時代の海外文化との交流は大切。中国は漢字文化を持っているので受け入れやすいのではないかと感じる。

中川：何を第一歩目とするかが大切だと思う。

飯田：創価大学と具体的に提携していくことができないか、模索していただきたい。

久保：探究科の授業の一環として、高校 2 年生が各研究室を訪れる活動を計画している。大学として受け入れてくれるだろうか。1 年を通して学んでいくため、ある種ゼミのような形を想定するが、実現可能性はどうか。

飯田：単位認定をするかどうか、担当教員の勤務形態との関連、大学施設の利用場所などの課題がある。ただ、若い人の方が学びに対する素直さがあり、且つ教育者としての熱情をそそげる学園生だと思うので、忙しい中でも受け入れたいという教員が多いのではないか。

佐藤：少子高齢化の現代において、大学がどのように高校生を呼びこむか、アウトリーチ活動として、大学のためにもなると思う。これに関しては学長も力を入れている活動。

飯田：個人のゼミに受け入れるとしても、個人的に行う活動は教務的には処理されない。大学生ではない人を受け入れることに規則を越えて交渉する必要もある。

佐藤：探究型とは何を目的にしているのか。大学に行くことに意味があるのか、学びの中身に意味があるのか。大学に赴くのではなく、スペシャリティを持っている人に課外授業的に来てもらうことも良いのではないか。

石野：すべて見ていただくというのではなく、例えば講義を一本いただいて、研究テーマについてアドバイスをいただき、最終発表までに助言をもらえたらと考えている。

飯田：多摩地域の学生が大学に聞きに行けるという制度がある。が、実際は物理的・時間的厳しさから実現にはいたっていない。姉妹校であるのであればより綿密に連携をとっていきたい。

谷：高槻高校が Stanford 大学とのオンラインの交流を行なっている。費用の面からも考えると、オンライン交流は実現可能ではないか。1 人 1 台端末の時代も来るので。

飯田：教育ツール・媒体は今後クリアできると思う。

中川：東京も関西も含めて、創価学園として創価大学と連携できないか。

飯田：人の配置と制度上のルール(規則・学則)をどうしていくか。実現不可能ではないと思う。

佐藤：GCP の模擬国連の活動をみていると、立派な仕組みを構築されている。大学にたよらなくても、先生方で仕組みを作って、生徒に考えさせられるような活動を学園なら作っていか

れるのではないか。

石野：探究としては、よく知っている人からリソースをもらいにいくという視点を考えている。また、実社会の人たちがどのような問題を抱えているか気づくことを大切に、自分たちの学びに対してのプラスアルファの視点をもらいにいきたい。実際に問いをたてるのは生徒自身。学園教員はファシリテーターとなり、創価大学の先生方をはじめ専門家には随時アドバイスをもらえたらと思う。探究としては、単位を考えるのではなく、学びを深める機会としてとらえている。

佐藤：学園のOBのネットワークを使えば、探究型の問いを立てる時に手助けになるのでは。

狩野：生徒が問いを立てることを優先していきたい。大学ありきで進まない方が良いのではないか。大学ありきだと、的が小さすぎてしまう。生徒の問いにあわせる形で、大学だったり行政だったり企業であったり、アドバイスをもらえる機関を探して行った方が早いと思う。

石野：こちらとしては、(運営の都合も考慮すると)大学の教員が専門で研究しているテーマを前もって生徒に提案をして、生徒が選べるような仕組みを作っていきたい。すべての生徒が自由にテーマを立てて、その都度対応先模索していると、教員負担や時間負担の面から大変。

谷：教員の業務負担軽減のため、業者が入るという考えがある。文科省の教育改革ののっかってきている感じもするが一例としてある。

久保：来年度から探究科の活動を初めていきたいが、実現可能性をさぐっていきたい。

狩野：「こういう話をお聞きしたいので協力してくれる教員はいるか」と大学に問い合わせる方が効率が良いのではないか。

中川：学園側が何をもとめていきたいかを明確にして、大学に提案していく必要がある。

佐藤：他の都立高校の動き(大学に突撃訪問など)を見ると、新プログラムの実現に関して頑張りすぎていないか？

谷：「学びの思考ツールの習得ができるような内容」を積み上げられるようなカリキュラムを考えている。どのようなトピックの学びをしたいのか、明確にしたうえで、各所(大学、企業、OB)に支援をお願いできれば、学園でしかできないプログラムができるのではないか。

飯田：大学でも、企業や行政とプロジェクトベースの授業を組み立てている。学園がやろうとしていることはその高校型となるだろう。大学が設定している「テーマゼミ」という仕組みに高校生を招待し、高校生が探究型授業の触発を受けにくることは可能かもしれない。

中川：今後、大企業などで、中高生に対して講義を行うような機会が社会的にも増えるかもしれない。

石野：教育と探究社の例をとると、企業が連携しているので、そこの出資を得てプロジェクトが回る。これを行政や大学と連携となると、資金面(ペイを考えると)でどのように運営していくのか課題が残るのではないかという話もあった。

狩野：現在、学校設定科目の平和学入門で来てくださっている講師が7名くらい、21世紀の対話で5名くらい来られている。その先生方にピンポイントで御協力をいただくことは現実的に可能かもしれない。

谷：提案としては実現可能性が高いと思う。

佐藤：SGHの取り組みが素晴らしい。今後も続けていってほしい。GLPなどで学んだ生徒が周りの生徒にも還元していけたらより良くなっていくのではないか。

第二回運営指導委員会

日時：2020年2月22日

参加者：村上 清 岩手大学学長特別補佐／無藤 隆 白梅学園大学教授／
佐藤 悟 元ブラジル大使／飯田 順三 創大法学部教授
中川、塩田、久保、谷、佐々木、石野、永嶋、江添（記録：吉澤）

久保：来年が最後のSGHということをおまえて、様々なご示唆をいただきたい。

江添：3年間GCPとして様々な視点から学びを深めてきたが、データの上だけの学びになってしまっているという懸念があった。今回、生徒の実体験として学びを得てもらいたいとの思いから、今回は高校3年生は映画上映をおこなった。実際の現状を目にし、無力感を感じてしまった生徒もいたようだが、その上で実際にどのような行動をしていくかを考えたいという声が生徒から上がっている。

佐藤：高校生は動画世代ということもあり、映画の鑑賞は効果的で、大切だったのではないかな。

中川：見せておくべき内容の映画だったと感じている。

佐藤：良いドキュメンタリー映画もある。鑑賞してから話し合いを行うことに意味がある。

江添：今後どういう世界市民になっていきたいかを考え話し合う時間を今回は設けた。

佐藤：また言語技術という科目だが、学園のMissionは創造性豊かな世界市民の育成である、グローバルコミュニケーションスキルとして、学園としては「英語での発信」を本来の狙いに行っているということをお推ししていくと良い。

飯田：GCPの方に話を戻すと、証拠資料を求めない形でのディベートを行っていた。本来のディベートは証拠資料を用いないと話し合いができない、という認識を生徒に上手に伝えていく必要があるのではないかな。法的拘束力ということをお考えると、条約である（拘束力のある）人権規約などを用いて、根拠をしっかりと明示してディベートさせてみたらいかがかな。

石野：探究の中でも、ディベートの置き所をどうしようか、ということをお考えている、主権者教育という意味では、制約がある中での議論であるということをお生徒に認識させることも大切だと感じる。

飯田：（少数の大学生が嘆いているように）単なる感想発表会にならないように注意が必要。

谷：「公共」などでのカリキュラムで、ディベートなどの企画をお今後落とし込んでいければ定着していくのではないかな。

飯田：大学にいくと、GCPを学んだ学園生は話し方のマナーをお彼ら自身の中でもっていると感じる。人間性の育成であるということがわかる。

村上：学園生をお見ていると、GCPで学び培った力の芽が出ている、学園生の存在をお他の学生をおひっぱる力になっているということがとてもよくわかる。

無藤：単なる勉強でお図れる力ではなく、知性などを外部に評価していただける機会をお設けられたら良いのでは。

谷：高校ではPROG-Hを導入し、非認知能力をお計測している。学園生がお大学に進学してからの非認知能力の推移をお見られたらと感じている（個人情報のお観点から難しそう）。創価中学・高校間で、内部進学者と高校から入学の生徒の結果をお比べることで、高校でお必要な支援の形をお効果的なサポートをお考えることができると感じている。

飯田：GCPにおける1年生の企画、SDGsカードゲームに関して、クラスごとに異なる結果がでていた。クラスごとの結果を比較できる場面があったら、それぞれの原因の探究にもなる、比較の観点から相対的な自分たちの立ち位置がわかる。

佐藤：中学校ではGCPのような企画はやらないのか。

塩田：中学は今後、探究の活動の中で行っていく予定、ちなみに英語ディベートは、中学では3年次に行っている。

佐藤：自分たちで問題意識をもち、考えながら方向性を見出していくのが1番の教育だと思う。

村上：分析の仕方やプレゼンのさせ方など、小中高通じて学んで行くことの出来る方向性を模索していくことになるのではと思う。

佐藤：(『女神フライアが愛した国』という書籍を通して)デンマークは世界でトップクラスの幸福度。教育も医療も介護も無料。海外留学も無料。ただし国民の税負担は、7割ほどある。中学2年まで学科の試験は行わない。それまでに行うのは、それぞれの自尊心、独立性、社会性、人間の幹を作ること。それこそが教育だと考えている。人とうまくコミュニケーションが取れたり、人を助けてあげたりすることが大切なのだと考えている。皆で議論させ、解決方法を見出すなど、日常的な重要な問題を生徒にながて、コンセンサスをとつつルールを作らせるなど、「人間」をつくることに力をいれている。世界の中でどう生きるかという視点、これから世界に出る人は国際感覚に敏感にならないとこれから生きていけない。日本の教育は学科偏向になっている。「自分はできない人間だ」と失意を感じてしまう結果になっているのではないか。日本はモデルをまねていくことは上手だが、現在の日本は教育も経済も社会もモデルを失ってしまっている現状があると感じる。

飯田：学科についていられない子もいる、どうしてもついていられない子へのフォローする体制がデンマークは素晴らしい。

村上：陸前高田の教育も、今考えれば少人数教育だった。勉強には苦手意識を持っているが、生活力はある生徒が多い。漁業や大工として従事している人も素晴らしい結果を残している。実は地方にはフォロー体制、Alternativeな教育体制が整っているところが多いのかもしれない。大都市圏では整っていない学校が多いのかもしれない。

佐藤：自分として自分に合った職業を見つけることが大切。学園では進路に対する希望をエッセイにしている、自己推薦書にしていると聞いたが、うまく機能しているか。

村上：大学に入ってから将来の方向性が変わることは大いにあり得る。

飯田：大学側の実感としては、グローバルな視点をもっていると、何をしたらいいかわからない、足元を照らすことができない生徒になっているという印象がある。(学園生は、外務省、国連職員、弁護士、などと自己推薦書に記入している生徒が多い)大学で絞らせる段階になっているが、それでは遅い。探求科の中で学ぶ中で、自分の将来をしっかりと見極められる力をつけて行かれたらと思う。

無藤：探求科の目指している方向性は間違っていない、だが、週1時間で勝負することは大変だと思う。他の教科との関連を上手に考えていく必要があるのかもしれない。

谷：生徒の資質能力をどう伸ばしていくかという視点に教員も焦点を当て始めているが、大学入試などを考えると評価方法の検討などを含めて、足踏みしてしまう現状がある。

無藤：大学入試改革によって高校教育も徐々に変わっていくのではないか。

飯田：AO 入試で早い段階から学生をとっている大学もある、大学入試の多様化は進んでいる、就活も同じように改革が進んでいる、在学しながらフリーランスで働いている学生もいる

谷：「学び」に向かう力をどう培うかは難しい問題であると感じている。これからの社会における「教員」として、培っていきべき力を教えて頂きたい。

無藤：教科指導をしっかりできるのは当たり前。それ以外の事柄にどれだけ好奇心をもてるかどうかが大切。そのような風土を作っていく中に教員養成の根幹があるのだと思う。

村上：たとえば他教科を英語で教えられたりなど、**faculty development**（※「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」のことであり、大学の授業改革のための組織的な取り組み方法）の視点で、先生方のキャパシティを広げていくことも大切だと感じる。

飯田：外部教員との関わりの中で広い視点から物事を考え、自分の教科に落とし込めるような出張システムを作っていければと思う。

谷：外部に飛び出そうとしている教員は増えてきていると感じている。

村上：生徒の交流という面では、国連の軍縮担当事務次長との関わりを実現できたらと思う、直接学生に会いたがっている。

飯田：世界的視点と足元の視点を忘れてはいけない、たとえば小平市での教員との教育交流はあるのか、先進的なことを行なっている学校の見学などを充実させていければと思う

久保：GLP の出前授業は、学園外に広げていく目的で始まった。

村上：陸前高田の FW の際に地元の中学校長が、ぜひ世界のことを教えていただきたいと話していた。学園生に発表してもらう機会があればうれしい。

飯田：生徒の非認知能力の向上の技術に悩んでいる教員がたくさんいる。学園の教員の研修の機会を増やすことができれば。

永嶋：Language Arts と Literature は分けて教えられている。人間性の育成を考えると、文学の重要性を感じている。文学国語と論理国語に分かれる改定があるが、倫理国語を取る生徒が多くいるであろうと感じている。バランスをどのように考えていくべきか。

無藤：倫理国語では実用文のみではなく、文学教材を扱うこともある。文学の読み取りや読解、感動などは大事。思春期の感受性が高い時期に文学作品に触れていくことはとても重要。ただ、限られた授業の時間の中でそれを全て賄うのは難しい。自分の時間のある時に読書に触れてもらうことが大切。高校生になるにつれて読書量は減っていく。感受性豊かな時期にさまざまな本に触れていくことが大切。

久保：朝読書の時間の充実を図っている。小グループでの輪読をしたり、手がかりだけ与えたり（1巻だけ皆で読むなど）、生徒が「自ら読もう」という意欲が湧くように、仕掛けをしている。司書選出の本を生徒に読ませる活動を試みている。すでに実施しているクラスもあり、成果をあげてきていると実感している。

飯田：法と文学というジャンルがある、**Law and Literature** という科目が欧米の **Law School** ではある。人間を扱う「法律」がゆえに、人の心が描かれている文学を学ぶ、論理だけでなく人の感情をあらわしている文の学を学んでいこうという流れがある。文学は必須だという意識を生徒に流していくことが大切。

久保：限られた時間の中でカリキュラムを編成していくのに苦勞しているが、今後も更に検討を重ねて参りたい。



SOKA GAKUEN TIMES

Special Edition

March 2020

‘Championship mentality’ strengthens team

Soka Senior High School’s baseball team came in second place in the 2019 summer Western Tokyo high school baseball tournament, participated by many strong teams. The team is the first in twelve years to reach the final match of the tournament, only to lose to Kokugakuin Kugayama. If Soka’s team had beat Kokugakuin Kugayama in the finals, it would have gone to Koshien baseball stadium, the well-known national high school baseball championship, in Hyogo Prefecture. This time, Soka Gakuen Times gets looks into the secret as to how they accomplished such a feat. The team’s slogan is “Championship mentality,” which means having dignity as a champion and behaving like a champion. This spirit was adopted not only in baseball, but also in school and dormitory lives. This may be a concrete conduct of what the school founder said is “humanity

baseball.”

“We have been trained on the technical playing of baseball, but moreover, we have been trained on mentality and lifestyle. Thanks to the support and cheer from those around us, we learned to become more aware of details in many aspects,” said Takaya Sasaki, former captain of the baseball team.

Also, team manager Tetsuro Katagiri said that this year’s team particularly possessed *makejidadamashii* (unyielding spirit), which has traditionally been treasured in Soka.

For example, teams that do not do well autumn or spring tournaments are less likely to do well in summer. The Soka team did not do well in autumn 2018 and spring 2019, and thus did not gain the seeded position in the summer tournament. However, they had been training hard to overcome their weak points, and eventually



Soka Senior High School’s baseball team at Meiji Jingu Stadium

achieved a dramatic winning-streak over the 2019 summer competition.

Additionally, members not chosen as first strings in autumn or spring are less likely to be selected as first strings in summer. However, Kazamasa Furukawa, who was not chosen as a first string member in spring 2019 due to an elbow injury, recovered dramatically to be a first-string pitcher and pitched nine innings in the final of the summer tournament. In the end, he was selected as a To-

kyo U-17 team member to play in Cuba in December.

Ryusei Nakayama was not selected as a first string in autumn 2018 and spring 2019, but was picked as a clean-up slugger and hit a home run that tied the score in the middle of the game in the final match in summer.

Third year students have ended club activities, but don’t miss a chance to see the performance of present first and second-year students, who inherited the “championship mentality” from their seniors.

‘Active learning’ focuses on the ability to work with others

Soka Senior High School implemented a learning method called “active learning” several years ago. Active learning is said to be a generic name of a learning method in which learners participate in learning activities. Soka Gakuen Times conducted a questionnaire targeting about 1,000 students. It was revealed that the students had a good impression for active learning. (Refer to the graphs).

Soka Gakuen Times interviewed Seiichiro Shioda, the principal of Soka Senior High School about active learning at Soka. The reason why this educational method was introduced is that Tsunesaburo Makiguchi, the founder of the value-creating education society concept, was practicing an education method such as active learning and working on an educational reform in



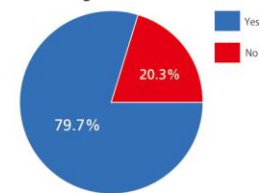
Students work together to tackle different challenges.

line with the policy of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology. In addition, Shioda feels that active learning, which can improve a student’s academic ability and let them practice moral education, leads to the growth of the student’s personality, and is the basis of Soka education aiming at a “human” education. He also said that active learning leads to the improvement of non-cognitive skills. Non-cognitive skills are

abilities that cannot be expressed by numerical values, such as an ability to work hard to achieve a goal or another to interact well with other people. He also said helping others makes people aware of the meaning of their existence, which makes them happy. Thus, the ability to interact well with others is important, he added. When asked what kind of education he would like to pursue in the future, he said he would aim for education that would not leave anyone behind.

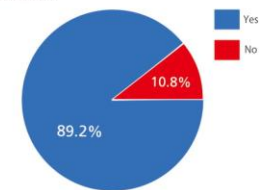
To sum up, the survey found that active learning has helped students take initiative of their studies. It is also found that many students have a favorable attitude toward active learning. Soka will promote more independent learning.

Have you realized the good points of active learning?



Many students are aware of the value of active learning.

Do you think active learning should continue?



Almost 90% of the students answered that the school should continue active learning.

SOKA'S UNIQUENESS

Festival unites students through music

At Soka Gakuen, a music festival is held every December. All music clubs will perform at the festival with cooperation among the campuses of Tokyo Soka Elementary School, Soka Junior High School and Soka Senior High School. Every club member participates at the wonderful festival. Students who belong to a music club take the festival very seriously and practice very hard for it. Soka Gakuen Times interviewed representatives from three of several music clubs prior to the music festival.

First, Soka Gakuen Times interviewed Mitsuki Ikeda, a first year in high school and belongs to the string music club.

"I think the charm of the string music club is that the club members are tied together in a family-like bond. It is easy to cooperate with other club members to create sound from scratch because our club has few members. Because there are joint performances with the brass band club at the music festival, I would like to do my best to perform in harmony with it. I only started string music in high school, but I would like to learn from seniors and do my best."

Next Soka Gakuen Times in-



Soka Gakuen's music festival was held on Dec. 22, 2019.

terviewed Madoka Hamasaki, a second year student in high school who is the student council president and belongs to the Tsubasa chorus club.

"The music festival is the last event before the seniors retire from club activities, so I'll do my best to have them think that they can entrust us. In addition, my mother living in Aichi Prefecture comes to watch the music festival, so I want to impress her. Tsubasa chorus club is a wonderful club because we can encourage each other by sharing each other's problem, and we can be motivated by the clubs' junior members. And as the rep-

resentative of Soka, I would say all music clubs are united as one to impress all the visitors."

Next, Koichi Sato, a junior high school student, is a member of the brass band club. "There are brass band clubs in Tokyo Soka Elementary School, Soka Junior High School and Soka Senior High School. And they will play together in the festival, so it's a precious opportunity for the students. Each member is determined to make the festival successful and everyone happy, so they practice very hard."

The final interviewee Atsuko Takasu, who belongs to the

brass band club and in the third year at senior high school.

"Every member of the brass band club cares about one another. In addition, a detailed practice plan is necessary until the day of the music festival as there is a large number of music titles performed, though there is little time for practice. But we appreciate the time of sharing problems with each other, because we believe that it helps our performance greatly in a better way. This is the last year for me to participate in the music festival. I want to express my gratitude to the people who have taken care of me for three years and to all the people who supported me. Particularly, I want to thank my mother for inspiring me to begin music. And I am making much more effort to make the music festival successful."

In conclusion, the music festival is the only event comprising students from elementary, junior high and high schools, and thus everybody feels strong about making it successful. In addition, participating students will do their best not only for club activities, but also for the people who have taken care of them.

Students use lunch time for interactions, sports practice

Soka Gakuen Times interviewed two people to ask about how they spend their lunch break. The first interviewee was Kazuhiro Saito, who discussed "taiwa," a Japanese word literally meaning "dialogue," he is engaged in during lunch break. The dialogue is something that has conventionally been conducted in Soka as a means of understanding each other; students discuss various topics, such as goals of high school life, the challenges they are taking on, or uneasiness that they have.

The first question is why he started dialogue. He answered, "I have three reasons. First, I want to make friends. Second, I want to know about my partner well. Third, I want my partner

to know my thoughts."

The second question is what kind of topics he usually talks about. He answered, "For example, topics are like, why we started dialogue. But I always navigate my partner because I can initiate profound conversation."

The third question is if he has changed through dialogue. His answer was, "I have become frank about myself."

Lunch break also has another aspect.

The badminton club's leader Fukuki Toh said, "We practice during lunch break. During regular practice time, training programs are fixed. If we want to improve our weak points, lunch break is the best time to do so."

Not only does lunch break

function as practice opportunities, it is a precious chance for club members to decide their goals. They decided that Monday lunch breaks are their meet-

ing time, where they discuss important topics on club matters. Lunch break at Soka is a time for fostering initiative for its students.



Students having fun during lunch time

STUDENT'S AUTONOMY

Broadcasting station helps prepare for Glory Day

Many students support Soka Senior High School's Glory Day, which is one of the three main events of Soka. Among people working on Glory Day, Soka Gakuen Times interviewed second-year high school student Naoko Mizuta

and third-year high school student Yukiko Akase, who worked as leaders of the broadcasting station.

The broadcasting station prepares for Glory Day by getting various equipment ready and collecting information. The two

said they evaluate accuracy of preparatory works. Especially when it comes to placement of equipment, a 1-millimeter swerve of an adhesive tape is crucial, the two said. They endure pressure on their own in order not to make mistakes.

Also, they always try not to forget to show gratitude to others. They said firmly "Because there are clubs and people that ask for our work, we can have this job as broadcasting station managers."

The members of the broadcasting station spend a lot of time with each member when



Naoko Mizuta (right) and Yukiko Akase work as leaders of the broadcasting station

they work. Thus, they build strong bonding regardless of their age. This is how broadcasting station members become close to each other.

Thanks to the broadcasting station, Soka students can go through Glory Day with great success.



Second year students of the broadcasting station who supported Glory Day as core members

The student council: Go-getters of Soka Gakuen

In Soka Senior High School's student council, there are 10 members who have great personalities. As "worker ants," they work hard to make various school events successful.

First, students who want to join the council have to run for the school election, which is held once a year in May. They have to make an attractive

speech to the students in order to get votes. After being elected, they can become members of the student council officially. Then, their activities start. From September to November, they work with committee members who prepare for Soka's three big events — Glory Day, Passion Day and Wisdom Day. These traditional events are momentous because they remind students of their missions and vows to be leaders at the frontline of society, which school founder Daisaku Ikeda has told Soka students. In January, council members plan to hold lunch gatherings with managers of student clubs for socializing purposes. Through them, club managers can share with the councils their struggles. Also, they organize student general meetings and morning assemblies, as well as deliver a welcome speech to important guests from overseas, among other things.

"I joined the council because I wanted to change myself and express my gratitude to Soka with my actions," said Madoka Hamasaki, the president of



The 10 "worker ants" of the student council are working to build Soka High School's foundation. They never forget to smile.

the student council.

She added that she would like to organize events that involve the entire Soka student body, which will enhance the school's atmosphere. She realizes the student council needs to incorporate more options from students to make Soka a better place.

Even though student council members are really busy and

have lots of things to do, each of them never forgets their responsibility and pride as a council member. It is necessary for students in Soka to realize that there are always student council members behind important events, in order to support them without any obstructions. Were it not for the student council, Soka events would not be held smoothly.



Madoka Hamasaki, who is now the president of the student council, gave a speech in front of an audience as a candidate for council.

SOKA'S EDUCATIONAL ENVIRONMENT

Library plays central role in Soka education

Soka Gakuen's elementary, junior and high schools each have a big library. The libraries are indispensable to the school lives of Soka students, and many Soka Senior High School students say the charm of their school is a library. The library at the high school is called Keisetsu Library, named after the Chinese archaic phrase. *Keisetsu* literally means "lighting bugs and snow" and signifies studying hard by reading at night with lights from lighting bugs in summer and snow in winter. The name Keisetsu also signifies the school founder's word of wisdom for students, "Learning by working hard." The founder named the library at the elementary school Roman Library and the one at the junior high school, Platon Library. The three libraries have

about 180,000 books that are not only Japanese books, but also texts written in English. Keisetsu Library has about 100,000 books. Keisetsu Library librarian Sachiko Narumi said one of the good points about the library is its long opening hours from 7:30 a.m. to 7 p.m. Another point is that the quantity of books about the founder is much larger than other libraries.

In addition, Emika Yoshimoto, a high school student and the chairperson of the library committee, recommended students to use Keisetsu Library as a place to study because it is very quiet and has a nice atmosphere. While young people have been losing interest in reading, it is essential for Soka students to make people aware of the importance of



Upon entering the library, visitors will encounter the wooden board that reads the library's name, "Keisetsu Library."

reading, which improve the quality of life.

Many students at Soka Senior High School cherish their own library. The libraries contribute to fostering culture and

humanity of students. Such an environment may be the charm of Soka education, whose mission is to nurture skilled individuals who will be successful within global society.

Students hone their speaking skills at an English workshop

On Nov. 10 and 11, 2019, Soka Senior High School held its English Camp, which is a workshop conducted entirely in English at Soka University in the city of Hachioji. Thirty seven of first-, second- and third-year students attended the workshop. The students interacted with international students in English at Soka University and each group made posters about a variety of themes, such as breakfast, entrance examinations, restaurants and country comparison, by interviewing international students. On the second day, the students delivered presentations confidently in English on posters they made.

The English Camp was held as part of the Super Global High School activities, an educational project of the government. The attendance fee is free and the students who want to participate have only to pay for foods. Before attending the English Camp, the students had to attend several meetings and share their goals for the camp with their group members. They also decided their poster's themes beforehand.



English Camp participants interact with international students at Soka University.

On the first day, the students took a lecture on how to make a good poster from Darwin Guiana, who teaches at Soka University. After having lunch, they interacted with international students. The Soka high school students interviewed them to collect information on culture of their home countries in preparation to make posters. Each group of Soka high school students got help from one of the international students to make posters. The students learned how to express words in English from them. The camp not only had tasks such as making posters,

but also fun events such as tea break and dinner with the international students. The students enjoyed talking with them about favorite anime, movies and games. After returning to the lodging house, the students continued to make posters by cooperating with their group members.

On the second day, the students practiced poster presentation in the morning. The poster presentation was held in the afternoon. Several native English language teachers at Soka Senior High School came to see their posters. After finishing the closing ceremony, some international students suddenly started a dance performance. Some students and a teacher attended this and many cheered wildly. They enjoyed the English Camp until the end. One of the students said, "It was fun to get over the language barrier without being afraid of failure."

SOKA GAKUEN TIMES

The Soka Gakuen Times was created by a group of 21 volunteers of first, second and third-year senior high school students, and published by Soka Senior High School in Kodaira City, Tokyo, in cooperation with The Japan Times, Ltd.

Publisher: Seichiro Shioda, Principal, Soka Senior High School
Project Supervisors: Suguru Matsumoto, Masayoshi Ishino (Soka Gakuen)
Project Coordinator: Kenichi Koyama (The Japan Times)
Contributing Editors: Sayuri Daimon, Yosuke Naito, Diana Macalanda, Jasmin Pendon, James Souilliere and Minoru Matsutani (The Japan Times)
Editor: Eita Chiba
Vice Editors: Masayuki Hara, Kaneko Azuma
Staff Writers: Mio Sugano, Leo Tanaka, Mitsuki Ikeda, Yoshihiro Sasaki, Tougo Fukuda, Ayaka Miki, Junko Haga, Kazuya Nakagawa, Mariko Mitsuzawa, Hazuki Mukai, Mirei Yoshikawa, Daichi Yoshikawa, Rika Watanabe, Keiko Yokomizo, Katsuya Goto, Yui Otsu, Yuma Yamamoto, Yuri Takasu

Contact: 2-1 Takanodai, Kodaira-Shi, Tokyo
 〒 187-0024 Japan

Web site: <http://www.soka.ed.jp>

平成 29 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 4 年次

研究報告書

令和 2 年 3 月 30 日

発行 学校法人 創価学園 創価高等学校

〒187-0024 東京都小平市たかの台 2-1

電話 : 042-342-2611(代表)

印刷 株式会社 コモダ印刷

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 2-36-12

電話 : 042-321-0721

